

# アジア現代女性史

Contemporary Women's History in Asia

2021 第15号  
アジア現代女性史研究会





## 『アジア現代女性史』第 15 号の刊行に際して

2021 年度の 1 年間、コロナ禍の不自由が続き、アジア現代女性史研究会の活動もインターネットに依存することが増えた。発足以来、「紙」にこだわってきた私たちも、「ついに」というべきか、デジタル・アーカイブを整えることになり、今岡良子さん、チョモさん、熊野沙織さんの活躍で、ホームページにバックナンバーをアップした。が、本棚に並ぶ「紙」の本の価値を信じ、今後も本誌の「紙」の刊行を続けたいと思っている。

本号は、オンラインで開催された二つの会議に刺激を受けて編集した。一つは、2021 年 8 月に開催された、朝鮮戦争時代の WIDF 調査団をめぐる国際フォーラムである。もう一つは、10 月に開催された、「女性・戦争・人権」学会のシンポジウムである。

8 月の国際フォーラムは、韓国の金貴玉さんに招待を受け、日本から永谷ゆき子さんと私が参加した。この国際フォーラムをめぐって、その前後に宋連玉さん、洪玗伸さん、藤井豪さんたちと意見交換ができたことにも励まされた。拙稿「WIDF 調査団報告『血のさけび』」は、国際フォーラムでの報告をもとに書いた。また、「朝鮮戦争 70 周年特別企画—戦争、女性を記憶する」は、金貴玉さんが製作に協力したドキュメンタリー作品である。

10 月の「女性・戦争・人権」学会には李青凌さんや他のコロナ禍のために来日できないでいる中国人学生たちを誘って参加し、それをきっかけに西田千津さんに「エスペランティスト長谷川テルの反戦思想」の寄稿をいただいた。また、この学会で長谷川テルをめぐるディスカッションで志水紀代子さんが「この場に鈴木裕子さんがおられたら、よりの確なコメントをくださったと思う」と発言された。大越愛子さんを追懐する本号のページの編集は、そのときの私の感慨から構想が始まったといえる。

大越愛子さんは 2021 年 3 月 15 日に他界された。それからちょうど 1 年が経つ。大越さんはアジア現代女性史研究会の創立メンバーであり、病氣療養の生活に入られてからも、精神的な支柱だった。心の中には大越さんは今も生きている。本号には、アジア現代女性史の構築に大越さんが果たされた貢献に感謝し、研究会発足前後の資料をも収録し、私たちの思い出を寄せ合った。

2022 年 3 月

藤目ゆき

## 目 次

第 15 号の刊行に際して 藤目ゆき ……1

## 特集 大越愛子とアジア現代女性史研究

特集趣旨 アジア女性史研究に寄与した大越愛子さん ……9

女性の周縁化を覆す＜アジア女性史＞へ 図書新聞 2433 号より ……10

対談 大越愛子 VS 藤目ゆき 司会・構成 大橋由香子

鈴木裕子『日本女性運動資料集成を編集して』 ……14

『日本女性運動資料集成』推薦者たちのメッセージ ……16

(米田佐代子・上野千鶴子・住井すゑ・落合恵子・松尾尊兌・土井たか子  
・金森トシエ・高橋喜久江・もろさわようこ・加納実紀代)

アジア現代女性史研究会結成前後の思い出の写真 ……19

北原恵 20 年前アメリカ西海岸で、大越さんといっしょに考えた「フェミニズム」 ……22

宋連玉 大越愛子さんとの縁に念う ……24

鈴木裕子 大越愛子さんを偲んで～その学問と行動力に学びたい ……26

## エッセイ・研究ノート

エスペランチスト長谷川テルの反戦思想

ー 日中戦争下の反戦放送に至るまで ー 西田千津 ……40

湖南省岳陽市における「慰安婦」生存者の聞き取り調査報告 李青凌 ……58

朝鮮戦争 70 周年特別企画ー戦争、女性を記憶する(訳:鄭玪汀、監修:永谷ゆき子) ……66

モンゴル国の番組「モンゴルの 100 年の歴史を創った

100 人の女性たち」の中の E.チメッドツェレン 今岡良子 ……82

WIDF 調査団報告『血のさけび』 藤目ゆき ……100

執筆者&翻訳者 紹介 ……126

カバー写真 解説 ……127

**アジア現代女性史**  
**Contemporary Women's History in Asia**

**アジア現代女性史研究会**  
**CAWA(Association for the Study of Contemporary Asian Women's history and Gender)**

---



## 特 集

# 大越愛子とアジア現代女性史研究



## 特集趣旨

## アジア女性史研究に寄与した大越愛子さん

「女性・戦争・人権」学会は1997年に発足し、私はその少し後、大越愛子さんに直接呼びかけていただいて入会した。「これまでの男性中心の歴史が封じ込めてきた「女性に対する暴力」の究明を通して、支配・従属の権力構造を明らかにしていきたい」という設立の目的はもちろんだが、何よりも、「慰安婦」問題がクローズアップされていた当時、実践的に問題に取り組もうとする大越さんの姿勢に賛同し、迷いなく仲間に入れていただいた。

大越さんのアカデミックな専門は哲学であり、自分は歴史学の専門家でないとしばしば言われた。が、『フェミニズム入門』（筑摩書房、1996年）のようにフェミニズムの歴史を叙述する女性史的な著作もあった。同書は当時から今日まで私が学生によく勧めている名著である。そんな大越さんがあえて歴史学の専門家ではない、と強調していたのは、歴史修正主義がはびこってアジアの女性たちが体験した暴力の歴史が歪曲され抹消されてしまうことへの危惧、歴史の改ざんに反対する明確な意思の表現でもあったことと思う。

大越さんは歴史研究者である鈴木裕子さんを厚く信頼された。日本のフェミニストの戦争協力を歴史的に検証する鈴木さんの仕事に対して、世間には「告発史観」といった揶揄や反発を向ける人もいた。しかし大越さんは、侵略戦争協力という「大日本帝国のフェミニズム」の過誤を、たんに専門家が占有していればいい過去の話と見るのではなく、今を生きる実践的フェミニストとして主体的に引き受け、その克服を志す姿勢があざやかであった。鈴木さんとタッグを組んでジェンダー視点で見る日韓歴史共同教材作成に尽力され、金子文子や長谷川テルのような、植民地化された朝鮮や侵略を受ける中国のひとびとの側に身を寄せて闘った女性たちの存在を重視された。

そんな大越さんの姿勢がよく表れている資料として、『日本女性運動資料集成』全10巻が刊行された折に『図書新聞』に掲載された、大越さんと私の対談や鈴木さんが刊行に寄せて書かれた文章を紹介する。

2003年にミリアム・シルバーバーグさんに招かれて大越さんと北原恵さんといっしょに渡米したこと、アジア現代女性史研究会を発足させて最初の取り組みになった2004年5月の長野県での合宿、12月に来阪したミリアムさんと吹田で再会した時のこと、韓国の淑明大学からゲストを迎えて大越さんも駆けつけてくれたこと、など、楽しかった思い出は尽きない。そんな大越さんの存在に励まされて、アジア現代女性史研究会を発足させ、活動を続けていくことができた。大越さん、ありがとうございました。

藤目ゆき

## 女性の周縁化を覆す＜アジア女性史＞へ

図書新聞 2433 号 1999 年 1 月 30 日

『日本女性運動資料集成』全 10 巻＋別巻刊行によせて  
女性の周縁化を覆す＜アジア女性史＞へ  
大越愛子 VS 藤目ゆき 司会・構成 大橋由香子

—— 鈴木裕子さん編集の『日本女性運動資料集成』全 10 巻につづいて、別巻『総目次・人名事典・索引』が 98 年 12 月に出て、ついに完結となりました。きょうは、「女性・戦争・人権」学会の発起人として戦争と性暴力の問題に精力的に取り組んでいる近畿大学教員の大越愛子さん、『性の歴史学』（不二出版）で 97 年度山川菊栄賞を受賞した大阪外国語大学教員・藤目ゆきさんに、この資料集の意義についてお話しいたします。実は私も資料集を読みながら「女のからだへの国家管理と優生思想」について書いたのですが（近藤和子編『性幻想を語る』三一書房）、研究者にかぎらずフェミニズムに関心を寄せるすべての人の財産だろうと思います。最初に、資料の具体的な紹介も含めて、藤目さんからお願いします。

藤目 私は女性運動の歴史に関心をもって勉強を始めた者なので、こういう資料集が出るのはとてもありがたいことです。ドメス出版の『日本婦人問題資料集成』が出てから 20 年以上たったわけですが、資料を編む側の視線も深まっているのを感じます。

図書新聞

1999.1.3 付  
図書新聞

1999年1月30日(土曜日)

THE BOOK REVIEW PRESS

図書新聞 2433号

『日本女性運動資料集成』全10巻＋別巻刊行によせて

女性の周縁化を覆す  
＜アジア女性史＞へ

大越愛子 おおごし あいこ

1946 年生まれ。哲学・宗教学・女性学専攻。主書、『フェミニズム入門』（筑摩書房）『近代日本のジェンダー』（三一書房）『闘争するフェミニズム』（未来社）『女性と宗教』（岩波書店）

お話しを聞かされたのは、大越愛子さんと藤目ゆきさんです。大越さんは「女性・戦争・人権」学会の発起人として、戦争と性暴力の問題に取り組んでいます。藤目さんは『性の歴史学』で、97年度山川菊栄賞を受賞しました。この資料集は、大越さんが編集した『日本女性運動資料集成』全10巻と、別巻『総目次・人名事典・索引』で構成されています。大越さんは、この資料集を通じて、女性の周縁化を覆すことを目指しています。藤目さんは、この資料集を通じて、女性の周縁化を覆すことを目指しています。



今回、産児調節運動や、売春をしている女性の側の運動など、従来の女性史の見方からは入ってこなかったセクシュアリティに関する資料が意欲的に取り入れられていることが何よりもうれしいし、これからの研究に使わせていただけます。

もうひとつ、植民地と日本という着眼点をはっきり出ている点も大きい。9巻に「植民地下の廃娼運動と『接客婦』のたたかい」として、朝鮮、台湾、「満洲」、樺太での資料が、3巻には「在日朝鮮女性運動」が入っています。原文は朝鮮語のものを、日本語に翻訳して収録された資料もある。日本史研究者が朝鮮語を習得して資料を読むことは、なかなかできなくて目の前にある資料も読めなかったのも、うれしいですね。今までは李順愛（イ・スネ）さんや、宋連玉（ソン・ヨノク）さんなど、在日の女性研究者の成果を見せていただくしかなかったのが、直接アプローチできます。

**大越** 第3巻には、帝国主義への抵抗運動として、天皇制に抵抗した管野すが、金子文子の軌跡、非常時共産党のハウスキーパー問題、在日朝鮮女性運動などが入っています。警察による女性共産党員の訊問調書、「赤い女」「赤い妖花」などとスキャンダラスに描く当時の新聞報道など、体制側の資料からは、すさまじい女性差別が読み取れる。当事者の書いたものと、それら体制側の資料とを編者の鈴木さんは実にバランスよく配置しています。

これによって、反体制運動として美化されてきたものに内包されていた問題が浮かび上がってくる。ハウスキーパー問題は、その象徴ですね。それから、管野すが、金子文子、長谷川テルたちは、あれだけ果敢に闘ったけれど、男性たちとの関係でしか論じられない傾向にあり、彼女たちが提起した問題がはたして受け止められたのか、考えさせられました。

全体を通して3つの点に注目したいですね。

70年代の女性史が、エリート女性の運動を中心に描かれていたのに対して、労働運動や公娼制度の現場、植民地の女性など、女性差別と帝国主義体制の抑圧の中で苦しみ、そこで立ち上がった当事者の女性たちの声が資料として編纂されていることの意味が大きい、それが一つです。

二つめに、日本一国内だけでなく、アジアの中での女性運動というふうに視点を広げていることが、これからの女性史研究や近代日本のコロニアリズム、ポストコロニアリズムの問題を解明する上で意味があると思います。

三つめに、構成の仕方をみていくと、現在の鈴木さんの運動の視点と重なっていることがわかります。戦前の女性たちの善意を口実とした廃娼運動や、母性主義に基づく国家への一体化が、いかに権力に利用されていったかということへの痛烈な反省が感じられます。現在、従軍「慰安婦」問題に関して、アジアと連帯しながら果敢に闘っている女性運動に対して、日本のフェミニズムは華やかな論争はしているけれど、「女性のためのアジア平和国民基金」に対してもきちんとした態度を示し得ていない状況にあります。そのことと、戦時中の平塚らいてうたちがフェミニズムという点は打ち出しても、女性運動のある層の声には応えなかった歴史の事実とが、鈴木さんには重なって見えるのではないかと。彼女の無念な思いが、この編集に反映されているように見えます。

—— 廃娼運動については、第8巻、9巻の「人権・廃娼」で1880年代末から戦時期までを丁寧に追い、婦人矯風会を中心にした廃娼運動が、当事者の売春婦たちをどのように捉えてきたか、またそれが純潔報国運動になっていく過程が明らかになっています。「醜業婦」という言葉に象徴的な廃娼運動の問題点については、藤目さんが『性の歴史学』で説明されていますね。

藤目 廃娼運動における「醜業婦」観ということへの指摘が、これまでになかったわけではありません。「婦人新報」と「廓清」が復刻されているので、事実としては知られていた。ただし、それが女性史の中で、どういう意味をもつのか位置づける作業は、弱かったように思います。

どんな運動でも、何らかの限界は常にあるわけです。どんなりっぱな人格にも欠点はあるように。そういう意味で、廃娼運動の「醜業婦」観も「それは時代的制約で、いたしかたないことだ」と片付けられていた。それが、今回のような大きな資料集の中で、一方で娼妓の闘争や植民地の接客婦の資料とともに配置されると、醜業婦観の限界が、単に時代の制約一般でもなければ、誰にでも欠点はあるといった類の問題ではないことが浮き彫りになってくる。つまり、ある物事を捉える全体性において、致命的な問題だということが、この資料集成によってはっきりすると思います。

大越 数多くある資料から、「これだ」と編者である鈴木さんが選んで、「歴史とは何か」と問い直しているわけですね。従来、不可視にされていた歴史的事実に光をあてることで、新たな問題提起をされています。

鈴木さんに対しては、歴史実証主義とか、あるいは女性史の古典的パラダイムにとどまっていて、フェミニズム以降のパラダイム転換を生かしていないといった批判を、上野千鶴子さんが『ナショナリズムとジェンダー』（青土社）などでしています。なぜ反論しないの？と鈴木さんに聞いたことがあるんです。すると、「自分の仕事で反論していきたい」とおっしゃっていました。彼女の答えが今回の資料集成だと感じました。

藤目 歴史学が女性運動に貢献できることはたくさんあるというか、歴史認識がないところで運動はできない。アカデミックな歴史学以前に、自分の母や祖母たちの世代はどうやってきて、私たちはどうしようとしているのか、その認識がなくては始まらない。

上野千鶴子さんの言い方だと「フェミニズムと女性史の不幸な出会い」となるんだけど、歴史学で仕事を重ねてきた人は、新しいフェミニズムやパラダイム変換という発想をなかなか受け入れられない傾向は確かにあります。逆に、フェミニズムを中心的に担ってきた人は、社会学や文学や哲学の人で、歴史ということにわりと疎かったりする。現象としては確かに不幸な出会いです。

歴史学という学問領域は、ほかの学問にくらべて、パラダイム変換という発想から遅れるんです。実証科学ですから、理論的に「こうだ」と内心で思っても、それが具体的な史実に照らしてどうなのかという検証作業にすごく時間がかかる。歴史研究者は、百、千、万の史実の中から、資料的に検証できること一つしか出さない。地道で時間がかかる検証作業がないところで、宙に浮いた理論を出しても、根っこがないとを感じるわけで

す。歴史学に自分の居場所をおいて、女性運動にもかかわっていきたい、という私にとって、鈴木さんはいつも勇気づけられる存在です。新しいパラダイム・新しい視点とともに、具体的な歴史事実が提示されることで、力強い女性運動をつくっていけるのだと思います。

**大越** なるほどね。私は「未来」98年12月号にも書いたように（「思想系学会と『慰安婦』問題」）、最近、哲学や倫理学や思想系のいろんな学会に積極的に参加して、女性の視点が欠けていると異議申し立てをしています。ヘーゲルやカントに明確な本質主義的ジェンダー観があるという例をあげますが、具体的な発言をあげつらうよりも、彼らのこのような差別的言説を自然的なものにみせていた、当時の知のパラダイムとは何なのかと問題提起しています。けれど、なかなか理解されない。柔軟な知性が必要ですから。

それに比べると、ジェンダーの視点からパラダイム全体を揺るがすような膨大な資料がこれだけたくさんあるのに、歴史学はなぜ発想の転換ができないのか（笑）、不思議なんです。

**藤目** それはまさに、事実が膨大だからです（笑）。膨大な資料をどう整理するかが歴史で、重箱の隅をつつくような基礎作業が不可欠になる。解釈や評価がない中立的な「誰がどう見てもこれが事実」を証明することこそが歴史家の値打ちだと言う人もいます。

私は『性の歴史学』を書いた時、けっこう大人しく書いたつもりだったんですが（笑）、あれでも歴史学の世界では、自分の問題意識に引き寄せて書き過ぎている、と非難する人もあるわけです。

**大越** 資料をふまえた上で、しかも女性の視点を打ち出していて、これぞ女性史だと私は思いましたけど……。

**藤目** そう言われるのはありがたいのですが（笑）、歴史学の体質があるんです。社会学をはじめ、理論でパツと斬る人たちの言い方に「なにを根拠にそれを言うのか」と疑問を抱いてしまうのが歴史研究者なんです。そう見れば面白いだろうけど、でも何年の何月何日の、あの事件はどう見るのかしら、という歴史学固有の発想があつて、うかつに言えないというか、非常に大人しくなっちゃう。

でも、そこにとどまっていたら不幸なわけで、女性学や女性運動には学際性が求められるし、学際的でないと発展しない。それをいかに具体化していくか考える上でも、今回の資料集成は手がかりを提供してくれます。



## 『日本女性運動資料集成』を編集して まだ欠落を十分に埋めえていない日本の女性史

鈴木裕子

女性運動史や労働運動史に関心をもち、勉強し始めてからほぼ四半世紀の歳月が流れた。ちょうど人生の半分の年月を重ねたことになる。1993 年秋から刊行し始め、このたびやっと完成をみた『日本女性運動資料集成』全 10 巻別巻第 1 巻は、この意味でいや応もなくわたくしの人生の一区切りにもなる仕事で、ある種の感慨がわたくしを襲っている。

まずは運動の先達に対する感謝の気持ちである。若いころ先輩の運動史研究者から、運動史の研究者は、運動があつてはじめて自らの営為がある、ということを教わった。今から考えればこれはしごく当然のことなのだが、この言葉はまずあるがままに運動史の現実を目をこらすことの重要性をわたくしに強く示唆してくれた、と思う。

そして、多くの運動の先達の方がたとの出会いがあつた。その人びとはわたくしの研究上の師であるばかりでなく、時として人生のよき師でもあつた。直接間接的にせよわたくしはその方がたの生き方から影響を受けている。

右からうかがっていただけるかと思うが、わたくしの勉強の出発点は、オーラルヒストリー、いわゆる聞きとり作業にある。どこまで聞きとれたか今から思うと心もとない感が強くするが、今となつてはもういたしかたない。わたくしが結果的にオーラルヒストリーの対象としてお話を聞きできた方がたは、社会主義運動や無産運動に身をおいた人びとが圧倒的に多い。

ところでその方がたからきちんとお聞きできなかった空白の時代がある。「戦争」の時代である。

あの戦争中、日本の社会運動は崩壊し、いわば「総翼賛」の時代に突入していくのだが、運動者にとって生きにくいあの時代をいかに身を処したのか、あるいはまた「戦争と翼賛」の構造を支えていったのだろうか。こういうことがらに対してこちらの問題意識が希薄で、十分に踏み込むことができなかったのが、大きな心残りとしてあつた。

不十分ながらも、『日本女性運動資料集成』の各ジャンルで「戦争」の時代を扱ったのは、右に述べたような「欠落」を認識させられていたからである。しかし、この「欠落」は十分に埋められただろうか。答えは否である。

わたくしは、この 10 年間、日本の女の一人として、女性史研究者として「従軍慰安婦」問題と向きあってきたが、この問題を知るにつれ、女性を含めた日本人の戦争責任認識の「欠落」を思い知らされている。また女性史研究に身をおく立場の一人として、戦後日本の女性史研究が内在的な戦争責任追及を怠ってきたのではないかとの感が否めない。

「欠落」を十分に埋めることができなかったのは、編者であるわたくしの力量不足はもとより、右に述べたような戦争責任認識や研究状況もあるのではなからうか。全巻の編集を終えてみて、そう思われてならないのである。

いま、日本の女性史研究はまぎれもなく過渡期を迎えている、と思う。乱暴な言い方を許していただければ、従来の研究では、女としての視点がしっかりと根づいていれば、それなりの時代把握ができた。しかし、今後はそうはいくまいと思われる。日本に踏みつけにされた、いやいまも踏みにじられているアジアの人びとの民衆女性の眼差しをきちんと受け止め、彼女たちに学ぶことがなければ、21世紀に向けた女性史への展望は切り拓けまい。

アジア女性史のなかの日本女性史の再構築に遅ればせながら取り組みたいと、いま痛切に思う次第である。

# 参考資料：日本女性運動資料集成



鈴木裕子 編・解説

A5判・上製・函入・総8,604頁

全10巻・別巻1

揃定価181,500円(揃本体165,000円+税10%)

定価各巻16,500円(本体15,000円+税10%)

'93年11月～'98年12月配本完結

## ■推薦

米田佐代子(山梨県立女子短期大学教授)  
上野千鶴子(東京大学文学部社会学科助教授)

住井すゑ(作家)

落合恵子(作家・女性著者の本の専門店  
ミズ・クレヨンハウス主宰)

松尾尊兌(京都橘女子大学教授)

土井たか子(衆議院議員)

金森トシエ(元・読売新聞社婦人部長、  
編集委員、前・県立かながわ女性センター館長)

高橋喜久江(日本キリスト教婦人矯風会)

もろさわようこ(女性史研究家)

加納実紀代(銃後史研究)

|      |         |                      |
|------|---------|----------------------|
| 第1巻  | 思想・政治 1 | 女性解放思想の展開と婦人参政権運動    |
| 第2巻  | 思想・政治 2 | 婦選運動の「方向転換」          |
| 第3巻  | 思想・政治 3 | 帝国主義への抵抗運動           |
| 第4巻  | 生活・労働 1 | 女性労働者の組織化            |
| 第5巻  | 生活・労働 2 | 無産婦人運動と労働運動の昂揚       |
| 第6巻  | 生活・労働 3 | 十五年戦争と女性労働者・無産婦人運動   |
| 第7巻  | 生活・労働 4 | 生活・労働の現場での女性運動       |
| 第8巻  | 人権・廃娼 1 | 自由廃娼運動と廃娼連盟の創立       |
| 第9巻  | 人権・廃娼 2 | 廃娼運動の昂揚と純潔運動への転化     |
| 第10巻 | 戦争      | 官製婦人団体による運動と戦争体制への動員 |

## 『日本女性運動資料集成』 推薦者たちのメッセージ

『日本女性運動資料集成』に寄せられた推薦の言葉  
(不二出版カタログより):

すでに他界された人も多い。  
資料集成の刊行に寄せられたメッセージは  
1990年代の女性史をとりまくバックグラウンドの  
ふんいきをそのまま伝えており  
これ自体が女性史の貴重な資料となっていると考え  
(編集部)  
収録する。



### 戦争と性差別の歴史を見つめなおす 土井たか子（衆議院議員）

❖ 敗戦の年、一六歳だった私は焼け野原に立ち、戦争が一番弱い女や子供を最も悲惨な目にあわせることを実感しながらも、新憲法が生まれ、民主主義が現実のものとなり、女性が初めて参政権を手にした——その新しい風をうけて帆をいっばいに張って大海原に突き進むような感じを抱きしめていた。

❖ しかし、実は戦争は、戦後は終わっていないかった。敗戦後五〇年近くたって初めて「従軍慰安婦問題」が大きく取り上げられるようになったのもその象徴的な事柄である。この問題こそ日本人の侵略戦争へのそして性差別への認識の問題なのではないか。

❖ 今回刊行される『日本女性運動資料集成』の編者が、「従軍慰安婦」問題で日本人の戦争と性の問題をどうとらえているか、鈴木裕子さんであることは偶然ではない。鈴木さんは人にも知られた女性労働運動史のエキスパートであるが、「従軍慰安婦」システムは日本固有の公娼制度にその根がある。歴史的観点から解明を試み、また戦争に協力することで参政権を得ようとした女性運動の旗手たちの限界を、敬愛のまなざしと共に見つめることを忘れない、これからの女性史研究を拓く学究である。日本の女たちが自分の立っている地点をしつかり見極め、自分の歴史を自分のものとするために、本書の刊行はまさに待望の書といえよう。



### 女性史研究のための宝庫 松尾尊光（京都橘女子大学教授）

❖ 日本近代女性史の各分野にわたって数々の業績をあげてこられた鈴木裕子さんが、このたび、長年の蓄積を生かして、女性運動の資料集成を編集して世に送られることになった。

❖ その内容は、時期でいえば自由民権期から一五年戦争期まで、分野でいえば、労働組合運動・社会主義運動・無産婦人運動・農村婦人運動・職業婦人運動・部落解放運動・廃娼運動・産児制限運動・婦選運動等々多岐にわたる。とくに、これまで比較的研究のおくられていた戦時下の、女性労働運動や官製婦人団体、さらには国民精神総動員運動や勤労動員の関係資料が数多く含まれているのが注目される。

❖ 歴史を、あるいは歴史から学ぶには、直接に史料に当たるのが一番である。居ながらにして、これまで世に現われなかった重要な史料に数多く接する機会が与えられるのは、まったく有難い。近年女性史研究の進歩はめざましいものがあるが、そのさらなる発展に、このたびの運動資料集成の刊行が、大きく貢献することは、疑いをいれぬところである。





女性史の論争を豊かに  
米田佐代子 八山製菓立女子短期大学教授

❖ 歴史学界で女性史という分野がようやく注目されはじめた。女性史研究のための基礎的な資料はほとんど公開されていなかった。それまで一般資料とされてきた公文書や政治・経済関係の記録類には、女性が登場することも少なかつたし、女性の立場が考慮されることも皆無に近かつたからである。ただでさえ研究条件にめぐまれない女性史研究者が、さらに地を這うような努力で新聞や雑誌から資料を掘り起こさなければならぬというのが、これまでの実情であつた。

❖ 最近になっていくつかの資料公開がすすんできたが、今回の『日本女性運動資料集成』は、女性史の中でもスポットのあたりにくい労働運動や消費組合運動、水平社や日本共産党の活動、戦時下の翼賛運動までひろげた資料集になるということで、おおいに注目される。女性たちの運動にはジグザグのコースがあり、評価はむずかしい。戦時下の女性の動きなどは、このころ大きな論争となつていくテーマである。この資料集は、そうした議論をさらに盛んにする上で役に立つと思つし、これが引き金となつてより新しい資料の発掘がすすむこともあるだろう。そのことは、女性史だけでなく日本の近現代史像を見直すことにもなると思うのである。



女性運動史を功罪ともに見つめるために  
上野千鶴子 八山製菓立女子短期大学教授

❖ 日本には、戦前からつよい女性運動の伝統がある。「大和撫子」のステレオタイプに反して、日本の女性たちは、明治の初めから自由民権運動の一翼をなつてきたし、その中から女権運動や男女同權思想も、早い時期に成立した。「青鞥」の女たちは、なにも突然変異の産物ではない。彼女たちの背後には、婦人參政權運動や、婦人會の盛衰運動などがあつた。エリート的女性たちはばかりではない。あの米騒動をひきおこしたのは女の力だつたし、女工の労働争議を組織する労働組合運動や、非法法の共産党の運動に身を挺する女性たちもいた。

❖ だが、女の運動は、いつでも男性支配を告発し、被害者を救済する運動ばかりとは限らない。一五年戦争下では、国家協力の大政翼賛体制にすすんで巻きこまれていったのも、女の運動だつた。女性運動を、その功罪ともに見すえて冷静に振り返りかえる成熟した歴史的視点を、ようやく持てる時点にわたしたちはいる。不出版から刊行される『日本女性運動資料集成』はそのためのかつこの素材を提供してくれる。編集の労を多量にしたい。



歴史的な刊行をよろこぶ  
住井する(八作著)

❖ 女性史というこれまでは、有名な、はなやかな女性を取り上げたものが多かった。今度刊行される『日本女性運動資料集成』は、底辺の女たち——女工や女給、娼妓、部落の女性など——の活動を中心に集められている。一番大事な部門であるのに出版するには一番遠い、そうした出版がなされるのが、自分のことのように嬉しい。

❖ 全二〇巻の目次をみてみると、一九〇二年生まれのわたしには、自分の青春史を辿っているような気がしてくる。わたしは戦前も戦後も国の権力に真向かつてきたけれど、思えばその歩みは単純ではなかつた。「婦人戦線」の活動も中途半端で恥ずかしい気がするし、戦争反対に徹すべきだつた農民運動がついに抵抗しきれず、国策に沿って行くのもこの目で見たことだつた。

❖ 農民文学の会合で東京に行き、時の政治家におもねる作家たちの卑屈さにくやしい思いをしなから、まっくらな牛久沼沼の怪をあるいて帰つたのを覚えてる。だが、わたし自身も無力で、思想のある童話を志すのが精一杯だつた。

❖ この資料集は戦前を対象としているせいもあるが、今の女性には、なんて不自由な時代だつたのだろうとあきれるだろう。けれどもあながちそうでもない。なぜならいまだって天皇を頂点として、差別は厳然としてわたしたちの前に、社会秩序面で立ちはたかっていることだから。これとの闘いの戦略・戦術のためにも、私たちは過去の失敗にも学ばねば、と思つ次第である。



叛史としてのHERSTORY  
落合恵子 八作著 女性運動者の本の専門店ミズナレヨンハウス主宰

❖ 歴史(History)はいつも、彼の物語(His story)ばかりだつた。そこには、女がいない。存在しながらも、消されてきた。

❖ 自由民権期以降から、敗戦までのおよそ八〇年間。激動の近代を、女たちがいかに、消されてきた一人称の自分を取り戻していったか。

❖ 幕しの場で、労働の場で、家庭で、それぞれの女たちが繰り広げた運動の歴史は、そのまま、「叛」の緋文字を敢えて自らに受け入れた女たちの、個々のherstoryの記録でもある。

❖ 彼女たちの日々を辿ることで、私たちは、私たちがいまだどこに居るのか、どこに向かおうとしているかを再確認することができる。

❖ 被害性ばかりで、戦時の加害性も含め、女たちの確かな運動史を集めた本書は、決して過去完了したものではなく、私たちの今と未来に繋がる現在進行形の姿を映し出していると見えるだろう。



# 女性解放は一代にしてならず

高橋喜久江

日本女性運動資料集の刊行を喜ぶものひとりで、日本の男性優位社会にあって女性運動はとかく無視または軽視されてきたように思っていました。ひとつはこれは女性に限らないのかも知れませんが、運動の記録をのこすことに意を用いず、目前のなすべきことに多くの時間と労力を割いてしまうことが、結果として記録することをおろそかにすることになり、後代の評価が高くない原因にもなるというわけです。これは自戒をこめての感想でもあります。

このたびの二冊版による刊行は、従来の不備を補正する点からも歓迎するものです。とくに今後の歴史を担う若い女性たちが、先輩たちが現代と比べものにならない苦境の中で——なにしろ女性には選挙権も財産権も結社の自由も制限されていた時代なのですから——健闘してきた経験に学び、次代に活かして、ださることを切望します。「女性解放は一代にして成らず」なのですから。



# 女性と社会の未来を拓くために

金森トシエ

過去に目を閉じる者は現在に対しても盲目になることは、第二次世界大戦終結四〇周年にあつたのウィッツェンガー・西独(当時)大統領の言葉としてあまりにも有名なが、それは新聞社で婦人部記者として約二〇年間働いた私の胸にも深く響く言葉であつた。

さまざまな女性問題の取材を通して、それらが基本的には女性の人格・伝統的性別役割分業にかかわっていることへの私の思いは、近代の女性史をたどつて紙面でおかあさんの百年史(など)幾たびかの企画連載を試みる作業へつながつていった。さらに第二の職場となつた女性センターで神奈川女性史一巻を一〇年がかりで編む作業ともなつた。

それは、過去の検証なしに現在への確かな認識は生まれ得ず、現在の確かな把握・認識なしに未来の展望を拓くことはできないと、私が痛感したからである。

大変な努力と綿密な作業を今回刊行される一〇巻は、女性と社会の未来を拓くための貴重な資料であり、関係機関はもとより心ある女性そして男性にも広く活用されることを強く願っている。



# 「負の歴史」を繰り返さないために

加納実紀代

なんともおどろくべき企画である。

ここに集められたばう大な資料には、マスメディアで活字になつていくものだけでなく、片々たるパンフレットやビラの類も多い。それらを収集し取捨選択し分類し、全一〇巻にまとめ上げる編者と版元の労をおもつとき、ばう然とし慄然とし、ついでふかく頭をたれ、そして肅然として襟を正す。

この一〇巻には、戦前日本の性抑圧と階級抑圧に抗して立ち上がった女性たちの魂の叫びと苦闘の歴史がぎっしり詰まつている。長年女性運動史発掘に努力を傾けてきた編者ならではの内容だが、さらに貴重なのは、民族抑圧に抗した朝鮮人など在外日本人女性の闘いの軌跡や「昭和一五年戦争と女性運動の関わりを不す資料が収められていることだ。

性抑圧に抗して闘ってきた女性たちが、つよまるファシズムのなかで後退戦を余儀なくされ、ついに戦時体制に飲み込まれて民族抑圧の荷担者となつていく。とりわけこの過程を明らかにする第一〇巻は、残念ながら、過去の歴史としてでなく現在の意味を持つ。

日本のフェミニズムがこうした「負の歴史」を繰り返さないために、本資料集の一冊も早い刊行が待たれる。



# 女たちの人権確立の足あとを辿る

もろさわよつこ

日本の近代は働く女たちにとっては、夜明け前の闇。

封建的男女差別のくびきにきびしくつながらたまま、資本制の利潤追求のくびきにもまたつながらた女たちは、文明開化の歯車を、奈落の底で牽引する働きを重くになわされている。

自由と平等、基本的人権の確立を目ざして世界史の近代は開華しているが、日本においては、「正政復古」がかけられ、うしろ向きに近代が開巻、その歪みのしわよせは、女たちにまたもつとも重く。

この重圧の中から光りを求めて身じろいだ女たちのうごきや解放像のありようなど、それに力ぞえた男たちのうごきもふくめて編集されている本資料集は、女たちの人権確立の足あとを辿る上で、欠くことのできない貴重な資料集であり、先人の志をいまにうけつぎ、さらなる新しい状況を創りだすためにも参考になることさぶる大い。



(上) 空港に迎えに来てくれた UCLA の院生たちと。

アジア現代女性史研究会  
結成前後の  
思い出の写真

米国旅行



(右) オークランドで開かれた女性の会議。左から藤目、大越、高里鈴代さん  
2003年5月31日。



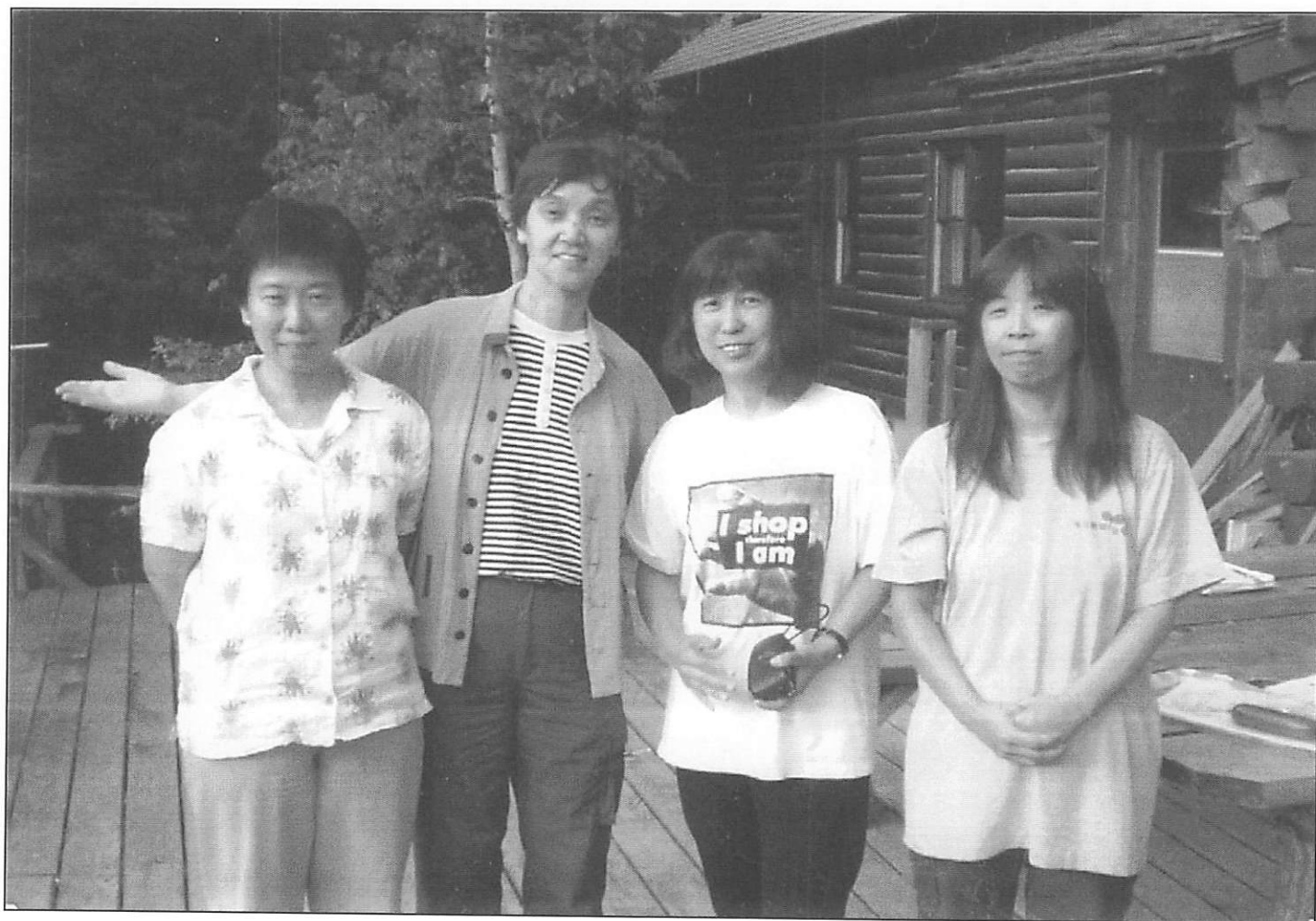
UCLA で開催された「Japanese Feminists Speak Out」のシンポジウム、2003年5月30日。  
左はミリアム・シルバーバーグ、右が大越愛子さん





ミリアムさんの家。2003年6月1日。  
左から大越さん、ミリアムさん、藤目

♪2004年5月、長野県で合宿。  
左から古沢希代子さん、大越さん、北原さん、藤目





2004 年 12 月 大越さん、来日したミリアムと吹田で再会



2006 年 10 月 23 日、韓国からのゲストを迎えて

スクミョン  
韓国淑明女子大学のアジア女性研究センターから訪問したチ  
ョン・キョンオク先生とユ・スクラン先生と交流。箕面にあつ  
た大阪外大の藤目研究室。一番右は茶園敏美さん。



## 20 年前アメリカ西海岸で、大越さんといっしょに考えた「フェミニズム」

北原恵

2022 年 2 月下旬、「ちょっと、電話してもいい？」と私。

その直後にかかってきた、藤目さんからの電話。もう何年もお会いしていないけど、声は変わらず懐かしく、あっという間に私は 20 年前にタイムトリップした。

...

2003 年 5 月 27 日から 31 日まで、藤目・大越さんと私の 3 人で、アメリカ西海岸に行ったことがある。4 泊 5 日のうち、2 日は機内だったから、実質 3 日間。目的は、UCLA の歴史学者、ミリアム・シルバーバーグさんが企画した「Japanese Feminist Speak Out」というイベントで、それぞれレクチャーをするためだった。私は日本のフェミニストのアートを紹介し、二人は日本軍「慰安婦」問題や占領期の RAA のことをしっかりと講演した。

私はこのときまで、大越さんも藤目さんもあまりお付き合いがなく、親しくお話するのは初めてだった。でも、ロサンゼルスではミリアムの自宅に泊まり込み、ほぼ合宿状態で寝食を共にしたので、さっぱりとした気性の二人とは気が合って、あっという間に親しくなった。毎晩、ミリアムのマンションでお酒を少々飲み、挙句の果てにリビングに敷いてあったミリアム愛用の真っ白な絨毯に、赤ワインのボトルを倒してしまったことは、一生罪の意識から逃れることができないだろう。

UCLA の講演の翌日、私たち 3 人はミリアムの計らいで、オークランドで開かれた NCRW (National Council for Research Women) という学会にも参加させてもらった。そして大越さんとチョン・ヘンジャさんと私の 3 人で、「The Neo-militarization of Japan」という発表を行ない、女性国際戦犯法廷のことやフェミニストのアーティストの活動について話す機会もいただいた（このことは忘れていたのだが、発表時に使ったパワポが出てきて思い出した。）。

NCRW では、アメリカ合州国におけるフェミニズムの現状や限界を目の当たりにして、衝撃を受けつつ、皆で真剣に議論したことをよく覚えている。たとえば、アメリカのフェミニストがイラク戦争に反対すると言っても、その理由には様々なレベルがあることがよくわかった。戦争そのものには反対ではないが、性犯罪など極力なくす方向にすればよいと考えているフェミニストから、アメリカ帝国主義の存在そのものを許さないという立場まで。当然、政府の政策を補完する役割を果たしている前者のフェミニストがマジョリティで、後者はとても少なかった。

また、基調講演を行なった緒方貞子さんが、軍事基地と基地周辺での性犯罪の増加は関係ないと述べたことに対して、会場からのブーイングはもちろんのこと、沖縄から参加していた高里鈴代さんやシンシア・エンローさんがただちに批判したことも聞いた。印象的

だったのは、学会ではやたらと「empire」という言葉が氾濫していて、「悪いempireと犠牲者」という単純な二項対立に構造化されてしまっていたこと。アメリカ帝国主義を名指ししない。つまり、自国や自分たち自身への批判的視点が、決定的に欠如しているのである。ミリアムは、このような大国アメリカのフェミニズムの現状をしっかりと見てこい、という意味を込めて、私たち3人をオークランドに送ってくれたのだった。

翻って、今の日本と世界の状況はどうか。プーチン政権によるロシアのウクライナ侵攻が、先週（2月24日）に始まり、経済制裁だけでなく、日本の核武装だの、自衛隊経験者のウクライナへの志願だの、やたらとマッチョな英雄主義を煽る言説がメディアに溢れている。一方、フェミニストたちの反戦・非戦の声はまだまだ弱いように思う。大越さんなら、きっと何か発言したはずだ。20年前、大越さんと一緒に西海岸で、一緒に食べ、眠り、笑い、考えたことを、私はこれからも忘れない。

## アジア現代女性史研究会結成前後の思い出の写真 米国旅行



（左）UCLA 女性学センターの前でミリアム・シルバーバーグの学生たちと記念写真。

左から竹内美智子さん、北原恵さん、グレゴリー・ヴァンダービルトさん、大越愛子さん



UCLA、2003年5月30日。左から北原恵さん、鄭幸子さん、大越愛子さん

## 大越愛子さんとの縁に念う

宋連玉

大越さんと私が巡り合ったのは金学順さんの衝撃的なカムアウトがきっかけとなっている。「慰安婦」被害者についてともに考えようと、直後に企画された琵琶湖合宿で初めてお会いしたように覚えている。しかし常にグループの一員として参加していたために、個人的なお話を交わすことはなかった。

私は、中・高一貫のミッションスクールで学んだとき在日朝鮮人であることで受けた「いじめ」により、長い間、出口の見えないトンネルのなかで苦しんだ。そのトラウマから、日本の中産階級の「お嬢さん」たちへ拭えない不信感、警戒心をもちつづけた。さまざまな差別に抗して活動し、研究している人であっても、まさかの時に豹変して差別的な本音を露わにするんじゃないかと恐れているところがある。

大越さんと個人的な話をするようになったのは、2003年、カナダ・バンクーバーに滞在していたときだった。大越さんが UBC 女性研究所の招きで来られた時に、大越さんの講演を聴きに行ったと記憶している。異国での再会には人恋しさを埋めてくれる魔力があるのか、大越さんと「鎧」を脱いで話せる機会が持てた。大越さんのカナダ在住の友人宅にもごいっしょさせていただいたし、カナダに滞在していたご子息の婚約者の方も紹介していただいた。

大越さんと日本で再会したのは、それから多くの時間が経過した後だった。病に倒れた大越さんが息子さんたちの住む東京へ大阪から転居して来られたのだが、転居先はさいわい私の住む所からそう遠くないところだった。久々にお目にかかった大越さんは、ご病気の後遺症で歩行するのが不自由そうだったが、なによりも心痛めたのは以前のように流暢にお話しできなくなっていたことだった。

フェミニズムがさまざまに分裂し、とくに自己解体を拒否し、「男性」中心主義体制へと回帰する「フェミニズム」に対し、舌鋒鋭く批判してこられた大越さんだけに、ご病気になられたことがどれほど無念だったろうかと思うと、かける言葉が容易にみつからなかった。さいわい、お母さん思いのお子さんたちのサポートで安心した日常生活を送っておられた様子を胸をなで下ろした。

いま、再会が叶わなくなった大越さんに対話するには、書かれたものを丹念に読むしかない。追悼するつもりで、私の心にとまったところを以下に紹介してみたい。

戦後日本体制の批判的分析にあたって、大越さんは丸山真男、柄谷行人、鶴見俊輔、吉本隆明らをあげているが、とくに鶴見に対しては男性中心体制の枠組み内においてのジェ



ンダー問題の利用に巧みだった知識人との評価を与えている<sup>1</sup>。

鶴見は、私が韓国で学んでいた1972年に、詩人、金芝河に面会するために韓国へ行っている<sup>2</sup>。当時、金芝河は、軍事独裁政権を批判した詩「蜚語」の筆禍事件で逮捕され、過酷な拷問のために病に冒され、馬山(釜山の西)の療養院に入院していた。鶴見によると小田実に命じられたということだが、金芝河に面会して鶴見は「あなたを死刑にするなという趣旨で、世界中から集めた署名があります」と言ったそう。すると金芝河はたどたどしい英語で、「あなたたちの運動は、私を助けることはできないだろう。しかし私は、あなたたちの運動を助けるために、署名に参加する」ときり返した。軍事独裁政権を支える日本の政治を変えずして、署名を携えてきた鶴見への、あるいはそれに連なる「良心的知識人」への痛烈な批判である。

この署名集めに関わった、日本を代表する知識人たちは後に「国民基金」を創設していくのであるが、大越さんは馬山への面会や「国民基金」とは別に、鶴見の思想を「自身のジェンダーが内包する加害性を内省する視点を持たずしてジェンダーを論じるのは(中略)他の性を彼らのジェンダー体制の中へ囲い込み、しかも両者の権力関係を隠蔽している」が「彼らはそのことに無自覚」だと批判する。署名の件、「国民基金」と大越さんの批判するジェンダー論がみごとに底辺でつながっているのである。

鶴見の「転向研究」は、日本的知識人の内面研究としては優れているが、そのように変容することで戦争に加担していった彼らの加害的側面への問題意識は希薄だと大越さんは批判する。鶴見のように問題を心理主義的に還元する姿勢は加藤典洋に受け継がれていることも見逃してはいない。

今日の日本リベラル派の頹落を早くから察知し、戦後日本体制の批判的分析を体系化しようとしていた大越さんの遺された課題を継承することで、私なりの追悼を続けていきたいと思う。



<sup>1</sup> 「フェミニズム的転回るとき」『フェミニズム的転回—ジェンダー・クリティークの可能性』白澤社、2001年。

<sup>2</sup> 鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの』岩波書店、2004年、336頁。

## 大越愛子さんを偲んで ～その学問と行動力に学びたい

鈴木裕子

### 大越さんとの出会い

大越愛子さんが亡くなられて早くも1年たつ。3月15日が命日である。わたくしが大越さんに初めてお会いしたのは1992年のことだったと記憶している。当時、関西大学の人権問題研究室の委嘱研究員であった源淳子さんから連絡があり、関西大学で「慰安婦」問題で講演してほしいとのことであった。源さんと大越さんは古くからの友人であった。わたくしの話は学生向けのものであったが、みな熱心に聞いてくれたように思う。ちなみにこの時の小冊子がある。この時、大越さんや宋連玉さんも聴講されていた。この時はただお会いしたまでである。帰りのタクシーでは宋連玉さんとご一緒になり、宋連玉さんから関西にきたら、ぜひ銭湯に行ったらと勧められた。

いわゆる「従軍慰安婦」問題に関心を持ったのは学生時代であった。当時、わたくしたちは大学の近くの早稲田奉仕園の一室を無料で借りて、学生だけの朝鮮史学習会をしていた。テキストは姜在彦氏のものが多かったように思う。なお、姜在彦氏は、労働経済学者竹中恵美子氏の夫であり、のちに、わたくしが雑誌『青丘』で「フェミニズムと朝鮮」を連載していたころ、東京に来られ、お目にかかった。行き付けの小料理屋でご馳走になったことがある。姜在彦先生は、いかにも豪放磊落な方であった。この時のわたくしはいまのように太っていないく、濃い緑色の縦縞の夏のスーツを着ていた。先生がそれをみて「よく似合っていますね」と言われた言葉が気恥ずかしくも記憶に残っている。先生のお連れ合いは竹中恵美子先生で、山川菊栄記念会で時々お会いする機会がある。惜しくも先生は数年前に物故された。

さて話が遡るが、早稲田大学には語学研究所があり、朝鮮語は随意科目として自由に学べた。一時は姉妹校の高麗大学への留学も考えた。が、朴正熙の軍部独裁時代でもあり、諦めた。

また大学での女子大生の集まりを持ち、中国・韓国朝鮮問題、女性差別などについて話し合ったりした。時には泊まりがけで出かけ、千葉県海岸で遊んでいたときには、高波が襲ってきて、危うく一人が波に連れ去られていかれそうになったようなこともあった。のちにこの会は、卒業後も暫く続けられ、高清水の会と命名された。

朝日新聞記者であった松井やよりさんを高田馬場の喫茶店ルノアールにお呼びしてお話を伺ったりした。講師代はコーヒ一杯であった。松井さんは話題が豊富で、次から次へと言葉が繰り出された。みな熱心に耳を傾けたが、アジアに関する話が多く、細かくは忘れた。わたくしたちはアジアへの志向が強かった。わたくしたちのなかには不遜にもエリート女の話なんか…といったような言を吐く人もいたが、まことに申し訳ないと思うこと

しきりである。後年、「慰安婦」問題で松井さんに再会したおり、その頃のことを松井さんにお伝えしたが、記憶がないとのことであった。

朝鮮語を齧り、中国語も齧ったり、先輩の話を聞き齧り、振り返ってみれば未熟だったものの、いまでは懐かしい思い出である。さらに、朝鮮語をいち早く習得した林久美子さんが朝鮮総連から映画を借用し、「ピパダ」（血の海）や「花売る乙女たち」などの朝鮮映画を学内で上映した。また在日朝鮮人学生で組織された留学同の女性たちとも交流した。ちなみに彼女らの会はヨソンモイム（女子会）といった。金紅純さん、左大淑さんなどの名前を記憶している。在日への差別、特に女性への差別や家父長制の厳しさといった深刻な話をお聞きしたが、少人数の集まりだったので本音を吐くことができたに違いないと思う。一方、彼女らは明るく、時に朝鮮語の歌をたくさん披露してくれ、わたくしたちも口伝いに歌った。いま、彼女たちはどうしておられるだろうか。

前記の林久美子さんはその後、朝鮮語を教える一方、朝鮮舞踊の魅力に取りつかれ、さらに修練するために朝鮮民主主義人民共和国へ何度も渡った。チマチョゴリ姿の林さんは美しかった。その後、彼女は朝鮮総連との関係を断ち切り、いまは高校の朝鮮語（韓国語）教師としての生活を送っている。あと1年で定年という。ちなみに彼女のお母さまはいまの小松川高校（当時、東京府立第7高等女学校）の出身で、わたくしの大先輩である。小松川というと、例の小松川（高校）事件があり、1958年李珍字さん（1940年生まれ。江東区亀戸出身の在日朝鮮人）が女子生徒殺害の嫌疑で逮捕され、最終的に死刑確定し、大岡昇平、木下順二、吉川英字ら文化人らが助命嘆願運動を起こした。翌62年死刑執行された。享年22歳であった。

わたくしは小松川高校でソフトボール部に所属していた。小松川は全国大会に出場するくらい強いチームであった（わたくしは小さいころから草野球を楽しんでいたくらいでソフト部に入るのが目標であった）。屋上のベランダ伝いに長い空間部分があり、女生徒の遺体をそこで発見したのが英語教師であるソフト部監督で山本某氏であった。もとより山本氏から事件の内容を直接、聞いたことはない。のち本を通して知った次第である。

5、6年くらい前であろうか。同窓会誌に恩師消息欄みたいな項があり、山本氏が小松川事件に触れて、あの時は事情聴取を何回もされ、実に迷惑だったという類のことを述べており、事件の本質などにはまったく触れず、わたくしの山本氏への反感はさらに深まった。わたくしはようやくソフト部に入ったものの、この監督との折り合いが悪く、2年生の途中で退部した。

大越さんのことを語る前に自分のことばかりで恐縮である。が、事のついでに小学校時代のことを少し語っておきたい。当時、川沿いに襦袢屋やくずを扱う仕切り屋（通称・くずやさん）の人びとが集住（バタヤ部落と呼ばれた）し、そこの子女子弟たちが同じ小学校に通っていた。彼女たちや彼らは学校で明らかに差別されていた。ちなみにその小学校に通う児童の家庭は貧困層が多く、わたくしの家もご多聞に漏れなかった。わたくしは幼いながらも、その差別を理不尽なものと思った。特に女子児童が苛められているのには心が痛んだ。わたくしは比較的力があつたが、複数の男子児童を相手にたたかうのは憚られた。こうしたことが後年、被差別部落や朝鮮韓国問題に関心を持つきっかけとなった。もう一つ、わが家でもようやくテレビが買えるようになった頃、天皇裕仁や彼ら一族に対し、マスメディアがやたらと敬語を使い、特別扱いをするのを目にし、「人の上に人がいる」と

不当に思った。これものち天皇制問題に関わるようになったいきさつだったのかもしれない。

### 「女性・戦争・人権」学会の設立

話はずーっと飛んで、1994年暮れに愛知県の知多半島にある塩辛い温泉に大越、源淳子、わたくしの3人が集まり、一晩かけて「女性・戦争・人権」学会を発足すべく、協議を重ねた。いわゆる「慰安婦」（日本軍性奴隷制度）問題の解決に寄与するための学術的・理論的・国際的な学習や運動体験を深めていくための学会づくりの骨子を決めていくための集まりであった。趣意書・規則案などを決め（註）、発起人の推薦をそれぞれが出すことになった。当初は、日本軍性奴隷制学会との会名も浮上した。

こうして次の8人が発起人となり、学会への入会を呼びかけた。井桁碧、大越愛子、志水紀代子、鈴木裕子、角田由紀子、中原道子、源淳子、持田季未子の各氏であった。事務局は近畿大学の大越愛子研究室に置き、大越さんは総務と機関誌の編集とおおわらわであった。代表に志水、会計に源さんが就任した。

（註）規約第2条に「本会は「女性・戦争・人権」にかんする学際的研究を行い、性暴力・性差別の根絶に寄与することを目的とする」という。

### 「国民基金」反対運動での共闘

94年6月、思いがけなくも村山富市社会党首班内閣が出現した。一度、政権を逃した自民党が復活するために、同党の野中広務、亀井静香氏らが村山氏を担ぎ、社会・自民・さきがけの3党連立政権を誕生させた。社会党は政権入りするために安保廃棄から安保保持、自衛隊違憲から合憲に転換、また国家賠償政策を放棄し、のちに民間基金→国民基金設立というように、社会党の党是を放棄し、支持者からの顰蹙を買った。社会党内部の討議も得ずに強引に進めたため分裂、96年新社会党が創設された。

「慰安婦」問題解決のための運動も分裂し、一部は「民間基金」に移った。だが、国家・政府の責任を「民間」（個人）へと転換させるこの構想は、被害者・被害国の支援組織、韓国挺身隊問題協議会や台湾の台北市婦女救援福利事業基金会（婦援会）等の反対が大きかった。要するに日本政府は手続き上も拙速に転換を進めたことになる。

こうして95年7月、いわゆる「民間基金」構想が具体化され、女性のためのアジア平和国民基金が設立された。いわゆる「国民基金」の発足である。後年の呼び名は「アジア女性基金」の略称が使われる。「国民基金」が悪評で、途中で「アジア女性基金」と改称したものと思われる。「国民基金」は、先にも述べたように被害者に対する国家責任・公的謝罪や賠償を忌避するために、責任問題を棚上げし、民間から集めた募金（のちに償い金と称した。韓国では慰労金と呼ばれた。英語にすればチャリティマネーになるうか）を被害者たちに渡し、これをもって一件落着を図るものであった。「国民基金」の蠢動が最も激しかったのは、96年5月から夏くらいまでが第一期で、この間、一週間に一度くらいの割合で開かれる国民基金の理事会・運営委員会にわたくしたち東京勢は会場的高级ホテルに押しかけた。マスコミの頭撮りを終えた後、報道陣もわたくしたちもシャットアウトさ



れた。多分、彼らは食事に舌鼓を打った後、会議に入るようであった。というのは、前述のようにわたくしたちは会議の席からは締め出されたからである。時には深夜に及び、終電に間に合わず、公園で過ごしたこともあった。会議の後、報道人へのブリーフィングがあり、わたくしたちもなかに紛れ込み、最後は「つぶせ『国民基金』！ 実行委員会」の名で、抗議文を原文兵衛理事長の前で読み上げて、引き上げた。長引く闘いに仕事を持つ女性たちのなかには身体を壊す人も出た。

以上にみたように日本では 95 年から 98 年まで「国民基金」反対運動は高揚したが、詳しくは新聞報道されなかった。

「国民基金」の問題点について簡単に要点のみ提示しておきたい。第一に、本来、女性の人権問題であるべき日本軍性奴隷制問題を、金銭的問題へと歪曲したこと、第二に、被害当事者の意向を無視したばかりでなく、その間に分断の楔を打ち込もうとしたこと、第三に、天皇制国家の起こした戦争犯罪の事実と本質を隠蔽したことなど、その犯罪性は明らかである（なお、「国民基金」について、詳しくは拙著『戦争責任とジェンダー』未来社、1997 年、及び拙編著『資料集日本軍「慰安婦」問題と「国民基金」』梨の木舎、2013 年）を参照されたい。いまここでは「国民基金」反対運動について詳しくは述べられない。

95 年 12 月の大規模な「女性のためのアジア平和国民基金」反対！国際会議には、東京・早稲田大学国際会議場で海外からの被害者や支援団体の人びとが参集し、3 日間にわたる抗議活動を行った。会場となった早大国際会議場大ホールは満杯となった。大阪からは源淳子さんがパネリストとして参加。忘れられないのは、97 年 2 月に肺癌で亡くなった被害者姜徳景さんが会場に姿を見せ、「慰安金」反対の意思をはっきりと訴えたことである。なお、96 年 1 月、石川逸子（1933 年生まれ）さんたちとわたくしはソウルの現代病院であったと思うが、姜徳景さんのお見舞いにいった。苦しい息の中から細い石川さんの腕をとって「この子は……」と言いつつ、抱きしめられた風であった。ちなみに姜徳景さんと石川さんはそんなに年齢が変わらない。

## 関西と東京が連動して「国民基金」反対運動の集会

96 年は、「国民基金」の暗躍は激しく、第二期といえる。小さな集会が各地で行われ、そのほか、関西（大阪）と東京と連動して、10 月、11 月と、比較的、規模の大きい集会を開催した。「国民基金」即時中止を求める大抗議集会 in 大阪を 10 月 26 日、ドーンセンター大ホールにおいて「国民基金」撤回を求める関西・女のネットワーク主催、つぶせ「国民基金」！ 実行委員会（東京）・「従軍慰安婦」問題を考える女性ネットワーク（福岡）共催で開催。特別参加として尹貞玉先生が来日された。この呼びかけ文の一節に「この 8 月 14 日には、法的責任に全く触れない橋本首相の欺瞞的な『詫び状』と『償い金』を手渡すと称して、被害者たちをさらし者にするような式典が『国民基金』によって強行されました。さらにそれを映像で流し、マスコミで喧伝させ、あたかも問題が解決の方向に向かっているかのようなイメージ操作を行なっています。〔以下略〕」

この呼びかけ文は、文章の特徴からみて多分大越さんの起案にかかるものと推測される。この集会に、わたくしたちの東京勢、福岡の女性たち、さらにその他の地域からも参加した。

続いて11月23日、早稲田大学国際会議場内国際会議室で「国民基金」即時中止を求める抗議集会 in 東京を開催、主催は、つぶせ「国民基金」！実行委員会。共催は前記の「関西」や福岡のネットワークであった。この集会ではわたくしが基調報告を行ったが、特に強調したのは次の一節であった。「日本軍性奴隷制被害者の勇気ある名乗り出と告発によって、私たち世界と日本の女たちは、女性の権利が国家権力によっていかに侵害されていたのか、さらに女性への暴力は、人権問題であることをはっきりと認識することができた。20世紀の掉尾を飾る、この被害女性の勇気ある行動は、いずれ世界女性人権史に特筆大書されることだろう」と。

これらに先立ち95年8月15日、大越さんたちの「日本近代を問うフェミニズムの会」（他に井桁碧、岡野治子、志水紀代子、源淳子、持田季未子）は、「女性のためのアジア平和国民基金」への反対声明を発表している。この声明も文の調子からいって大越さんが起案したものと思われる。三節ほど引用したい。「なぜなら私たちは過去の事実に対峙することなく、自身の手でその真相を掘り起こすことなく、苦しみと強制された沈黙の中に閉じこめられていた元『従軍慰安婦』の方たちを放置してきたからである。」「私たちは徹底的に問題の本質を明らかにし、原因を究明し、当事者の責任を問い、国家の犯罪を告発し、個々の被害者に対する国家からの謝罪と補償を要求していかなければならない。それのみならずこうした人類史上例のない組織的な性暴力、性犯罪を生み出した土壌、文化背景、性意識、権力体制、人間観を徹底的に究明しなければならない」「かつて日本のフェミニズムは、アジアへの日本の植民地化、侵略戦争を肯定し、さらに積極的に加担していくという愚挙をおかした。それがどのような善意の美名の下で行われたにせよ、それは無知と傲慢さの結果であり、そのために数限りない生命が失われ、生活が踏みにじられ、女たちの性が無惨に犠牲にされていったことを直視していかなければならない。戦後のフェミニズムも、こうした自分たちの戦争責任を明確に自覚してきたとはいいがたい。そして今、再び日本のフェミニズムは非常に危うい状況にある」。

96年から翌年にかけて、「償い金」支給の対象国（韓国、台湾、フィリピン）である韓国において、「国民基金」側の「償い金」支給工作は猛烈を極めた。第三期ともいえる。支援団体である韓国挺身隊問題対策協議会からは、この妄動を何とかしてほしいとの声が伝えられた。折から日本滞在中の韓明淑さん（のち金大中政権で初代女性部長官。盧武鉉政権のもとで環境部長官、初代女性首相を歴任）が、滞在先の小石川の富坂キリスト教センターに、松井さんとわたくしを招き、相談されたことがあった。韓明淑さんはわずかの期間に日本語を習得し、日韓の連絡役をされていた。わたくしたち「つぶせ「国民基金」！実行委員会」の主催する集会「奥野・板垣発言に抗議し『国民基金』の撤回を求める女たちの集会」（96年7月9日）でお話しもされた。韓明淑さんのお話は戦前・戦後の日韓関係史に基づき、示唆深かった。ほんの一節のみ紹介する。「簡単に言うと、今度の奥野、板垣発言は、やはり戦後日本の閣僚たちと政客たちがしてきた妄言と筋道を同じにするものであり、その根は、結局日本軍国主義と天皇制に深く根ざしていると思います。彼らの言動はただ『妄言』に止まるものではありません。それは明らかに国連の人権規約B規約で禁止されている『戦争宣伝行為』です。そればかりか、軍『慰安婦』被害者たちとアジアの民衆に対する我慢できない侮辱であり、国連人権規約に対する全面的な挑戦です」（鈴木・前掲資料集303～307頁、所収）。

韓明淑さんはその後、米国に留学する夫君朴聖煥氏（いわゆる「人民革命党」事件で10年以上拘留された。米国から帰国後、聖公会大学教授に就任）と一緒に米国に渡られた。

「国民基金」との闘いは依然として課題として残された。つぶせ「国民基金」！実行委員会、NCC（日本キリスト教協議会）、カトリック正義と平和協議会、PCA 連絡会（国際仲裁裁判を成功させる個人賠償を実現させる連絡会。なお、「つぶせ」とPCA 連絡会は会員がほぼ重なっていた）は、日本国内で、個人賠償・国家賠償を実現させ、「国民基金」に反対しようという声を高めるため、前記の関西、福岡をはじめ多くの人に呼びかけ、翌97年7月27日、神田・学士会館において緊急国際集会をもった。これを第四期と呼ぼう。

「国民基金」の跳梁跋扈に強い危機感を感じたわたくしたちは、97年7月、日本国内の反対世論を高めるために「＜再びの凌辱＞を許すな！許すな『国民基金』・緊急国際集会」というやや規模の大きい抗議集会を神田の学士会館で開き、韓国・台湾・フィリピンから代表をお呼びし、国民基金の犯罪性を公にした。呼びかけ人には、韓国から、尹貞玉、李効再、金允玉、韓明淑、台湾から沈美真、莊國明、胡台麗、フィリピンからインダイ・サホール、ジューン・ロドリゲスの各氏、日本からは木村京子、源淳子、志水紀代子、大越愛子、松井やより、鈴木裕子、笠原洋子の各氏がなり、連絡先はわたくしのもとにおいた。大阪からは大越さんや志水紀代子さんらが参加した。この集会で明らかになったことは、被害各国で「国民基金」は被害者・支援者の間をいかに分断するか、被害者同士の間をいかに亀裂させ、猜疑心をもたせるかということで、もう一つの犯罪を重ねたことが明らかになったことである。この点において韓国挺身隊問題対策協議会共同代表の金允玉氏の言葉は端的に語っている。「韓国で『アジア女性平和国民基金』は結果的に平和をもたらすのではなく不和をもたらしました。被害者と被害者、運動団体と被害者、運動団体と運動団体の間に誤解と葛藤、分裂と不信だけを呼び起こしているのです」。ここには皮肉が込められていることを察知できる。なお金允玉先生は流暢な日本語を話される方である（詳しくは前掲拙著、前掲編著書を参照されたい）。

こうして「国民基金」の蠢動は止まるかにみえたが、依然として妄動しており、このため、わたくしたちは韓国の尹貞玉先生や金允玉先生と連絡を取りながら、98年2月大越、志水紀代子、笠原道子さんと一緒に訪韓し、相談し合った。この時、わたくしたちは、ソウルの日本大使館前で行われる水曜デモに参加し、手製の大きめな布きれに前日の夜、大急ぎでつくった、大越さんが描いた漫画（何やら和田春樹氏風）に、韓国語で「私たちは国民基金に反対する」のスローガンを「国民基金に反対する日本女性会」98年2月4日、をかざして声を挙げた。大越・志水・笠原洋子さんが写真に写っている。多分、この写真はわたくしが撮影したものである（前掲・資料集収録の口絵写真）。この他、尹貞玉先生を交えて大越さん、志水さんと一緒に箱根に遊んだり、韓国の忠清道にあった金子文子のお墓、記念碑に4人で一緒に行ったりした日々が懐かしく思い出される。いま、金子のお墓は聞慶の朴烈の記念館の敷地内に移されている。先生とわたくしはそこにも伺ったことがある。



### 第5回日本軍「慰安婦」問題アジア連帯会議で責任者処罰を中心に協議

日本軍「慰安婦」問題解決運動が膠着状態に陥っているとき、98年の第5回日本軍「慰安婦」問題アジア連帯会議がソウルで開催され、責任者処罰を中心テーマに協議した。新たな提案として松井やよりさんが、20世紀最後の年、2000年12月に「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷」の開廷を提案した。ここ数年の「国民基金」側による被害者や支援団体の分断工作や意思疎通をはからせないとする動きは被害各国に亀裂を齎していた。前記のように「国民基金」（アジア女性基金）は、被害者への国家責任に代えて、個人へと責任を転嫁するもので、多くの被害者と支援団体は反対していた。こうしたとき松井さんの提案は、戦争犯罪者、「慰安婦」制度の導入・制度化に大きな責任を有する戦争指導者を裁くという観点からみると有効であり、満場一致で可決をみた。

### 大越さんの山川菊栄論

山川菊栄記念会は、山川菊栄生誕110年、没後20年を記念して、その前段階として連続学習会「いま<<山川菊栄>>を読む」全5回を開催、第5回目は2000年6月24日、大越さんをお招きして「山川菊栄とナショナリズム」について、わたくしとが論議した。ここでは紙幅も限られており、大越さんの見解を主にみていこう。

とはいえ、まず、山川のフェミニズム思想の特徴について簡単に纏めてみよう。第一に山川のフェミニズム思想は、ジェンダーの視点に根差し、とりわけセクシュアリティの問題に早くから着目していたこと。第二に彼女の女性論が生活者の思想と運動に結びつくこ



とを心掛けていたこと。山川は極力、観念的理論を排し、具体的に物事を捉え、解決策を提示しつつ、論理を展開したこと。第三に山川菊栄は民族排外主義、ナショナリズムを超え、民族差別に苦しむ人びととの連帯を模索したこと。日本のフェミニスト及びフェミニズム運動は自国の植民地支配に対して「不感症」であったこと。言い換えれば一国主義的女性運動であったこと。日本軍性奴隷制問題に関わるなかでそのことを痛感している。

大越さんは、過去から現在におけるフェミニズムの文脈のなかで山川菊栄の位置がどういうものか。山川が先駆的に言っている諸問題を今日のフェミニズムが十分に生かしきれてないのはなぜなのか。現代においては、男性・女性を対立的に捉える二元論的思考にこそ問題があると指摘されている。彼女ら（山川、ローザ・ルクセンブルク、ハンナ・アーレント、シモーヌ・ヴェイユら）が提起した問題を現在のフェミニズムに欠落しているものとして学び取る必要があるという状況がある。資本主義や国家主義、植民地主義が最も苛烈であった時代に、彼女たちは生きぬき、女性や植民地の人びとをはじめとした弱い立場にいる人たちが苦しめられている状況に直面し、そこにどういう問題があるかを鋭く解明した。

次いで大越さんは、フェミニズムは市民社会における女性差別への抵抗として始まり、第二期フェミニズムにおいては私的領域に貫通している性差別、家族における差別の構造を告発してきたこと。90年代になって日本軍「慰安婦」問題やユーゴスラビアでの集団強姦など戦争と性暴力の問題を契機に「国民国家」そのもののなかにジェンダー分離政策があることが解明されてきたこと。現代のフェミニズムの課題をまとめてみると5点あるとし、①国民国家の枠内にあるフェミニズムの一国主義が問われていること。②19世紀以来の欧米覇権主義に随行していた「帝国のフェミニズム」が問題化されていること。③「女性」という表現で隠蔽されていた女性間の階級・民族・人種・文化的・性的指向などのさまざまな差異を明らかにし、そこに貫通している権力作用を浮き彫りにしていくことで従来のフェミニズムが陥っている罟、加害責任を明らかにすること。④強力な国民国家戦争体制、開発資本主義体制、ネオコロニアリズム、性暴力容認体制が、自らの暴力性を隠蔽するために再生産している権力のディスコースのフェミニスト解体実践が求められている。⑤ポストモダン的な価値相対主義が蔓延しているなか、日本においては結局、保守反動と結びついている。これに抗して正義、人権、モラルなどをフェミニズム自身がどう再構築していくかが大きな課題となる。

最後に大越さんは、大越流の表現で山川菊栄を次のように評価する。「女性という理由で伝統的道徳を強要しつつ、一方では女性を教育や知的職業から排除し、他方ではその安価な労働力を底辺労働に酷使してはばからない資本主義のジェンダー分断策を明らかにし」、「ブルジョア女性運動は教育や知的職業から女性が排除されていることを問題にし、そのことで男性を敵視しても、ジェンダー分断策で利潤を得ている資本主義という構造的暴力体制を不問に付していると指摘」する。加えて「男性運動家は資本主義という構造的暴力とたたかっても」「ジェンダー分断政策には無関心であり、構造的暴力の最底辺にいる女性労働者を無知なものとして蔑視し、彼女たちの階級的要求を踏みにじってはばからないと批判する」という。山川菊栄は資本主義の本源蓄積は、階級、ジェンダー、民族間の分断を利用しつつ行われるのを見抜き、だからこそ資本主義打倒のために階級、民族、ジェンダー間の分断を乗り越える必要性を力説した、と結んでいる。

## 天皇の戦争責任と日本軍性奴隷制をめぐる

大越さんは、2003 年頃と思われるが、わたくしに「女性と戦後思想」と題した論文を郵送され、その原稿に目を通すように言われた。これにはわたくしのことが過度に評価されており、恥らいつつ読ませてもらった。まず大越さんは「女性が戦後思想において、どのように位置づけられるのか、あるいは位置づけられなかったかという問題は、看過されてはならない問題である。その場合、戦後思想をどこまで射程に入れるかというのは、十分に議論せねばならない難題だが、ここでは敢えて立ち入らない。本稿で取り上げたいのは、戦後思想の総決算ともいうべき問題提起を女性たちが突きつけたことの意味とその効果である」。この問題提起とは、「日本軍性奴隷制を裁く 2000 年女性国際戦犯法廷」における昭和天皇（天皇裕仁）への有罪判決である。裕仁有罪判決以後の日本の論調は、右翼系の凄まじいバッシングを除けば、大方は無視しているというのが、例外的少数を除いたほとんどの男性知識人の態度であり、女性知識人として変わりはない。ある著名なフェミニストからは、困惑のため息！すら感じられた。女性法廷は戦争犯罪を裁いただけで、戦争を裁いていないという、いかにも彼女らしい高踏的な発言をご託宣した、と大越さんは述べている。彼女とは明らかに上野千鶴子氏が想定される。

大越さんのこの原稿には、前述したようにわたくしの名がしばしば散見され、面映ゆいが、以下、要旨を見ておこう。女性法廷運動の牽引車であった松井やよりバウネット・ジャパン代表は、韓国挺身隊問題対策協議会の尹貞玉共同代表とともに法廷開催に向けて奔走した。松井さんは 1934 年生まれで、ジャーナリストとして戦後思想に伴走、彼女は男たちの戦後思想の展開に矛盾を感じ、戦後思想からはみ出た部分、女性及びアジアへと次第に軸足を移していった。豊かな感性と果敢な実行力で戦後思想の最大のタブー、ブラックボックスにあった天皇制に切り込んだ。2002 年 12 月、癌で松井さんは急逝したが、彼女が挑戦し、闘った問題をいかに思想的に継承するかが重要である。

それは、天皇の戦争責任問題である。この問題が戦後日本の性差別・性暴力容認体制、植民地責任の回避などと連動していること、戦後思想の上に天皇の免責が大きな影を落としていること、そのことが戦後の民主化の掛け声にもかかわらず、女性差別と民族差別が未解決のまま継続している。それゆえ女性法廷で天皇の責任を裁いたことが戦後思想へのラジカルな批判になると述べている。

歴史修正主義が大手を振って公然と声を上げ始めたのは、藤岡信勝らの自由主義史観研究会であった。95 年を機に、元「慰安婦」被害者への激烈なバッシングが開始され始めた。96 年には、漫画家の小林よしのりら同じく歴史修正主義者たちによる「新しい歴史教科書をつくる会」が発足、他の教科書に脅威を与えた。彼らは戦争責任のみならず、植民地支配責任にもエスノセントリックに読み替えていく傲慢さに対して、徐京植さんをはじめとする在日朝鮮人の発言も日本の戦後思想の欺瞞を厳しく突くものであった。

戦後思想から女性たちを排除してきた数多くの男性中心的な戦後思想史に対して、女性たちの戦後思想を振り返る必要があるという。大越さんは、その目的を女性たちが内向きの戦争責任論で終始した男性知識人の「戦後思想」をどのように乗り越え、その総決算を実現しえたかを探ることだという。女性たちの戦後思想のほとんどは男性たちと同様、天

皇の戦争責任、日本国家の植民地責任を明確に問うていない。それは女性知識人たちも戦時総動員体制のなかで戦争協力、天皇賛美を遂行していたからである。その問題では 80 年代から鈴木裕子が女性知識人たちの戦争責任という形ですでに指摘（『フェミニズムと戦争』マルジュ社、1986 年）している。

女性知識人のなかには日本国家の無責任体制を鋭く論究した女性がいた。山川菊栄である。彼女は、近衛文麿批判（「近衛公の手記を読む」『評論』46 年 3 月号、『山川菊栄集』第 7 巻収録、岩波書店、1982 年）に仮託して天皇制を批判した。「最後の決断が天皇ひとりの意思にかかっていることは、天皇個人の思想、性格が一切を支配する独裁的権力を意味するもので、これほど大きな危険はない」。「天皇自身軍国主義者である場合には進んで戦争を選ぶ危険がある。終戦の場合も同じことで、ポツダム宣言の承諾か、本土決戦かは天皇ひとりの意思によって決せられるので、承諾の代わりに決戦を採ったならば、国民の運命はどうなったか。開戦といい、終戦といい。最も利害関係の深い八千万国民の意思を無視して、一人主権者〔天皇〕の意思によって決定されるところに、在来の制度〔天皇制度〕の危険が潜んでいる」と述べている。

次はわたくしへの論及である。母親大会などに象徴される戦後の女性運動における女性たちの自己イメージについて鈴木裕子は「女性をアプリアリに＜平和の女神＞、＜聖なる母性＞と把握し、その対極に社会の秩序を脅かす存在として「娼婦」を対置させてきた」と指摘している。この文脈のなかでは、「娼婦」は精々救済の対象とされるだけで、「歴史主体」として登場することはなかったという重要な問題を提起しているという。

語を継いで大越さんは戦後思想の出発点においても山川菊栄と平塚らいてうは相異なる論点に立っており……戦前と同じく、戦後の女性運動も、平塚の母性主義に基づく運動が主流を占めることとなった。このことは、戦前のフェミニズムの戦争責任が全く問われなかったことを意味している（拙稿「日本軍性奴隷制問題と天皇の戦争責任」vaww-netJapan。責任編集池田恵理子・大越愛子『加害の精神行動と戦後責任』緑風出版、2000 年、所収を参照）。

さらに大越さんは、「戦後思想はどのように方向づけられたか、という項目を立て、再びわたくしの論を引用する。鈴木裕子は戦後の女性運動の特徴として、①「被害者」意識、②「一国史」の出発点、③女性＝平和の女神とする本質主義、そして④天皇・天皇制の問題への視点の欠落を挙げている。鈴木は、その歴史研究者としてのスタンスにおいて実証を重んじ、その意味で近代主義的と評されるが、しかしここに挙げた分析視角は、日本的近代を鋭くえぐり出すものとして、自称ポストモダン論者以上に日本的近代を撃つものである、という。加えて大越さんは、鈴木が挙げた特徴を、女性運動だけに限定するのではなく、むしろ戦後思想の隠された特徴として読み替え、議論していくことが重要だと指摘する。

①の被害者意識に関しては、アジア諸国への侵略者であるにもかかわらず、その加害性を隠蔽する装置として捏造されたが、これはねじれた形で戦後日本の民族主義と繋がっていることを明らかにする必要がある。②の問題は、戦争責任問題が、外部への戦争の責任ではなく、「転向」の問題として論じられたところに端的に表れていることに注目したい。③に関しては、「女性＝苦しみ悩む男性たちを包みこみ、あるいは呑み込む自然的母性」という、暗黙のうちに強く期待されている本質主義が、戦後普及した意味を解明しな

ければならない。④に関しては、全く視点が欠落しているわけではないが、正面的に対決するのを避け、アンビバレントな姿勢を示すことに注目したい。

こうした論点でさまざまな戦後知識人を分析するのは今後の課題であるが、として特に取り上げたいのは鶴見俊輔と吉本隆明であると大越さんという。鈴木裕子は、戦後思想を揺さぶる問題提起を突きつけたのは「日本軍性奴隷制」問題だったと指摘しているが、まさにこの問題を突きつけられたときに、上記の戦後知識人の特徴が浮き彫りになっていくとして、鶴見と吉本の場合を検討する。しかしここでは紙幅も限られており、鶴見俊輔氏についての大越さんの見解を主に見ていこう。「転向論」が戦後思想にどのような位置を占めるかは、簡単に断じることができない問題だが、鈴木の問題提起する四つの論点から考えると、①の被害者意識の問題はどうだろうか。「転向論」は、丸山真男などの戦後第一世代が天皇制ファシズム国家体制を構造的に分析しようとする議論を、理論優位の近代主義として避け、むしろ理不尽な運命によって人生を引き裂かれた人たちの内的葛藤の物語へと読み替えることで、情念的な「被害者」意識を一般的に蔓延させる契機となったのではないだろうか。②の一国史的出発点に関しては、「転向論」が「戦争責任論」「加害責任論」と結びつかず、むしろそれらを曖昧にする形をとっていることを問題にしなければならない。彼らのいう「大衆」や「市民」は、その時点では、「日本人」に限定されている。

「日本人」によって虐殺、強姦、奴隷化されたアジアの人々は視野になかったと言えるだろう。③に関しては、「転向」の問題は、国家権力からの強制とともに、家族関係の問題としても捉えられている。この問題に関しては、鶴見は「男性もまた妻子の権力に屈して転向していく」（『共同研究・転向』上、平凡社、1954年、24頁）などと触れるにすぎないが、この言葉の中にイデオロギー的に生きようとする男性の決意を、家を守るために溶解させる女性の受動的権力への慨嘆を読みとることができる、という。鋭い、いかにも大越さんらしい切り込み方である。④に関しては、「転向論」が、戦後日本最大の「転向」である昭和天皇の「転向」を明確に論じていないことを指摘する必要があるだろう。わたくしも、1989年1月7日、天皇裕仁が死去し、新聞雑誌に天皇論が満載され、ほとんどすべてといっても過言ではない天皇賛美論に嫌気がさした思いがある。『朝日ジャーナル』の天皇特集に鶴見氏が天皇について書かれていたのを読み、論旨の不明確さと、天皇に好意を抱いているニュアンスを感じたものである。

大越さんの論に戻ろう。「転向論」において昭和天皇の転向を論じないことは、戦後思想にどのような効果をもたらしたのか？ 天皇の戦争責任を隠蔽して、戦後思想史が語られる地平が拓かれたことは、明らかであろう。戦争責任の問題を議論することなく、天皇制が「王権論」や「日本文化論」として論じられるという戦後思想の自己欺瞞が定着していく方向が指示されたのではないだろうか、という。これも示唆に富む見解である。

### 再び日本軍「慰安婦」問題をめぐって

先の論稿で大越さんは、「『国民基金』側の国家責任回避の態度の陰に、天皇免責の論理の継続を見出した鈴木裕子たちは、『国民基金』を厳しく批判し、抗議集会を開くなど果敢な実践活動を展開」したとあり、この「鈴木の問題を『歴史の真空地帯に足場を置くような超越的な判断基準と定義づけ、鈴木の問題を『無価値化』を図ったのが上野千鶴子

であったと批判した（同氏著『ナショナリズムとジェンダー』青土社、1998年、83頁参照）。いささか古いことだが、上野さんが『インパクション』や『現代思想』においてわたくしを批判され、反論の必要性を感じていたものの、その当時のわたくしは多忙でもあり、的をついた批判でもないと思い、あえて反論せずに来た。その後、前掲・資料集の解説などで反論を試みた（73～78頁）。

さて、まことに残念なことに、大越愛子さんは、正確にはご遺族にお聞きしなければならないが、いまから十数年前に脳腫瘍で倒れられ、あの特徴あるテンションのあるお声と「宝塚ファン」という少し愛くるしい、お茶目なお顔とに暫くお目にかかることができなかった。2010年、東京外国語大学で2000年法廷の10年後の記念集会に足はおぼつかないながらも、大越さんは東京に来られた。韓国からは尹貞玉先生が来日された。先生は1946年生まれの大越さんより20歳年上であられる。

彼女に健康がもっと与えられていたら、きっと良いお仕事をなさっただろうと思うと無念であった。最後にお会いしたのは、彼女が東京に転居したのちの2019年の夏前であったと思う。井桁碧さんと中原道子さんとご一緒であった。親孝行な息子さんが二人いて、お母さまを心配して東京に迎えられたのであった。時には家族で旅行も楽しまれたようである。お連れ合いは先に逝かれた。下の息子さんはよく存じ上げている。当時、慶応大学法学部の学生で、「女性・戦争・人権学会」の集まりの折にはよく手伝いにきてくれた。名前は有人くんといい、弁護士になられた。学問生活に事実上、ピリオドを打たれた大越さんも不本意であったと思うが、良き息子・家族に恵まれたのは一種の救いだったかと思っ、て、冥福を祈りたい。時が得られれば大越さんの思想と理論を改めて学びたいと願っている。この場を提供してくださった藤目ゆきさんに感謝する次第である。

（2022年3月2日記）





## **エッセイ・研究ノート**

---

## エスペランチスト長谷川テルの反戦思想 — 日中戦争下の反戦放送に至るまで —

西田千津

### はじめに

今年 2022 年は、日中国交正常化 50 年の年であるが、日中関係は、残念ながら良好とはいえない。日本社会では、中国政府の香港やウイグルの弾圧及び台湾への圧力に対する世論の疑念に乘じ、大手メディアは、日米韓軍事同盟強化を声高に叫んでいる。さらには、ネット上を中心に、偏狭なナショナリズム、排外主義が跋扈し、ヘイトスピーチやヘイトクライムといった差別・犯罪が現出している。その背景には、過去の侵略戦争の史実を否定する「歴史修正主義」の台頭がある。

一方、今年は、日中戦争時、中国で抗日運動に奔走したエスペランチスト長谷川テル（以下、「テル」と略称する。）生誕から 110 年の年でもある。

長谷川テル（長谷川照子、緑川英子、Verda Majo 以後「テル」と略称）は、1912 年 3 月 7 日山梨県で生まれた。父幸之助の転勤に伴い、東京へ移住。母よね、姉幸子（ゆきこ、以後「ユキ」と略称）、弟弘の 5 人家族であった。29 年に奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学・以後、「女高師」と略称）に入学し、奈良で学生生活を送っていたが、32 年 9 月、治安維持法違反容疑で逮捕され、女高師をやめざるを得なくなった。その後、中国人留学生劉仁（劉砥芳、劉鏡環）と結婚して、37 年に中国に渡り抗日運動に従事した。日中戦争後まもなく人工中絶手術の医療ミスで中国東北部の佳木斯（ジャムス）で 35 歳の若さで亡くなった。

日中戦争下、日本では極端なナショナリズムが強要され、過酷な言論統制が敷かれた。テルは、中国の漢口で、日本語放送を通じて抗日を呼びかけたために、祖国日本の新聞で「嬌声売国奴の正体はこれ」と糾弾された<sup>1</sup>。ところがテルは、その前に、「お望みならば、私を売国奴と呼んでくださってもけっこうです。決しておそれません。他国を侵略するばかりか、罪のない難民の上にこの世の地獄を平然と作り出している人たちと同じ国民に属していることのほうを、私はより大きい恥としています<sup>2</sup>」という文章を発表している。周恩来は、41 年 7 月 27 日、「重慶文化界在歌乐山頼家橋全家院子举行抗战記念活動」で、「日本軍国主義者はあなたを嬌声の売国奴といいましたが、実際は、あなたは、日本人民のよき娘で、本当の愛国者です」と称賛した。エスペラントを駆使し、反ファシズムの視点から日本社会の問題や中国の現状を世界に発信したテルは、中国人民と共に戦った「国際主義戦士」として、佳木斯の地に、夫の劉仁と共に立派な墓に葬られている。

小稿では、テルの短い人生のうち、日本での生活と、中国へ渡ってから漢口で抗日放送をして脱出するまでの時期までを取り上げる。ナショナリズム、民族主義との関連を中心に、エスペランチスト長谷川テルが命がけで取り組んだ反戦活動とその先見性の分析を試

みたい。テルは、プロレタリア文学作家としての確かな視点をもっており、呼びかけ文は単なるアジテーションではなく、虐げられた人を尊重し、人の心を打つ内容であった。また、テルは、日本社会に根付いていた女性差別を鋭く指摘しそれに抗う中国女性の有り様も書いている。

なお、紙幅の都合上、小稿では、同時期を描いた自伝作品である「En Ĉinio batalanta 戦う中国で<sup>3</sup>」以外は、基本的には、同時期作品のみを取り上げ、それ以降に書かれた作品については、別稿で取り上げることとする。

## 第一章 日本での生活

### 第1節 抑圧

ユキによれば、テルは小学校高学年のころ性格ががらりと変わり、とりわけ父に反抗的になった。父というより男性一般への反抗のようにみえたという。府立第三高女（現在の駒場高校）に入学してから、テルの日記には、「世の中に対する懷疑と不信、男性や権威あるものへの反感が書きつづられ、学校へ行くとみせて一日神宮外苑をぶらついた、あるときは化学教室から劇薬を盗み出して自殺をはかった」ことが書かれていたという<sup>4</sup>。

女高師に入学してからテルは、奈良の美しい自然に親しむ一方で、良妻賢母を教える女高師の校風と厳しい監視にうんざりしていた。第三高女時代の友人中島郁にあてた手紙の中で、「万万万が一、好意がおありでしたら、ピストル一挺、ご持参の上、わたしの胸をプスンとうってください<sup>5</sup>」「いやだいやだ 無茶苦茶だ。精神病になりそうなさびしさの中に、へとへとになった身心をもてあましている<sup>6</sup>」などと訴えている。

こうした女高師内での抑圧状況については、テルと同級生だった水野破魔子は、三人以上集まる時は、舎監に集会届を出さなければならなかったと述べ、テルが書いた小説<sup>7</sup>には、「善良で無意味な学生生活がむき出しにされ」、「憎悪と批判が渦をまいていた」などと書いている<sup>8</sup>。また、テルの一学年上であった山田雪子は、当時、中国の留学生が、いわゆる「満州」の方も含めて10人余りいたが、歴史の時間中、その人たちが総退場したり、金さんという朝鮮の学生が、許婚者が進歩的思想をもっているというだけで退学になったりしていたというショッキングな事件について触れ、「長谷川さんを運動に投げ込ませた背景には、こうした当時の学校のきびしい監視と統制もあったのだと思います」としている<sup>9</sup>。

テルは、後に、こうした監視体制は女高師に限らず、日本全体の問題であると考えていた。

とりわけ、教育における女性差別について敏感に感じ取り、「Japanio-Lando de barbara regado(暴政の国—日本)<sup>10</sup>」で、次のように述べている。

日本の女子は今までも小学校を除いて男子と一緒に学ぶ権利を普通持っていない。男性上位のこの国では女性人間としてまた社会の構成員としてではなく、良妻賢母の名のもとに夫に奉公し子供を育てる存在としてのみ教育されているのである。そして最近ほんのわずかの例外をなくそうとして高等教育における男女共学の全面禁止が提案されたのだ。共学が女性を男性化して日本女性本来の美德を損なうからである。お節介な当局は中学生は丸刈り頭にするようにと言う命令を出した。そして一方では

今までも行われている中学生の校外補導を強化することにした<sup>11</sup>

ここに書かれている「日本女性本来の美德」とは何を指すか。たとえば、重慶時代にテルと共に過ごした池田幸子は、テルと共に、日本人捕虜収容所を訪ねて行った時、「山川さん」という捕虜が、炊事の手伝いをテルに頼んだところ、テルは、「飯炊きするぐらいなら、中国人と結婚しなかった」と言ったという<sup>12</sup>から、当時女性にだけ家事労働が強いられていたこともそのひとつだったろう。また、遊郭も激しく批判している。

私の考えでは禁止しなければならないのはカフェであり芸者屋でありその類の売春宿であろう。中でも世界に悪名を轟かせている遊郭の存在である。<sup>13</sup>

そして、テルは、女高師の友人とともに、行動を起こすことにしたのである。

## 第2節 般若寺の誓い

長谷川さんと私がはっきり方針をきめたのは四年生になった春（昭和7年）4月30日の事でした。私は今でもその日のことをはっきり覚えています。雨上がりの土曜日の午後でした。散歩にいかうと手を挙げて廊下から合図をする彼女に私も同じく手をあげて答えました。荒れはてた般若寺の境内はひっそりしていました。八重桜のぼたぼたした花と山吹の真黄色なしげみの中で、私たちは一しょにやろうと誓いました。根本的にはあなたと私の考え方はいくらちがうようだけど、と彼女はいいました<sup>14</sup>。

テルの抗戦活動の出発点は、この「般若寺の誓い」であった。テルは、「根本的にはあなたと私の考え方はいくらちがうようだけど」やるだけやってみようと言い<sup>15</sup>、その言葉通り、6月から二人はエスペラント<sup>16</sup>を習い始め、文化活動を始めたのである。

北村信昭「卓上噴水<sup>17</sup>」には、北村が、天理外語マレー語科の学生だった<sup>18</sup>宮武正道の家で、6月4日から毎週土曜日にエスペラントを習いにきていたテルを含む五人の女高師生<sup>19</sup>と話をし、卒論のテーマを聞いたこと、2か月で暑中休暇となったこと等が記されているという<sup>20</sup>。

大山俊峰によれば、1932年春、奈良合同労組に長戸が訪れ、文学は労農大衆と結びついてよい作品が生まれるから、実際の運動について勉強してみたいのだと告げた。長戸は、男の書体だと舎監に気づかれるから、連絡用に封筒に宛名と差出人を書いて届けると言い、数日後テルが封筒を10枚ほど持って届けに来たという。その後、6月ごろに、第一回文学サークルの集まりが持たれ、林房雄の書生であった市井清一が、「プロレタリア文学について」「唯物弁証法的創作方法」について話をし、テルと長戸は熱心にききいていた。このとき、女高師内の文学サークルの話もして、テル、長戸のほかにも3、4人いて、「プロレタリア文学は、一般の現代文学よりレベルが低い」というのが大体の意見であり、学校ではこの種の活動は厳しく見張られていたということも話していた。農民組合は、小作争議もやっていて、高田町に全国農民組合全国会議奈良県評議会事務所があるから、紹介するということになった。その後、テルは、奈良市高畑町の志賀直哉の家の前で、この農

民組合書記長の藤本忠良、大山俊峰と会い、労農運動とプロレタリア文学などの関連について、話をきいたという<sup>21</sup>。

利根光一によれば、テルの6月9日付のユキ宛の手紙には、「左翼運動ですって？感じのわるいことばですこと。いまの社会に満足できないことと同時に、いわゆる左翼運動者の態度に不満を感じていることだけ申し上げときましょう」と書かれていたようだ。利根は、テルのこの見解について、「左翼運動家のエリート意識が鼻につき、そのなかに入るつもりはなかったようだ」と考えている。ただ、「改革者の下積みの下積みの一人として、しかし女として、また教育者としてやるべき方向を受け持つことだけは動かない信念です」「あらゆるものを第三者的に批判的に見得る眼一しかも場合に応じて熱情を発し得る自信もじゅうぶんあります」ということも書かれていた<sup>22</sup>から、テルは、「改革者」としてどう生きれば良いか模索する中で、こうした「左翼運動」と積極的に関わりをもとうとしていたのである。

その後テルは、8月には東京へ帰省して、父の反対を押し切り、ユキと日本エスペ란チ学会の夏期講習に参加する<sup>23</sup>。

The image is a collage of Japanese newspaper clippings. The most prominent headline is '赤の二女性 退学の処分' (Two Red Women: Disposal of Expulsion), with a sub-headline '『誠に遺憾なこと』 女高師校長語る' (A truly regrettable thing, says the women's high school principal). To the right, there's a section titled '毒薬心中' (Poisoned Heart) with a sub-headline '男は絶命' (The man died). Above that, '即死' (Instant Death) is visible. Below the main headline, there's an advertisement for 'カレシキ' (Karesiki) featuring a woman's face and a product can. Other smaller headlines include '証物' (Evidence) and '雑音' (Noise). The clippings are from various newspapers, with dates like '九月十三日' (September 13th) visible.

ところが、夏休みが明けて9月になり、学校へ戻ったテルと長戸は、奈良八・三〇事件<sup>24</sup>に連座して、治安維持法で共に留置場に勾留された。9月13日付の大阪毎日奈良版の「赤の二女性退学の処分『誠に遺憾なこと』女高師校長語る」という記事で、仮名で二人の逮捕が報道されている。「美貌の青年をもって組織する女子指導班の触手が金城鉄壁といわれた女高師への潜入に成功」し、「両女は即日退学処分をうけた」と、テルらが、「コップ系の地下運動」員の美貌に騙されたかのようなセンセーショナルな書きようである。稲葉校長の「伝染性のある病気は隔離せねばなりません」という談話も掲載されている。八・三〇では、前述の市井清一、藤本忠良、大山俊峰も検挙されている<sup>25</sup>。利根の聞き取りによれば、このとき、特高の対応は好意的であり、学校へゆるやかな処置をと頼んでみたが、学校の方では、担任（たぶん伊藤カズ）の努力で、脚気のため中途退学というような名目で、この事件は表面に出ずにすまされたということである。だがこれで、テルの「教育者」



としての未来は絶たれてしまった。

### 第3節 エスペランチストへの道

奈良女高師を去ったテルは、父親に連れられて東京へ帰った。姉ユキは、のちに、「妹は少しも気にしていません。妹は自分がやったことは悪い事だと思っていないからです<sup>26</sup>」と書いている。また、テルは、中島郁への手紙に、

ええ、とうとう首になっちまいました。馬鹿らしいけど仕方ありません。左行進が過ぎるんですって…くだらないとは思うものの、自分としてはたいして未練のある学校ではありませんし—<sup>27</sup>

と書き送っている。とはいえ、テルの逮捕と退学は、家族にとって衝撃が強く、32年10月17日、テルは門司の親戚宅に連れていかれた。ところが「向うに居ても何もする事が無いし、勉強するにも、本もなく友人もないので耐えられない」と、12月12日、東京へひとりで戻ってきた<sup>28</sup>。

こうした日本の抑圧的・閉塞的な社会に対する絶望感を乗り越えるため、テルが選んだのは、エスペラントであった。テルは、東京でタイプライター教習所に通い、タイプライターを購入し、33年4月から、財団法人日本エスペラント学会で、無給タイピストとして働いた。この時、大島義夫、中垣虎次郎、岡一太らが作った日本エスペラント文芸協会でもまれ、エスペラントが上達したという<sup>29</sup>。

「Printempa frenezo (春の物狂い)」は、Esperanta Literaturo (エスペラント文学) 34年5・6月号に掲載されている<sup>30</sup>。奈良の学校で学んでいる「私」が、家に帰りたくなり勝手に東京の家に帰ったところ、父は何も言わず、近所の人が噂すると母に責められ、奈良に帰る汽車で自殺をしたというストーリーである。利根は、「テルの女高師時代の、くるしみ、もだえ、みだれの反映であろうし、その点では、事実の重さがその向うにある」とし、しかし、小説として書けるようになったのは、テルが、過去のものとして、「その時期を客観的にみることができる」ようになったのだとも述べている。

また、同誌34年11・12月号に掲載されている「Ses Monatoj (6カ月)」<sup>31</sup>は、市役所に勤務していた永井が、経費削減のため突然解雇される話で、当初は失業したセールスマンや小作人に同情的だった永井が、妻子を養うプレッシャーに耐え兼ね、電車労働者ストにも無頓着になり、同じ選挙区の政治家に頼んで、ようやく再雇用となった辞令を枕の下に敷いたまま亡くなってしまったという落ちである。家族や自分のことで精一杯で、社会の変革に目が行かないまま死んでいくサラリーマンの悲哀を描いている。

テルは、また、エスペラント女性の組織であるクララ会 (Klara Rondo) に加盟している。クララ会とは、ザメンホフの妻クララの名前を冠したものであるが、クララ・ツェトキンの名もかけていた組織であり、創設者は山川菊栄の姉の佐々城松栄で、山川均「資本主義のからくり」山川菊栄「国際婦人デー」を訳して、機関紙 Sennaciulo (『無民族者』) に掲載したりしていた<sup>32</sup>。35年2月2日、3月2日、4月6日のクララ会の例会はテルの自宅で開かれた。姉のユキが司会などしていた<sup>33</sup>。4月29日にユキはエスペランチスト西村正

雄と結婚して<sup>34</sup>大阪へ転居し、その後テルは、クララ会にはほとんど行っていないようである。ただ、葉籟士によれば、1935年、三・八国際女性デーの前に、上海世界語者協会がクララ会に原稿を依頼し、同会の推薦で、テルが、上海世界語者協会の会誌『La Mondo（世界）』に、「Virina stato en Japanio 日本婦人の状況」を寄稿した<sup>35</sup>。それがきっかけでテルとの文通が始まったという。この一文は、日本の女性の地位の向上のため、以下の6点を列挙している。

- 1 女性選挙権獲得のための日常闘争
- 2 民法の改正。妻は夫の遺産を相続できないなど不利な状況の改正。
- 3 公娼制度の廃止
- 4 25歳未満の青年の飲酒禁止
- 5 助産婦の地位の向上
- 6 母性保護。主に経済的貧困が理由で多くの母親が子どもを殺し自殺する例がある。

さらに、職業の面でも女性労働者の中間搾取の統計的数字をあげ、無産階級の解放のみが、女性労働者が男性労働者と同等の権利を受けることを可能にすると結んでいる<sup>36</sup>。

そのほか、テルは、エスペラント学会の雑誌「La Revuo Orienta（東洋評論）」に、「Hisorieto de Japana Literaturo（日本文学小史）」（35年2月）、「Fraulino Kiu Amas Besteton（虫めずる姫君）」（35年3月）を書いていた。

その頃、中国のエスペラント運動の成功を指針として IPE（プロレタリア・エスペラント・インターナショナル）路線を支持した中塚吉次のグループ（神戸）は、『マルシュ』に結集していたが、そこに加わった栗栖継<sup>37</sup>は、「Maja Rondo マーヤ・ロンド（5月会）」というエスペラントの文学グループを作り『Majo マーヨ』という全文エスペラントの機関誌を出し、国際革命エスペラント作家同盟（IAREV）と連絡していた。やがて、グループは全国化し、テルも、中国へ脱出するまで、ほとんど毎号寄稿していたと言う<sup>38</sup>。

また、葉君健によると、東京在住の中国人エスペランチストは「中華世界語協会」という組織をつくり、毎日曜に一回集まっていたが、36年晩秋に、テルが劉仁とともに参加していたという。葉は、テルが「身振りから、発音まで」典型的な日本の女性であったが、彼らを「Kamarado（同志）」と呼び、「外国人としてではなく、エスペラントの同志と見なして」いたので、「しばらくたつとわたしたちは誰もが、かの女を日本人と感じなくなり、仲間の一人とを感じるようになった」と述懐している<sup>39</sup>。

このようにして、テルは、プロレタリア・エスペラント作家として活動を始めることとなった。

## 第二章 中国へ

### 第1節 上海時代

1936年11月、テルは、エスペラント仲間の中国人留学生劉仁と結婚した。劉仁との出会いは、よくわかっていないが、築地小劇場で「夜明け前」が上演されたとき、二人で行っていたのが目撃されている。結婚式はあけておらず、結婚の前日、二人で健康診断を受け、記念写真を撮っただけで、別々に暮らしていた<sup>40</sup>。寺島俊穂が指摘したように、

旧民法では25歳未満は父母の同意なしには結婚できなかったから、家父長的な理不尽な日本の法律に2人は、あえて従わなかったのだろう<sup>41</sup>。翌年3月22日、劉仁は上海へむかって旅立った<sup>42</sup>。

1937年4月15日、テルは単身横浜より上海へ出帆する<sup>43</sup>。当時、中日間にはパスポートもビザも必要なく、出国手続きもなかった。テルは日本警察の干渉を受けないバンクーバーとマニラ間のカナダ航路「クイーン号」で横浜から出国した<sup>44</sup>。テルを出国させたのは、中垣虎次郎門下の中国人留学生エスペ란チストグループである。劉仁も門下生であった<sup>45</sup>。中垣、丁克（鄭克強）、黄一環、陳秋煥、李益三、葉君健は「エスペラント50年祭に日本代表を送り込むのに奔走した」という理由で捕らえられた。テルは、自分の渡航に関係があったのではないかと悩んでいる。<sup>46</sup>葉君健は2か月思想犯として牢に入れられ、中国へ強制送還された<sup>47</sup>。

この後、上海、香港、広州へと移動したテルの経験は、前掲『En Ĉinio batalanta（戦う中国で）』に記されているので、以下、その記述にそって足跡を追っていくことにする。

19日上海に到着したテルは、一足先に上海入りしていた劉仁と再会した。日本人だとわかると危ないので、マレー人のふりをして上海のフランス租界で暮らした。

「半裸体の苦力と豪華な高層建築が共存」している上海の風景は、「半植民地的な中国の典型的な都市としての上海の本質」を雄弁に説明しているとテルはいう。

高層建築は、半裸体の苦力たちが、その汗と血で一階また一階と建築したものである。しかし、それが完成するやいなや、彼らはまた地上にもどって、ふたたび獣のようにはいずりまわる。高層建築の主人たちは、文化生活に必要な一切のものを楽しみ…彼ら（苦力たち）は生きているあいだも、死んでからも、人間として扱われない。…私は上海がきらいだ。この町はバラバラに引き裂かれた身体を想像させ、そのイメージはいたましい。<sup>48</sup>

安元隆子は、当時、上海について書きとどめた日本の作家の例を紹介した上で、「テルのように、人間と認められず虐げられた苦力の生活の上に空に向かって高層建築が伸び、上海の繁栄があるということに気付き、それを不快として書きとめた作家が今までにあったらどうか」とテルを高く評価している。<sup>49</sup>プロレタリア作家としての面目躍如というところであろうか。

さて、上海に到着してまもなく、前述のエスペランチスト葉籟士と張企程が家を訪ねてきた。二人は、テルにとって、真に信頼できる友人であった。とりわけ葉籟士については、「戦争中の私たちの最も困難な日に、彼は決して忘れることのできない、どんなにしても感謝しきれない私たちの援助者となり、さまざまな意味での激励者となった」と述べている<sup>50</sup>。

そしてテルは、早速、イギリス租界の横丁にあった上海世界語者協会を訪れた<sup>51</sup>。

この上海世界語者協会（上海エスペランチスト協会）は、1933年1月22日成立。「エスペラントを研究し、エスペラント運動を拡大し、新文化の発展に努める」という綱領を掲げ、「帝国主義戦争に反対し、中国の自由平等に資する」と主張して前述の『La Mondo 世界』を刊行していた。<sup>52</sup>

テルは、7月15日には、エスペラント50年祭に参加した。その感動を次のように記している。

エスペランチストの理想と中国人民の理想とは完全に一致するのだ。エスペランチストも中国人民とともに他の民族に抑圧されることを望まないし、また他の民族を抑圧することも望まないのである。ずっと以前から中国のエスペランチストたちは「エスペラントによる中国解放のために」と書かれた旗を高くかかげている<sup>53</sup>。

6月、「抗日七君子」の釈放を要求するデモが、共同租界で行われた。内戦の停戦を訴え、上海を中心に組織された「中華全国各界救国聯合会」のリーダーたちを、国民党政権が逮捕したのである。その隊列に、テルも参加した。

また、テルは、エスペランチストと共に『Ĉinio Hurlas(中国怒吼)』の発行に尽力した<sup>54</sup>。テルは、文章を書き、仲間の原稿をタイプライターで清書し校正したのである。「日本のエスペランチストへの手紙」の中から、「…私がペンをとるとき、おさえつけられた正義の血がおどり、野獣のような敵に対する怒りの炎が燃えあがるのです。私は中国人民とともにあります！そのことに私は喜びを覚えるのです」という一節を引用し「当時はまだ日本の侵略者どもに対する中国の抗戦に公然と参加することはできなかったとはいえ、私は第三者ではなかった」と結んでいる<sup>55</sup>。

さらに、「私は仲間たちとともに、ありったけの声で日本の兄弟たちに呼びかける。誤って血を流してはならない。あなた方の敵は、海を越えたこちらの側にはいないのだ」は、「愛と憎しみ<sup>56</sup>」の一節である。戦火の上海で砲声がとどろき、数百人が犠牲となったことや、貧民街で「真っ黒の難民がアリのように群がっている」様子を描写している。そして「—こんな目にあわせるのはだれだ？日本か？」という問いに対して「—いや、ちがう」とテルは首を振り、「全身の憎しみをこめて」「—日本帝国主義者どもだ！」と答える。「本当の敵」は、ファシストで、「両国人民のために戦争を止めろ」と。

中国の難民を殺害しているのは日本軍で、自分自身は、その日本人であるが、侵略に反対であり、断固戦うという意思をもっている。この大量殺人を犯している日本帝国主義者に対する憤りと正義の熱情がテルを突き動かしていたといえる。そしてテルは「愛国心」についてこう語っているのである。

私は日本を愛している。親たち、姉と弟、身よりのもの、そして友人たちが—たくさん—のなつかしい思い出とともに暮らしている祖国だからだ。私は中国を愛している。親切で勤勉なたくさんの方々の仲間たちが私を囲んでくれている、新しいふるさとだからだ。

57

また、同誌には、37年9月、テルの「Venco de Ĉinio estas ŝlosilo al la morgaŭ de tuta Azio (中国の勝利は全アジアの明日へのカギである)」も掲載された。

テルは、「何国民であろうとも、人間らしい心や澄んだ理性をもっているかぎり、みんな中国に同情をいただいています」と言い、エスペランチストとして、「日本帝国主義に反対するこの革命的闘争の中で、ささやかな働き場所を見つけることができた」ことは、「し

あわせなこと」だと述べる。そして、前掲の「お望みならば、私を売国奴と呼んでくださってもけっこうです…」 「ほんとうの愛国心とは人類の進歩と対立するものでは決してありません。そうでなければ排外主義です。そして、なんと多くの排外主義者がこの戦争によって日本に生まれたことでしょうか。」と続けている。日本のエスペランチストに向けられたこのテルの呼びかけ文には、ザメンホフの思想が色濃く反映されている。ザメンホフは、

私は、その出身や言語や宗教や社会の役割にかかわらず、同じ土地に住むすべての人びとの幸福に奉仕することを、愛国心と名付ける。特定民族の利益にとくに奉仕したり、よその土地に住む人びとを憎むことを、愛国心と名付けてはけっしてならない。私は、祖国や家庭への深い愛情は誰でももっている自然な気持ちであり、外部の異常な状況がこのごく自然な感情を麻痺させているにすぎないと、認める<sup>58</sup>。

と規定しているのである。だが、テルの思いは届かず、37年12月、日本では「エスペラント報国同盟」が結成されている<sup>59</sup>。

また、テルは、「かつて良心的、進歩的、あるいはマルクス主義者とさえ自称していた知識人までが、反動的な軍国主義者や政治家のシリ馬にのって、恥もなく「皇軍」の「正義」をはやしたてているのをみますと、私は怒りや吐き気をおさえきれないのです」と訴えている。この時、通州事件（1937年7月29日、日本の傀儡政権である冀東防共自治政府の保安隊が、日本軍人や居留民を襲撃・殺害した事件。日本軍がこの通州保安隊の兵舎を誤爆して保安隊内の抗日意識が刺激された）について、室伏高信は「事変に直面して」という一文<sup>60</sup>で、そして山川均は『改造』37年9月に「中国の鬼畜性」と題した感想文を発表し、抗日運動を非難した。テルは、「中国の勝利は全アジアの明日へのカギである」（注2参照）でも2人を激しく批判しており、山川に対しては、「かつて科学的社会主義者であった山川均は、中国軍の『鬼畜性』についての問題をもっともらしく持ち出し、中国人民を『鬼畜以上』とののしっています」と非難している。ちなみにテルは、上海から、蘇醒の「花はいかにして開いたか」という西安事件の翻訳記事を、劉蒙暉というペンネームで『日本評論』に送り、室伏編集長から「つづいてこのような翻訳を送ってほしい」という手紙と50円の為替を受け取ったことがあった<sup>61</sup>。山川均は、クララ会の創設者佐々城松栄の義弟であった。つまり、テルにとっては、親しみ深い2人だった。「戦う中国で」の中で、テルは、中国人エスペランチスト巴金が山川均に対し公開状で反論した「山川均先生へ」から、日本軍が、松江停車場で、難民を輸送中の列車を爆撃した様子について巴金の描写を引用している<sup>62</sup>。

…しかし、爆弾は投下され、後部四車輛をめちやくちやに破壊した。血と肉と悲鳴が四方八方へとびちった。傷つかなかった人たちは、無傷の車輛になだれこんだ。つづいて一弾が前部の車輛をつらぬいた。もはや列車に生き残った者は誰一人としていなかった。停車場の周囲ではどこでも、あわてふためいた人びとが気が狂ったように逃げまどっていた。飛行機はためらうことなく彼らを追及し、非常な低空を飛びながら機銃掃射をあびせた…<sup>63</sup>

テルは、静かなフランス租界の公園で、遠くの爆撃音を聞いた時の苦しい気持ちと苛立ちを述べている。

ここから、たぶんすぐ近いところにいる日本の兵士たちに訴えかけたいと思う万の言葉は、私ののどもとまで迫ってきている。これらの日本兵は中国人の殺戮をつづけているが、その彼ら自身が日本のファシストたちの犠牲者なのである。彼らもまた傷ついたり、戦死したりすることを避けることはできないのだ。自分の敵どものために、彼らは隣人の血を流し、また自分自身の血を流しているのだ。私が話しかけたいたくさん言葉は、見ることも触れることもできないが、おそろしく強力なあるものによって、袋小路のなかにおさえつけられていて、私はそれに対して抗議したり、不平をいういかなる手だてもない。<sup>64</sup>

そしてついに、10月27日、中国軍が上海から撤退した。11月26日テルと劉仁は、葉籟士の尽力で、上海から船で香港と広東を通過して漢口へとむかう旅に出発した<sup>65</sup>。途中、汕頭に寄港し、みかんを食べた感激を語っている<sup>66</sup>。テルは、45年5月『戦う中国で』を出版する際、「平和な愛すべき静かな町」であった汕頭が、日本軍の占領でいかに破壊されてきたか、「愛すべき」ものを破壊し、人々を苦しめているか悲惨な現実を追記している。

ただ一つ、心をかきむしられるようなニュースだけを伝えておこう——一つだけ、そうだ、一つで充分すぎるほどだ！——そこでは、お米が、ます売りでもなく、はかり売りでもなく、実に一粒いくらで売られている、ということ<sup>67</sup>。

## 第2節 広州

37年12月1日、テルは、香港に着いた。ここも、「高層ホテルが列をなしてぎっしりと立って」おり、「緑をたたえる」丘に「クリーム色の豪華な邸宅がそれぞれお気に入りポーズで尊大に街路を見下ろ」し、「舗装されたメイン・ストリートでは軽装の西洋人がさっそうと足を運び、おしゃれな中国人の男女が腕を組んで屈託なさそうに散歩している」といった香港の近代的で魅力的な風景を描き、それと対比的に、生き生きとした労働者の描写が続く。

港のぐりりには、中国特有の貧しさが群がり、集まっている。目の鋭い車夫たち、太い鋼と棒を持った仲仕たち、老若さまさまの新聞売り子たち—こんな連中が、下船する人びとに向かってあらそうように大きな声で叫んでいる<sup>68</sup>。

このように、テルの描く「中国の貧しさ」は、憐れむべきものではなく、中国人のたくましい生活力、強さが感じられるものである。そして次に労働女性の描写がつづく。



黒い上着とズボンの作業衣を着て、ぐるりに房を垂らした黒いつば広の帽子をかぶって熱帯の強烈な太陽から顔をかくしているはだしの女たちが、海岸からやや離れて投錨している汽船から綱で引きおろされた荷物を、手なれたすばやさでボートに積み込み、陸に向かって男のような手で荒けずりのカイをこいでゆく<sup>69</sup>。

ここにジェンダー差別はない。中国では、特に労働者階級では、女性も、港湾労働者として肉体労働でもテキパキこなせると印象づけられるくだりである。

そしてまた、広東人についての記述も興味深い。広州は清代、唯一の外国貿易港として外国文化をいち早く取り入れ、「思想的にも行動的にも進歩」し、華僑となって財を築いた。当地で起こったアヘン戦争は、「中国人が帝国主義に抵抗した最初ののろし」であったし、その後も革命家を輩出したとテルは説明している。そして、広東の女性については、

この都市には特殊なグループが存在する。そのメンバーは教養のない女たちで、より苦悩し、より苦痛を味わうよりほかになんの取り柄もないとわかっている結婚はおことわりだという女たちと、夫や夫の両親の虐待にこれ以上の我慢はご免だと、離婚した女たちとである。彼女たちはお互いに姉妹と呼び合って、助け合っている。おおむね阿媽（女中）として働きながら生活を支えている。もちろん、こんな方法で完全な解放を勝ちとることはできはしない。しかしながら、まったく無教養な女たちが、伝統的な法律をあえて踏みにじり、婦人に対する社会の誤った取り扱いに団結して反抗しているということは、意義深く、興味あることではないだろうか？<sup>70</sup>

と述べている。このように、テルが考えていた抗日は、同時に、封建的な家父長制の軛からの中国女性の解放でもあった。そしてこの軛は、まさに、テルが日本在住の時に感じていたものであり、日本女性にも通じる問題であったことがわかる。

さて、香港から広州へ渡ったテルは、日本人ではないかと、刑事に呼び止められる。テルは華僑で中国語が上手くないのだと説明し、劉と W 夫妻の尽力で、事なきを得るが、刑事は、テルが日本人なら劉は離婚しなければならないと言う。テルが袋叩きにされる危険があるから外出は避けるようにと付け加えて去った。そのあと、エスペランチストたちの助けで、住む場所が見つかったが、漢口に行くために、郭沫若に会いに行く。郭沫若、U さん、劉仁という日本人と結婚した 3 人の中国人が座っている中で、劉の話を書いた郭が「悲劇だね」とつぶやく。こうした日本人に対する仕打ちは、日本軍の侵略行為のせいであるとテルは理解しており、だからこそ、抗日運動に参加したいと願っていた。

私は、そうだ、抽象的世界人ではないのだ。日本人なのである。したがって、中国にいる日本人として、私は特別な義務を持っている。いつになったらその義務を果たすことが許されるのだろうか？<sup>71</sup>

その頃、テルが日本を出国したとき援助をした丁克が、広東に帰ってきた。2 月、広東国際協会が結成され、最初の国外宣伝物として、「日本人は語る」というエスペラントの小冊子を発行した。中には、鹿地亘の「聖戦の変化」「現実の正義<sup>72</sup>」など、テルがエス

ペラントで訳したものなどが含まれていた。

ところが、テルは逮捕され、国外退去を命じられる。その事情については、『Flustr' el uragano 嵐の中のささやき』の中に「ありふれた思い出」として劉仁が一文を寄せている<sup>73</sup>。

あの上海の戦火が、私たちを広州の見知らぬ町に追いやり、その上、彼女を暗い牢獄に閉じ込めた。そこから我々は香港のスラム街へ追放されたのだが、それでもとうとう抗戦の中心地、漢口へたどりつくことができて…<sup>74</sup>

二人の苦難は、「不安と刺激にみちたこんな時代」では、「ありふれた思い出」なのである。「ありふれた女性」が、「自分の祖国の軍国主義者による中国での虐殺、放火、そして凶暴な砲撃戦を目の当たりにして、心にわきあがる正義の訴えを叫んでいる」のだと述べる。正義感に駆り立てられ、戦乱の中国へやってきた2人の若者は、現実にもつかり、放浪生活を強いられた。広い中国の中で、テルは「ありふれた女性」であった。しかしそれは、プロレタリアートであり、革命の担い手ともなり得るのである。

一方テルは、出版にあたり「すこしばかり」という短文を付けている。劉仁を追って中国へ向かったとき、「私の中で青春の情熱は燃えて」いたし、「上海や香港に隠れ、さまよっていたころ、愛と憎しみが入りまじって、心の中でのえたぎっていた」と邂逅している。

鹿地亘・池田幸子の2人に宛てたテルの手紙が残されている<sup>75</sup>。冒頭は、2人への親しみを込めた呼びかけで始まる。

鹿地さん！

池田さん！

同じ高さに並列して、二人の氏名が記されている。ジェンダーに配慮しているようだ。

あなた方が今、最も適当な持ち場について、しかも敬愛する多くの同志にかこまれて、愛する中国のため、熱愛する祖国のため、全身の努力をつづけて居られる事に心からの祝福をお送りいたします。

これは、テルが自分もやりたいと願っていることでもあった。1938年3月初めに逮捕され、郭沫若や杜重遠らの力で、出られたのはその三週間後で、国外退去の判決が下ったことが書かれている。そして、香港でテルは、エスペ란チによる国際宣伝をしているが、漢口になるべく早くいつて働きたいという希望を述べている。さらに、

私達は幸福だとはっきり言い切ることが出来ますね。どんなに困難がおひかぶささうと、正義が正義で通る国で、正しい路に沿って、まっしぐらの闘争をたたかふ事が出来るからです

と書いている。日本にいては、正義が通らず、まっすぐ闘えないから中国に来たのだとい

うテルの決意を繰り返しているのである。

次に、漢口時代のテルの活動について述べてみたい。香港の放浪生活が終わり、「抗日戦争一周年の直前、ついに中国の抗戦に公然と参加する許しを得」た。漢口で抗日放送に従事したときは、「ごく短い期間ではあったが、しかしなんと興奮した、活発な、緊張した時期であつたろう」とテルは書いている<sup>76</sup>。

### 第3節 漢口時代

西安事件の後、第一次国共合作が実現した。国民政府は政治部を復活させ、総務庁のほかに、第一庁は軍中の党務、第二庁は民衆組織を掌り、第三庁は宣伝を掌る<sup>77</sup>。当初、第三庁の下には第五處と第六處が置かれたが、組織の途中、蒋介石の命令で、三庁の下に第七處として「対敵宣伝處」を置くことになり、その下の日本文の製作を掌る第三科には東京帝大卒の馮乃超を科長とした。鹿地亘と池田幸子は第七處の顧問となった<sup>78</sup>。38年4月、国共合作下、国民政府軍事委員会政治部第三庁が成立した。これは、軍事委員会政治部副部長の周恩来や郭沫若が、広範な文化人を集めて、抗戦の宣伝をしていたものである。第三庁は4月1日から活動を開始した<sup>79</sup>。

テル夫妻は、38年6月末、国民政府に護送され、漢口へ入った<sup>80</sup>。

『思想月報』53号には、テルが、瀬川輝子というペンネームで、1938年7月10日広州の『救亡日報』に「中国抗戦の一周年記念を祝福す」と一文を載せていると記され、全文が掲載されている。（司法省刑事局編『思想月報復刻版』53号、文生書院、41—44頁。）

テルは、「一の日本女性として」「一反侵略の『エスペランティスト』」として「正義の為闘争する気持ちを持って居た」が、「不幸にも抗戦中の中国兄弟の誤解を招き一度は冷い鉄窓の味を嘗め」、「抗戦国土外」である香港に放逐されたが、友人の助けで再び抗戦の地に戻り「広州にも来て此の光榮なる一週年を迎え得た」と書いている。テルは、7月7日には広州にいたことになっているが、実際にはテルは漢口にいたから、事前に投稿していたのだろう。

テルは、鹿地亘の紹介で国民党国際宣伝処対日科に就職した<sup>81</sup>。国際宣伝處の前身は、蒋介石を首班とする最高指導機関である軍事委員会の下に37年9月に設立された「第五部」であった。「第五部」は同年11月に廃止され、国民党中央宣伝部の下部組織に移管され「国際宣伝處」となった<sup>82</sup>。テル夫妻は、上海路十五号に住み、怡和街・怡和洋行の上にある国民党国際宣伝処対日科に毎朝通い、7月2日午後7時、対日放送による第一声をはなったという<sup>83</sup>。マイクの前で、日本の兵士に、この戦争は聖戦ではなく、「大資本家と軍部の野合世帯である軍事ファシスト」が「自分たちの利益のために起こした侵略戦争」であると訴え始めたのである。

テルと一緒に過ごしたエスペランティスト先錫嘉は、テルの放送は、「人の琴線を動かす語り掛け」だったと述懐している。テルは、「祖国」日本と「新しい故郷」中国の両方を愛していると言い、日本兵士に向かって「誤って血を流さないでください。あなたがたの敵は海のこちら側にはいません」と「大声で連呼」したという<sup>84</sup>。テルの放送をきいた通信兵宮西直輝は揺れ動いた心を歌にしている。

（前略）

鼻にかかった女の声す  
重慶放送 いかなる過去を持ちたる人や  
重慶放送 その流暢な日本語を  
ひそかに聞きて穏やかならず  
一九四一年九月 於 長沙戦線 通信兵 宮西直輝<sup>85</sup>

国民党の日本語アナウンサーの仕事は、彼女にとって、たいへん重要な意味をもっていた。テルは、『戦う中国で』の「あとがき」で、漢口時代について、3 か月という短い期間だったが、「国共合作が完全に実現した」時期、つまり「抵抗戦争はその言葉の正真正銘の意味で全国民的なものだった」と述べている。

前掲『思想月報』53号にはテルに関する記述がもうひとつある。『大公報』に「『九・一八』記念日に際し故国の同胞に告ぐ」というラジオ放送がなされ、その全文が緑川英子の名で掲載されたというものである<sup>86</sup>。ここには、テルの思いが凝縮されている。

今日のこの大民族の悲痛なる記念日にあたり、我われ日本人はすべからく深く反省せねばならぬ。ただ戦争反対を表示するだけでは不充分である。すみやかに立って、反戦の積極行動をとるべきだ！平和を愛する中国の兄弟諸君、私は諸君にも大なる期待をもっている。なぜなら諸君の行動は、単に東方の一時の平穏、平和を意味するばかりでなく、日本ファッショの圧迫下にある中日二大民族の解放をも意味するからだ<sup>87</sup>。

『思想月報』には、鹿地亘も漢口より放送をしていたことが書かれているが、毎週日曜日夜9時は、第三庁が、対敵日本語放送番組を企画したことがわかっている。9月は、テルを招いて「九・一八記念」を放送した。10月は、1日橋本、8日鹿地亘、15日テル、22日青山和夫、29日橋本と順番が決まっていた<sup>88</sup>。

そして、1938年10月26日、漢口は陥落し、1938年11月1日、東京の都新聞にテルの反戦放送活動が報道された。「“嬌声売国奴”の正体はこれ 流暢・日本語を操り怪放送祖国へ毒づく“赤”くづれ長谷川照子」という記事である。東京に在住の父幸之助のインタビューも掲載され、幸之助は、もしもテルが「不忠の女」なら、「私は日本臣民の名誉にかけて立派に自決する覚悟をしております」と語っている<sup>89</sup>。一方テル本人は、9月末に漢口を脱し、10月2日に、湖南省衡陽に到着していたと思われる。2人は、その後、重慶に移動しても、国民党国際宣伝処の仕事をしばらく続けるがやがて辞任し、郭沫若率いる文化工作委員会に所属する。そうした事情については、稿を改めて論じることとする。

## おわりに

テルは、裕福な家庭で高等教育を受けて育ったが、生育過程で日本の女性差別、言論統制、警察権力といった権力による抑圧や弾圧を感じていた。そうした経験は、テルを目覚めさせ、科学、真理、正義を希求する心を掻き立て、志を同じくするパートナーやエスペランチストに助けられながら、正義と理想に燃えて中国に渡る決意をする要因となった。

テルはエスペランチストとして、本当の愛国心は平和的なものであり、排外主義のように人類を断絶するような物ではないという確信を抱いていた。中国では、日本軍の容赦ない爆撃を受ける中国人、租界で優雅に暮らす外国人や裕福な人々などの格差を目の当たりにしながら、そこに生きる人間としての本質を見抜こうとし、貧しい中国女性に強さを感じたりした。被害国中国の真ん中で、加害国日本の国民として肩身の狭い思いをしながら放浪したり、監獄に入れられるといった過酷な体験を経て、信頼する平和運動家の尽力で漢口に呼ばれ、国共合作下、反戦放送などの対敵宣伝に従事し、自らの役割を見出した。

このようなテルの燃えるような生き方から学ぶことは多い。偶然加害国日本に生まれただけだという言い訳はだめだとテルは言う。「ただ戦争反対を表示するだけでは不十分である。すみやかに立って、反戦の積極行動をとるべき」であり、ファシストを打倒し、愛する故郷や人々のために国際友人となって平和を築こうというテルの声は、排外主義と軍事化が進む現代で無力感に苛まれながら生きる私たちに深く突き刺さる。幸い、奈良の般若寺にテルの記念碑を作る計画が進んでいる<sup>90</sup>。日中友好 50 年の今年に、テルの勇気は広く周知されるべきである。

なお、今後のテルの事績や、小稿で掲載しきれなかった数々の作品については、稿を改めて紹介したい。

テルの言葉を紹介するコラム▼



コラム●「お望みならば、私を売国奴と呼んでくださってもけっこうです——長谷川テル」

「お望みならば、私を売国奴と呼んでくださってもけっこうです。決しておそれません。他国を侵略するばかりか、罪のない難民の上にこの世の地獄を平然と作り出している人たちと同じ国民に属していることのほうを、私はより大きい恥としています。」

この言葉は、日中戦争中、中国にあって日本軍兵士にたいして抗日放送に従事した長谷川テル(1912~47)が日本のエスペラントティストに宛てた手紙の一節である。戦争前夜、同じエスペラントティストで夫となる中国人留学生・劉仁と命がけで中国にわたった長谷川は、上海から香港、香港から広州を経て、38年9月漢口に入り、念願の抗日活動に参加し、国民党中央宣伝部国際宣伝処対日科に配置された。

「日本の将兵のみなさん！ みなさんは、この戦争は聖戦だと教えこまれ、そう信じているかもしれませんが、はたしてそうでしょうか。ちがいます。この戦争は、大資本家と軍部の野合世帯である軍事ファシストが、自分たちの利益のために起こした侵略戦争なのです。日本にいるあなたがたの家族は、おなかをすかせて、ひどく苦しんでいます。」

(鈴木裕子)

▲テルの写真と新聞記事

出典：

『ジェンダーの視点から見る日韓近現代史』（日韓「女性」共同歴史教材編纂委員会編、梨の木舎、2005年）

註

- <sup>1</sup> 都新聞 1938(昭和 13)年 11 月 1 日付
- <sup>2</sup> 長谷川テル「中国の勝利は全アジアの明日へのカギである—日本のエスペ란チストへの手紙」(『あらしの中からささやく声』宮本正男編『長谷川テル作品集』亜紀書房、1979 年より) 日本語訳は竹内義一、1937 年上海で執筆。128 頁。原文はエスペラントであり、高杉一郎は、「売国奴」を「裏切り者」と訳している。(「中国の勝利は全アジアの明日への鍵である」高杉一郎訳『嵐の中のささやき』新評論、1980 年より、154 頁)
- <sup>3</sup> 1943 年～44 年に執筆された。テルが書いた「あとがき」によると、もともとは、第一部は「上海の到着で始まり、香港における亡命生活で終わる放浪生活」、第二部は漢口時代、第三部は重慶時代という計画だったというが、結局は第二部、第三部は未完成のまま終わってしまった。1945 年 5 月、重慶の世界語函授学社から出版。1951 年 12 月、大阪のエスペラント通信社から謄写版の復刻版が刊行される。54 年には日本エスペラント図書刊行会から、また『婦人民主新聞』(週刊) 1951 年 7 月 13 日～9 月 21 日号に、宮本正男・北さとの抄訳が連載される。その後、1954 年 12 月に刊行された『嵐の中のささやき』(高杉一郎訳・新評論社) の中にも収録され、1980 年新評論から再刊される。
- <sup>4</sup> 西村幸子「妹テルについて」前掲『長谷川テル作品集』より、283 頁。
- <sup>5</sup> 1937 年 3 月 31 日付。利根光一『増補版・テルの生涯』要文社、1969 年より。98-99 頁。
- <sup>6</sup> 1937 年 4 月 30 日付。同 99 頁。
- <sup>7</sup> テルが校友会に投稿した小説「ぬかるみ」か。
- <sup>8</sup> 水野破魔子「同級生、ベルダ・マーヨ」前掲宮本正男『長谷川テル作品集』より、302 頁。
- <sup>9</sup> 山田雪子「後輩、長谷川テル」前掲『長谷川テル作品集』より、288 頁。
- <sup>10</sup> 1938 年 5 月香港で発表。
- <sup>11</sup> 「Japanio-Lando de barbara regado (暴政の国—日本)」前掲『長谷川テル作品集』より、135 頁。1938 年 5 月香港で執筆。
- <sup>12</sup> 池田幸子「緑川さん」前掲『増補版・テルの生涯』より、256 頁。
- <sup>13</sup> 前掲「暴政の国—日本」134 頁。
- <sup>14</sup> 利根光一「奈良の日々」前掲『増補版・テルの生涯』より、281 頁。
- <sup>15</sup> 長戸は、女学生時代の友人で共産党に入党して活動していた熊沢光子(てるこ)の影響を受け、共産党に関心を寄せていた。長戸はテルにその話はしていなかったが、テルの鋭い洞察力から見抜かれていたのだらうと推測し、そして、「彼女の性格としてはおそらく共産党を好きではなかったと思う。規則にしばられることの嫌いな彼女は、もっと自由に世の中のことを考えたかったにちがいない」と書いている。(平塚昭隆編『横井恭遺稿集(完成版)』1999 年より、232 頁)
- <sup>16</sup> エスペラントとは、ポーランドのユダヤ人ザメンホフによって作られた人工言語。ザメンホフは、国際語を普及させ、差別、支配、排外主義の問題を解決しようとした。
- <sup>17</sup> 『奈良県観光』275 号、1979 年 10 月。
- <sup>18</sup> 前掲『長谷川テル作品集』6 頁。
- <sup>19</sup> 長谷川テル(4 年、文科)、長戸恭(4 年、文科)の他に、田中政子(3 年、文科)、五月女雅子(2 年、文科)、一戸国(2 年、理科)であったという。(前掲『増補版・テルの生涯』285 頁)
- <sup>20</sup> 奈良・長谷川テル顕彰の会『長谷川テル顕彰碑建立をめざして—奈良・長谷川テル顕彰の会第二回総会のしおり』2020 年より、26-27 頁。
- <sup>21</sup> 大山俊峰「長戸恭と長谷川テル」(前掲『長谷川テル作品集』より) 292 頁。
- <sup>22</sup> 前掲『増補版・テルの生涯』より、106-108 頁。
- <sup>23</sup> 長谷川よね、西村幸子『日記の中の長谷川テル』朝日新聞出版サービス、1999 年より、89-92 頁。
- <sup>24</sup> 1932 年 8 月 30 日未明、奈良県内の警察署が警官 200 名余を動員し、治安維持法違反容疑で一斉検挙が行われた。検挙されたものの中には、全農県連本部役員の藤本忠良ら、奈良合同労働組合の大山俊峰らもいた。(治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟奈良県本部『8・30 治安維持法弾圧事件資料集』2013 年)



- 
- <sup>25</sup> 前掲『8・30 治安維持法弾圧事件資料集』
- <sup>26</sup> 西村幸子「妹を憶う」（『みどりの五月』中国旅游出版社、1983年より）372頁。
- <sup>27</sup> 前掲『増補版・テルの生涯』より、116-118頁。
- <sup>28</sup> 前掲『日記の中の長谷川テル』より97頁。
- <sup>29</sup> 前掲『長谷川テル作品集』7頁。
- <sup>30</sup> 日本語訳は、前掲『みどりの五月』に掲載。
- <sup>31</sup> 日本語訳は、前掲『みどりの五月』に掲載。
- <sup>32</sup> 大島義夫・宮本正男『反体制エスぺラント運動史』三省堂、1987年、88頁。
- <sup>33</sup> 前掲『増補版 テルの生涯』131-132頁、前掲『日記の中の長谷川テル』118-124頁。
- <sup>34</sup> 前掲『日記の中の長谷川テル』124頁。
- <sup>35</sup> 葉籟士「緑川英子 その人と業績一序にかえて」（前掲『みどりの五月』）
- <sup>36</sup> 酒井尚美「非戦平和に生きた長谷川テル」（編集委員会編『長谷川テル』せせらぎ出版、2007年）より236-237頁。
- <sup>37</sup> テルは栗栖と文通し、会いに行ったりもしていた。前掲『日記の中の長谷川テル』144頁。
- <sup>38</sup> ウルリッヒ・リンス著、栗栖継訳『危険な言語』（岩波新書、1975年）より、107頁。
- <sup>39</sup> 葉君健「緑川英子に関する回想」（前掲『みどりの五月』）より379頁。
- <sup>40</sup> 前掲『増補版・テルの生涯』148-153頁。
- <sup>41</sup> 関西ザメンホフ祭講演レジュメ「長谷川テルから受け継ぐもの」2021年12月5日。
- <sup>42</sup> 前掲『日記の中の長谷川テル』164頁。
- <sup>43</sup> 前掲『日記の中の長谷川テル』165頁。
- <sup>44</sup> 葉君健「緑川英子に関する回想」（前掲『みどりの五月』）より386頁。
- <sup>45</sup> 前掲『増補版・テルの生涯』155頁。
- <sup>46</sup> 前掲『長谷川テル作品集』37頁、112頁。
- <sup>47</sup> ちなみに、葉君健は武漢で政治部第三庁に入っている。（葉君健「回想」388頁）
- <sup>48</sup> 前掲『長谷川テル作品集』26頁。
- <sup>49</sup> 「中国抗日民族解放運動と長谷川テル—『戦う中国で』論—」『国際文化表現研究』2号2006年より257頁。
- <sup>50</sup> 「戦う中国で」前掲『長谷川テル作品集』34頁。
- <sup>51</sup> 同35頁。
- <sup>52</sup> 同30頁。
- <sup>53</sup> 同36頁。
- <sup>54</sup> 1936年4月創刊。全世界の人が連帯してファシズムに対抗しようと呼びかけ、日中戦争は人類の平和にとって巨大な威嚇となるだけでなく、人類の文明を踏みにじるものだと主張している。陳旭暁「20世紀30年代中国的世界語運動研究」中共中央党校修士論文 23—24頁、ソ連の作家セルゲイ・トレチャコフ Sergei Mikhailovich Tret'yakov の戯曲「吼えろ中国」（中国の労働者の反植民地闘争を描いた。1926年）からとった。陳旭暁23頁、前掲『長谷川テル作品集』112頁。
- <sup>55</sup> 前掲『長谷川テル作品集』40-41頁。
- <sup>56</sup> 「Amo kaj malamo (愛と憎しみ)」1937年8月。（前掲『長谷川テル作品集』124頁）
- <sup>57</sup> 前掲『長谷川テル作品集』126頁。
- <sup>58</sup> ザメンホフ『国際共通語の思想』（岩波新書、1950年）102頁。
- <sup>59</sup> 初芝武美『日本エスぺラント運動史』（財団法人日本エスぺラント学会、1998年）より102頁。
- <sup>60</sup> 『日本評論』1937年10月
- <sup>61</sup> 「戦う中国で」前掲『長谷川テル作品集』31頁、その翻訳記事「花はいかにして開いたか」は、同書257頁掲載。
- <sup>62</sup> 同52頁。
- <sup>63</sup> 同53頁。
- <sup>64</sup> 同54頁。
- <sup>65</sup> 同60頁。

- 66 ちなみに、横浜を出港するときも、ユキがみかんを買いに行っている。テルは、みかんが好物だったようだ。
- 67 同 71-72 頁。
- 68 同 72 頁。
- 69 同 72 頁。
- 70 同 96 頁。
- 71 同 102 頁。
- 72 ‘Reala justo’ 1938 年 2 月（前掲『長谷川テル作品集』）より 348 頁。
- 73 1941 年 10 月重慶で執筆。
- 74 劉仁「ありふれた思い出」（前掲『長谷川テル作品集』）より 117 頁。
- 75 鹿地亘資料調査刊行会『日本人民反戦同盟資料』第 3 巻、1995 年、不二出版。
- 76 前掲『長谷川テル作品集』108 頁。
- 77 郭沫若『抗日戦回想録』（中公文庫、2001 年）より 26-27 頁。
- 78 同 63 頁。
- 79 同 67 頁。
- 80 孫金科、于景鴻「日本作家緑川英子の反戦闘争」『抗日戦争研究』1995 年 2 期。136 頁。また、宮本正男は、「郭沫若、葉籟士、田漢、鹿地亘が奔走して釈放され、漢口入りを許された」と書いている。前掲『長谷川テル作品集』123 頁。
- 81 テルから鹿地亘宛手紙に、「紹介者たるあなた（鹿地）に何のご相談もしなかった」とある。（鹿地亘資料調査刊行会『日本人民反戦同盟資料』第 10 巻、1995 年 不二出版）
- 82 梅村卓「OWI 関係史料からみた検閲をめぐる国民政府とアメリカの対立」『西南学院大学 国際文化論集』第 35 巻第 1 号 2020 年 9 月 118-119 頁。
- 83 坂井前掲論文、242 頁。
- 84 先錫嘉「緑川英子同志を偲ぶ」（前掲『みどりの五月』）より 402 頁。
- 85 坂井前掲論文、232 頁。堀鋭之助という名にしているものもある。（張寅「浅析抗日战争時期緑川英子対日広播的伝播活動」『中国広播』2015 年 11 期）
- 86 1938 年 11 月の『思想月報』53 号には、「九・一八」記念日の夜、鹿地亘、長谷川テルら 4 名が、「九・一八記念に際し故国の同胞に告ぐ」というラジオ放送を行ったと記載されており、そのラジオ放送の内容も掲載されている。また、1938 年 9 月 22 日付の『大公報』に、その記事が掲載されたとも書かれているが、実際に記事が載ったのは 19 日付『大公報』である。（『大公報 影印』人民出版社 1982-1983）
- 87 作品集に資料として掲載されている。338 頁。
- 88 廖利明、仇玉勇「国民政府軍委会政治部第三厅与抗战广播」（『郭沫若学刊』2018 年第 2 期。11 頁。）
- 89 この都新聞の記事は、1938 年 11 月 10 日付「新華日報」に翻訳掲載された。
- 90 奈良・長谷川テル顕彰の会が計画を進めている。（奈良市北永井町 277-3 田辺方）

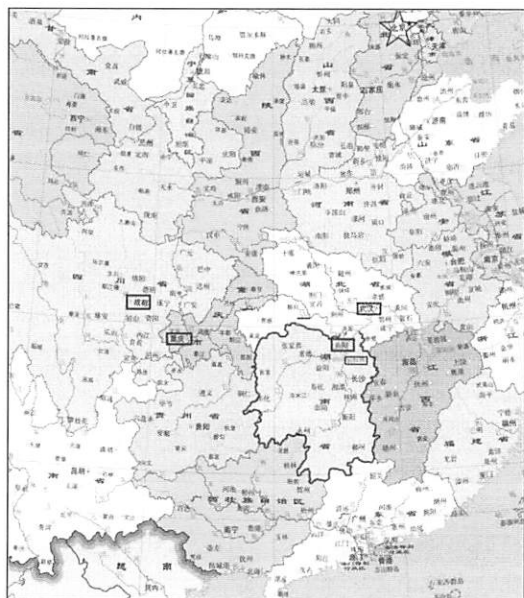
## 湖南省岳陽市における「慰安婦」生存者の聞き取り調査報告

李青凌

### はじめに

2021年5月19日から24日にかけて、上海師範大学の中国「慰安婦」問題研究センター（以下「センター」と略称）が湖南省岳陽市において地元の「慰安婦」生存者3人から聞き取り調査を行った。筆者はこの調査チームに参加する幸運に恵まれた。ささやかながらこの小文によりこの調査について報告したい。

岳陽市（図二の右上濃い色の部分）は湖南省の北東に位置する市であり、湖南省（図一）は中国内陸の中央よりやや東南にあり、北は湖北省、西は重慶市（四川省）に接し、長江中下流に位置し、洞庭湖が南に広がる。



図一 湖南省の位置



図二 湖南省の地図

日中戦争下の1938年10月、日本軍は湖北省の省都である武漢を占領した。日本軍が重慶・四川方面に侵攻すべく湖南省の攻撃を開始したため、それまで戦争の後方であった湖南省は一転して前哨戦の陣地となった。同年11月8日から日本軍は湖南省の臨湘、岳陽、湘陰、平江、華容などに侵入し、湖南省の各地の町や集落がほぼ陥落した。1945年8月の日本軍の降伏に至るまでの7年間、岳陽はずっと日本軍の駐屯地であった。<sup>1</sup>

2021年5月までの湖南省における日本軍「慰安婦」被害調査の状況をふりかえってみよう。第一段階は、2001年6月、上海師範大学教授の蘇智良が湖南省益陽を訪ね、当時の「慰安婦」生存者劉秀英と譚玉華から聞き取りをしたことである。それをきっかけとして湖南省「慰安婦」被害者の訪問・聞き取り調査が始まった。第二段階は、2016年から2019年

<sup>1</sup> 『岳陽市志』。

まで集中的に調査が実施された段階である。この段階で地元の調査ボランティアの協力を得て、「慰安婦」生存者 16 名の聞き取り調査が行われている。

その後、新型コロナウイルスの感染拡大によって一時的に調査が停頓を余儀なくされたが、コロナ禍が落ち着きを見せるようになった 2020 年 10 月には再び調査が活発になった。それから現在までを第三段階とすることができる。2020 年 10 月からセンターの調査チームが湖南省岳陽市、臨湘県、平江県を訪問し、「慰安婦」被害者たちの聞き取りを行った。そして 2021 年 5 月に筆者を含む調査チームが湖南省華容県、平江県に行き、聞き取りを行うことになったのである。現時点では、湖南省において発見された「慰安婦」被害者は合計 21 名にのぼる。

その 21 名の被害者の内、湯根珍は、「自分のことを裏切り者が日本軍に報告したため日本軍が村に侵入し、家族の命と村を焼き払うと脅して自分を強制連行しようとした」と証言した。彭仁寿は、村に侵入した日本軍から隠れようとして棚に潜り込んでいた時に、日本軍治安維持会<sup>2</sup>の加入者が家族と村民を殺すと脅し、彭を拉致した。易菊連も、侵入した日本軍を避けようとして逃げる途中に捕まった。又、平江県の林は、14 歳の頃に日本軍に拉致された。父は娘が拉致されたと聞き、助けに行って日本軍に殺されてしまった。ほかの 2 名の女性は、川の傍で洗濯しているところを日本軍に見つかって拉致された。

湖南省各地の檔案館に所蔵される地方誌（『華容県誌』、『平江県志』、『岳陽市志』など）によると、山が多く解放区、抗日遊撃区並びに中間地帯と被占領区<sup>3</sup>が並列して存在していた当時の湖南省には前線と後方の境界線がはっきりしていなかったと記載されている。日本軍「慰安婦」にされた中国人女性は、民家の娘が自宅や道で目をつけられて拉致被害を受けたケースが典型的だ<sup>4</sup>と従来から指摘されている。そして、もう一つ見過ごせない事実は、被害女性の証言から、小さなグループを組み合わせた僅か数名の日本軍人に捕まり、その後、集団的で組織的な暴力を受けたことが明らかになったことだ。

## 聞き取り調査の準備と態勢

センターは、ただ単に新たに名乗り出た被害者の聞き取りを行うだけでなく、その調査が「慰安婦」被害者たちの名誉回復と支援に役立つことを目的として聴き取り調査を行っている。性暴力被害女性への聞き取りは、言うまでもなく容易なことではない。そこで調査チームは、「慰安婦」被害者が遠慮しないで話ができるように工夫し、準備を重ねた。

準備の第一は、聞き手と語り手の間に共通の認識を築くことである。聞き取り調査の対象選定は、聞き手側が語り手を一方的に選ぶと思われるがちだが、実はそうではない。確かに聞き手側は、語り手である「慰安婦」被害者の認知症の有無や自らの言葉で話ができるか否かなどを考慮する。同時に、語り手側も聞き手側がどこの誰で何を調査しているのかを予め伝えられ、考えた上で許諾を決める。つまり、聞き手と語り手が互いに聞き取り調査に関する共通の認識を持っていることを基礎に実現されるのである。

第二は、関連する文書資料の収集である。過去のことを語る語り手は記憶がぼんやりし

<sup>2</sup> 治安維持会は日中戦争期間中、日本軍が占領した中国現地によりよい統治を実現しようとするために設立した一時的な地元の傀儡組織である。よく「維持会」と言われた。

<sup>3</sup> 日本軍にとっては「敵性地域」、「準治安地域」と「治安地域」。

<sup>4</sup> 蘇智良：『日本軍「慰安婦」研究』、團結出版社、2015 年。

たり混乱したりする可能性がある。そのため、ただ口述を聞くというだけではなく、これを補う文書資料が不可欠である、口述資料は、文書資料との対照を通して、内容の真実性と細部のディテールまでを検証することができる。従って、語り手が確定してから聞き取りを実施するまでの時間に、語り手がいる地域の資料をできるだけ多く収集するのが緊要である。2021 年 5 月の調査では、語り手に会う前に聞き手のチームは次のような資料(表 2) を入手した。

表 2 文書資料一覧

| 番号 | 名称      | 所蔵地    | 備考                                                         |
|----|---------|--------|------------------------------------------------------------|
| 1  | 『華容県誌』  | 華容県檔案館 | 「大事記」部分(1923~1949 年)<br>第十九編「軍事」部分(P621~623)               |
| 2  | 『荊州地区志』 | 荊州市檔案館 | 第五章「戦事」部分(P665~667)                                        |
| 3  | 『石首県誌』  | 石首檔案館  | 「大事記」部分(1943~1945 年)                                       |
| 4  | 『華容県図』  | 湖南省民政庁 | 『湖南省分県地図』1941 年版                                           |
| 5  | 『汨羅市志』  | 汨羅市檔案館 | 「大事記」部分(1935~1949 年)<br>第五編「軍事」部分(P213~220)                |
| 6  | 『平江県志』  | 岳陽市史志室 | 卷一「総述」部分(P1~3)<br>卷二「大事記」部分(1935~1949 年)<br>卷五「政治」部分(P437) |
| 7  | 『岳陽市志』  | 岳陽市史志室 | 第一冊「総述巻」、「大事記巻」と「建置・<br>区画巻」の部分                            |

チームは先ず、1939~1945 年の湖南省とそれぞれの調査現地の公文書に記載された日本軍侵入に関する史実情報を把握する作業を行い、語り手が話す内容を史実と照らし合わせて確かめることができるようにした。またチームは、聞き取りの質問項目(表)を作成した。インタビューでは語り手の記憶を喚起しやすい質問から始める方がよい。聴き取りの要点と注意事項(婉曲な表現、慣用表現、言葉の言い換え…)を注意することが重要である。

以上のような事前準備に加えて、語り手が皆高齢者であり方言で語るという事情から、傍に標準語が話せる通訳に同伴してもらう準備も必要である。通訳は地元の方が話せれば誰でもできるわけではない。長年の調査経験を踏まえてチームは「慰安婦」被害者が話す時、自分自身の肉親が傍にいれば勇気を得て徐々に語るようになることに気づいていた。そこで 2021 年 5 月の調査においても、聞き取り調査の実施現場に調査チーム側は語り手の娘や息子、息子の妻などに依頼し、方言と標準語の通訳者の役割を担っていただいた。

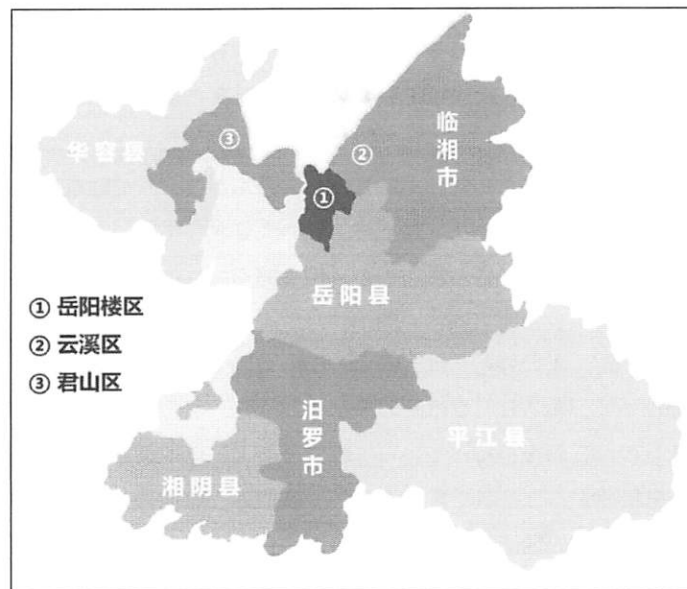
センターからの参加者は筆者を含め男女 5 人だが、聞き手の人数は 3 人で行うのがよいとのセンターの考えに基づいて、女性 3 人が聞き手を務めた。3 人の内、中国「慰安婦」問題研究センター研究員である陳麗菲が主な聞き手となり、筆者と上海師範大学の修士生張さんは助手をつとめ、質問と資料面で支え、話の取り次ぎ手、録音、メモ取りを行った。筆者は主に話の中にあらわれた疑問点を見つけ、訂正・追加・補足すべき部分を提起する役目を担った。男性 2 人は撮影を担当し、1 人がビデオ、もう 1 人が写真を担当した。つ

まり彼らは聞き取り現場と「慰安婦」被害者であるおばあちゃんの証言を記録し保存することが任務であり、その責任も重大である。

## 聞き取りの内容

### （１）小瑞おばあさん

2021年5月20日、私たちは地元ボランティアの協力を得て、小瑞おばあちゃん（以下「小瑞」と略称）の家を訪ねた。小瑞は岳陽市内ではなく辺鄙で遠い田舎で暮らしている。下の地図（図三）の①が岳陽市内であり、一番左上の色の薄い所に小瑞の家がある。車で2時間ぐらい走って、午後1時20分頃ようやく小瑞の家についた。この日に聞き取り調査を行うことは予め伝えており、到着して聞き手一行がどこのだれであるかが確認された後、早速、聞き取りを開始した。



図三 岳陽市の地図

まず聞き手の主役（陳）が挨拶し、日常生活のことから話を始めた。小瑞は陳との会話のパターンに慣れるにつれて、徐々に過去のことを語るようになっていった。会話は、過去のことに関する回顧を手がかりとして少しずつ戦争の話に近づいた。その時に聞き手は決して焦って「慰安婦」の話に突入しないように自戒し、小瑞の様子を見守りつつ対話を続けた。その理由は、かつてセンター調査チームが日本軍侵入や日本兵などの言葉を聞くだけで怖くて体が震えだす被害女性のケースを経験したことがあったからである。陳は、聞き手のエキスパートと言える豊かな経験の持ち主であり、なるべく直接的に性に関する言葉を使わないようにして語り手の話に耳を傾けていた。小瑞の息子の妻がずっと傍に寄り添い、方言と標準語の通訳もつとめた。こうして聞き取りは順調に進んだ。以下が、小瑞の語った内容である。（問答形式で聞いたものを文章化した）

その日、私が自宅にいと、村に突如日本軍が侵入して来た。刀と銃を持っている日本軍が村を歩きまわって地元の女の子を捜していた。私は怖くて逃げたが追いかけて捕まった。手は紐で縛られこそしなかったが、日本軍人2人（時に4人）が私の前と後ろを固めて私を歩



かせ、どこかへ連れていった。約30分前後歩いて塀で囲まれた大きな庭のような場所に着いた。日本軍は瓦葺きの建物に住んでいたが、同じく捕まって連れて来られた女の子たちは茅葺きの粗末な建物に住まわされていた。みんなの部屋は、その茅葺きの建物の中に作られたちっちゃい部屋。ベッドがあったかどうかはもう記憶がぼんやりしているが、なにか床に布団を敷いて寝たようだ。着替える物はない。かける布団もない。強制連行の時の服を着たままで寝るしかない。服は日本軍人がひっぱって破った。それでも、着替えるための衣服一着さえももらえなかった。かけ布団もなかった。一日に一食、時々二食。誰がご飯を作っているのかはわからないが維持会の人ではなく日本軍がご飯を持ってくる。その時にはまだ維持会は作られていなかった。怖くて泣きっぱなしで、お腹が空くことさえ気を配る余裕がなかった。日本軍が部屋のドアに立って見張っていた。庭に高い望楼がある。その望楼に立っている日本軍がいる。部屋の外に日本軍が行列して順番に入る。まだ若い小娘であった私の部屋に、日本軍が一日に少ない時でも2人は来た。午前、午後、夜、来たい時にいつでも時間に関係なく来る。日本軍が部屋に入ってくる度に私は怖くて体が震えていた。それでも日本軍はよく刀をあげて振りながら私を脅迫した。毎回来る日本軍人の顔は違い、数日後にはまた別グループの日本軍人が来た。そのまま半月ぐらい過ぎた。果てしなく長く感じた。半月以上だったかもしれない。そのような日々から救い出したのはお父さんだ。ある日、お父さんがひとりで駐屯地に来て私を家に連れ帰った。帰り道でお父さんは泣いた。帰宅後、私の大好きな小船がなくなっていた。美しく質が素晴らしい船だった。お父さんに聞くと「何も聞くな」って。そして「日本軍人に捕まったことを誰にも言うなよ」と慎重に言い聞かせた。家も空家みたいになっていた。貯めていた金の延棒も消えていた。家の暮らしは、捕まる前の裕福で幸せな生活から貧しい暮らしへ変わった。数年後になって、ある日、私はその経緯を知った。あの日お父さんがひとりで駐屯地に来ることができたのは、お金を持って行って維持会の人に日本軍との交渉を乞い、それでようやく娘（小瑞）を釈放することができたそう。18歳になる前に、私はお父さんの意思に従って結婚した。しかし、その前にあんな目に遭ったから、ずっと子どもは孕まなかった。夫は優しくしてくれて仲良かったが、私は夫にすまない気持ちを持っていて離婚した。その後、現在の夫と結婚して養子を迎えた。

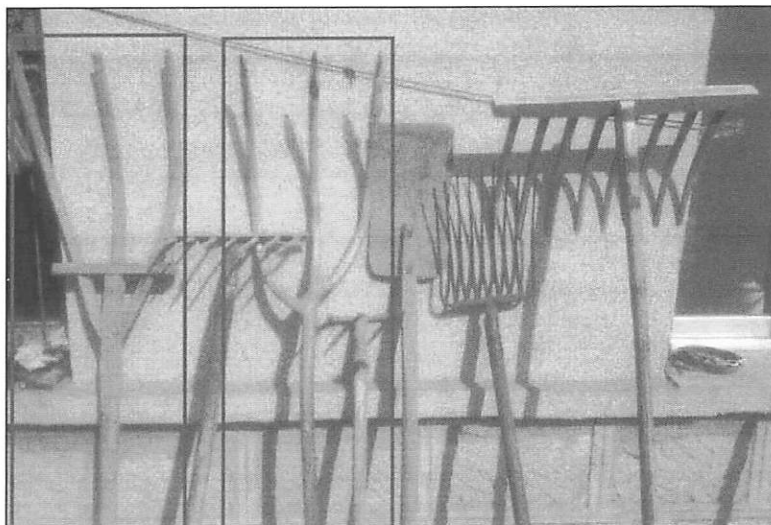
## （2）大瑞おばあさん

名前から大瑞おばあさん（以下「大瑞」と略称）と小瑞の関係がすぐわかった。大瑞は小瑞の姉だ。調査チームは、小瑞に聞き取りを行う時に大瑞のことも聞いた。その時に小瑞は妹の立場から大瑞が捕まった時の様子を語った。

5月21日午前に大瑞の家を訪ねると、大瑞は大きな椅子に座って膝の上に暖かそうな毛布をかけて服を縫っていた。大瑞の家族と挨拶した後、小瑞の時と同様に日常生活の話から聞き取りが始まった。が、話が日本軍に及ぶと大瑞は急に体が震えだし、大声で「死ぬほど怖い！」と叫んだ。聞き手の主役（陳）はすぐ大瑞を抱いて大瑞が落ち着くまでずっと優しく慰めていた。大瑞の様子を見た陳はためらわず聞き取り調査の中止を決めた。もし無理に聞き取りを続ければ、記憶に蝕まれた大瑞は過度なプレッシャーのため二次被害を受けるおそれがある。それは決して調査チームの本意ではない。それで大瑞への聞き取りはここまでで終わったが、地元のボランティアから、大瑞を知るもう一人の当事者である張二英（以下、「張」と略称）の存在を教えられた。地元のボランティアの協力を得て、

調査チームは老人ホームに住む張を訪ねて行った。

張によると、大瑞は若い時に張の母と仲が良く、義理の姉妹関係を結んでいた。それで張にとって大瑞は親子の義を結んだ母という存在である。張は幼かったある日、日本軍人に捕まり、日本軍人に昔の湖南省の農家によく見られる農具（図四）を脇の下に入れて



図四 張がもてあそばれた農具（線に囲まれたもの）

高くあげられた経験がある。まるで人形やボールなどのように扱われ、もてあそばれた。張は怖くて卒倒した。自宅のベッドで目覚めると、実母が傍におり、実母は「お前の命を救ったのは義理の母の大瑞だよ。大きくなっても絶対忘れないでね」と張に言った。張は自分が救われた経緯を聞いた。あの日、張が日本軍にもてあそばれているのを偶然に通リかかった大瑞が見た。大瑞は、その子供が自分の義理の娘だと気づき、勇気を出して「その子の代わりに私が貴方たちと一緒にいきます」と言うと、日本軍は喜んで張を解放した。こうして張は救われたが、大瑞は日本軍に連れて行かれ「慰安婦」にされた。

### （3）蔣おばあさん

5月22日、岳陽は雨が降っていた。調査チーム一行は泥だらけの山道に沿い、車で約2時間をかけて、平江（前出の図三の右下）に住む蔣おばあさん（以下「蔣」と略称）の家に行った。地元ボランティアの協力を得て、予め聞き取り調査を行うことを蔣の家族に知らせた。筆者一行がどこの誰であるかが確認された後、聞き取り調査を行った。

蔣は若い時に女兵を志願して戦地の医療兵になった経歴がある。聞き取り中、日本軍に言及すると、他の対象者に比べて積極的に話すようになった。蔣は自分が女兵を志願して戦地の医療兵になった経歴を大いに語りつつ、日本軍に捕まったことはやはり最初は不安だったのか語ろうとしなかった。それで調査チームは聞き取りの過程で蔣の気持ちを慎重に見守り、大丈夫だと判断してから日本軍に捕まったことを聞いてみた。蔣は娘からの支持と調査チームからの励ましの言葉で勇気を出し、その体験を語った。以下は聞き取りからまとめた証言の一部分である。

わが家には子どもが姉と私の女の子2人しかいなかった。幼い頃に父は亡くなった。母は私を「童養媳」（幼時から息子の将来の妻として他家に引き取られて育てられる女兒）にして、

ある同い歳の男児の家に送った。姉は体が弱くてよく病気になる母のそばにいた。7 歳頃に、その男児は死亡した。叔父（母の弟）が私を迎えにきて、私が実家に帰った時には母はすでに病気で亡くなっていた。女の子だからといって私は叔父に軽視されたり差別されたりしたことはない。当時の中国では、一般的に男の子しか教育を受ける機会が与えられなかったが、叔父は自分の娘として私を扱い育ててくれ、私と姉を私塾に通わせて女子校にも行かせてくれた。おかげで、私は字が読めるようになった。1939 年、日本軍が侵入してくると聞いて私と姉は女兵を志願して軍隊に入ることを望んだ。姉と一緒に汨羅に行き、入隊を申し込んだ。その後、医療兵の一員として野戦病院で負傷した兵士を世話する仕事をしていた。野戦病院は戦場により移動するから、他の戦場に移る命令を受けた。野戦病院が移された翌日に私は町に買い物に行く予定があった。町を歩いている途中、国民革命軍と日本軍の戦いが始まった。私は日本軍に追いかけて捕まった。連行された私は木造建物の二階に監禁され、一階に刀や銃を持った日本軍人が立って見張っていた。私は「しょせん死ぬほど日本軍に虐待されているのだから、一か八か二階の窓から下に飛び降りてみよう」と思って飛び降りた。足の骨が折れたが、その時はそれに気を配る余裕はなく、必死に走って逃げた。あれから足が不自由になって、今でも足を引きずって歩いている。

## 検証作業

「慰安婦」被害者たちの語りを聞き取った調査チームは、その後、証言に出てきた場所に行って確認したり地元の人に聞いたりして被害者たちの話の検証を試みた。

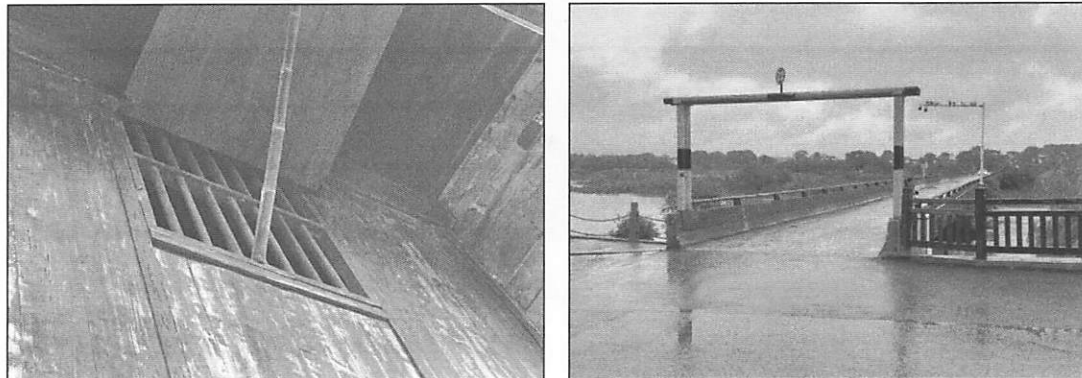
被害者である女性たちは高齢であるため、半世紀前の出来事の具体的な日付と場所をはっきり覚えていなかったというのはごく普通のことであった。研究者である調査チームには、その語りの内容を学術的に検証する責務がある。公文書に残された史料とフィールドワークを引証して歯車がかみあうように互いを証明しあうようにすることが重要である。

昔の中国では今日用いている暦法があまり使われず、民間人はよく伝統的な暦法（陰暦）を使っていた。中国の伝統的な暦法と現在の世界の共通暦（太陽暦）との間には日付のズレがあり、田舎では日付より天候・節気（気候の変わり目を示す 24 の日。例えば春分の日、秋分の日など）の変化に一層敏感だった。従って、私たちは小瑞が捕まった日付を知るため、証言に出た当時の天気・寒暖、『華容県誌』にみえる日本軍侵入の日時、地元の維持会が設立された日時という 3 つの情報を合わせて小瑞が捕まった日付と「慰安婦」にされた日数を明らかにしようとした。

具体的に言えば、小瑞の証言に「捕まったのは維持会が設立される前のことだった」、「ちょっと寒くてコートを着ていたが、重い服を着るほど寒くなってはいない季節だった」という言葉から、1943 年の初春か初秋であると推定した。これに加えて、日本軍の侵入が 3 月 8 日に開始しており、維持会は 5 月中旬頃に設立されているという事実をふまえて、彼女が捕まったのは 3 月 10 日から 5 月中旬までの間だと推定した。また、小瑞の証言に出て来た「庭」と「トーチカ」（捕まって監禁された慰安所の位置）に関する検証は、現地を探訪し、また地元の古老から証言を集めて検証した。つまり、小瑞は「埠頭まで連れられていった」「約 30 分前後の間、歩いていた」「壁に囲まれた建物：トーチカがあり、大きな庭があった」と語っていることから、彼女が言及した現地を調査し、そこに長年住んでいるお年寄り 3 人に聞き、範囲を絞って建物を明らかにした。これは資料に記載されて

いる日本軍の駐屯地と符合しており、この建物が慰安所であったと確認することができたのである。

また蔣の場合、証言に出た「監禁された二階建の木造建物」、「地面に飛び下りた二階の窓」と「必死に走って逃げた時に渡った川」などの場所の現地（図四）も探訪した。



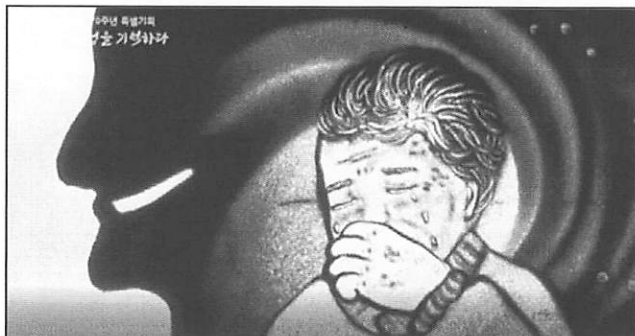
図四 左の写真は二階建の木造建物、右の写真は走って逃げた時に渡った川（筆者撮る）

## 終わりに

このフィールドワークで多くの経験をし、勉強ができた。それらは私の人生に大切な思い出として残っている。この小文の終わりに、このフィールドワークで最も感動したシーンについて書いておきたい。それは、私たち一行が小瑞ばあちゃんの家を離れる時に、ばあちゃんが「ようやく青空（青天）を見たわ！」と言ったことだ。中国では、「青空（青天）」という言葉が出るシーンは、いつも裁判の公正無私と繋がる。その時によく言われる人物は「包拯（包青天）」である。包拯は歴史上に実在した人物で、名裁判官として活躍した物語が現在まで伝えられ、中国では子どもからお年寄りまで誰でも知っている。徳川光圀を「黄門様」と日本人が呼ぶように、中国人は尊敬をこめて彼を「包青天」と呼ぶ。だから小瑞ばあちゃんが言いたいのは「今日まで私が受けた不公平な扱いを理解してくれ、私の訴えを執り裁いてくれる人がようやく出た。私は今までずっとこの日を待っていた！」ということである。

いかに真実が深く埋められ隠されても、世界に真実を告げたいという女性たちの気持ちを抹殺することはできない。

## 朝鮮戦争 70 周年特別企画—戦争、女性を記憶する



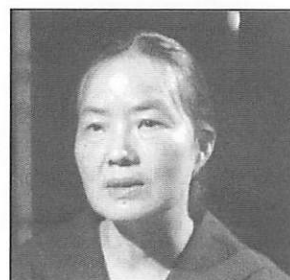
これは、韓国 MBC 放送が 2020 年に朝鮮戦争 70 周年特別企画として制作したテレビドキュメンタリーを文字化したものである。

(翻訳: 鄭玟汀、監修: 永谷ゆき子)

### 1 部: 戦争の重さ

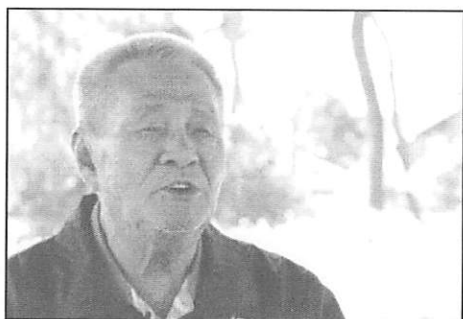
●李林夏 イ・イムハ ソンゴンフェ (聖公会大学、東アジア研究所教授)

「私は朝鮮戦争をめぐって、単に戦闘の歴史だけを強調していることに疑問を持ちます。女性が戦時期どう生きたのか、また女性は戦争にどのように動員されたのか、また戦後、女性はどうか生きたのか、という視点を持つことで、これまで触れられなかった国家暴力の問題など多くの事実が浮き彫りになるでしょう。そういう面で、これまで女性のことが抜け落ちてきたのではないかと、沈黙させてきたのではないかという気がします。」



ナレーション (以下、ナと略す) カンウォンドカンヌン チョダンドン 江原道江陵市草堂洞、豆腐で有名な村です。ここは朝鮮戦争の際、大々的な虐殺が行われ、そのために寡婦の村になったところです。

●キム・ナムス カンヌン チョダンドン (82 歳、江陵市草堂洞)



「村の 230 戸のほとんどが貧しい小作農で、地主は 4、5 戸しかない。地主の家で家族を働かせることで田圃を少し借りることができるが、小作の取り分は 3 割だけ。いくら働いても小作農は収穫の 7 割を地主に収奪される構造になっている。そこに人民軍がやって来て、みんな平等に暮らしているというから、小作農のほとんどが加入したんだよ。皆ハンコを押したが、結局、人民軍に協調したという嫌疑で韓国

軍と警察に殺される事件があった。それで残った女たちは、生計のために豆腐の商売を始めたわけだ。」

ナ チョダン 江陵の草堂豆腐がこれほど有名になったのは、生き残った女たちの生計手段だったからです。生きるために豆腐の商売を始めた草堂の女性たち。当時、江陵中央市場には草堂豆腐横丁が作られていました。

- ナ 夫や子どもと幸せに暮らしていた妻は、戦場で夫を失い、長く寂しい時間を送ります。
- ナ 戦争は数多くの男たちの命を奪いました。戦闘中、避難中、また虐殺もされました。朝鮮戦争によって夫を亡くした女性の数は分かっておらず、これまで調査すらされていません。

●李林夏（聖公会大学、東アジア研究所 教授）

「戦争体験は個人によって温度差があり、個人それぞれの状況によって戦争体験も異なるのです。戦争で夫を亡くした妻の場合は、夫と別れた時、その時点が戦争の始まりです。」

- ナ 2020 年 6 月 25 日、朝鮮戦争が勃発してから 70 年になる日、新型コロナウイルス感染症の影響で、予定されていた記念行事は縮小されました。

【字幕：2020 年 6・25 戦争 70 周年行事の現場—<sup>チヨロン</sup> 鉄原の<sup>ベンマ</sup>白馬高地（激戦地）】

（劇のセリフ） こんなところで死んじゃだめだ！起きろ！

●キム・オクチャ（70 歳、戦没軍警寡婦会 江原道支部会長）

「みなさん 20 代に夫を亡くし苦難と逆境を経験なさいました。男たちはその苦難について想像もできないでしょう。当時、そういう女性は社会から見くびられていました。夫のいない女性は軽く扱っても良いという昔からの習わしや、女のお前が媚びるから悪いという根深い偏見があり、女たちは精神的な苦痛に苛まれていました。」

【字幕：<sup>カンヌン</sup> 江陵市 <sup>クジョンミョン</sup> 邱井面】

- ナ：江陵市邱井面、ここに新婚時代に夫を亡くし一人で逆境の中を生き抜いたおばあさんがいます。認知症になって療養施設で暮らしています。

●チェ・ポ克蘭（92 歳、江陵戦没軍警寡婦）

（介護者）朝鮮戦争が開戦した 6 月 25 日の日曜日がこの方の結婚式の日だったそうです。

- 聞き手 結婚して一緒に暮らしたのは？
- 「ほんのわずかの間だけ。どう生きればいいのか、いつも泣いてばかり。泣かない日なかった。そのうち私は商売を始めたよ。」

- 聞き手 どういう商売ですか？
- 「缶詰や野菜などの商売をしたよ」



- ナ 戦争は終り、夫は消えてしまいました。いきなり家長になったので、家族の生計のためにどんな嫌な仕事でもやりました。



「大変という言葉では足りないほど、大変苦勞した。私に少し稼ぎがあると男たちが近づいて来るので、自己防衛のため、刃物まで持って自らを守った。夜も刃物を枕元に置いて寝るほどだった。」

●チェ・インスク（92歳、江陵戦没軍警寡婦）

「一人暮らしだから、夜怖くて眠れなかった。男が侵入してくる恐れがあったから。3月か4月のことだったが、電気を消して横になっている時、誰かが門を開けて入ってきたので、『どなた？』と聞いたら、ドアをパツと閉めてそのまま帰らない。私はその人の正体が分からないまま悔しくてたまらなかった。それ以降、男というと嫌気がさしてしまう」

ナ まだ背中から下ろせない小さい赤ちゃんがいる母親たちが、命の危険さえ覚えるほど大変だった生計維持の役割を負いました。夫を失った女たちに対して世間はなぜこれほど過酷なのでしょうか。



●李林夏（聖公会大学、東アジア研究所 教授）

「彼女たちは結婚して3ヶ月か1年程度でした。戦争の最中に妊娠していたか、あるいは出産間もない頃だから、子どもは多くて1～2人の場合が多かったですね。また彼女たちに戦争体験を聞いてみると、自分がどうやって避難したか、妊娠中の避難の大変さ、出産直後の避難の大変さが戦争体験として強く残っています。」

【字幕：1950年11月1日 <sup>テジョン</sup> 大田】

ナ 占領軍はそこに残っていた民間人を虐殺しました。その時、南朝鮮の軍人や警察も無数に殺されました。

●イ・ヨンジャ（戦没軍警寡婦）

「（夫の）職業は大田警察署長でした。夫が殺されて、（私は）<sup>チヨルラブクトクムサン</sup> 全羅北道錦山郡智異山面に避難しました。避難した翌々日に逮捕され、大田刑務所に移されました。（夫は）陰暦8月14日に傀儡軍により虐殺されたのですが、その後、遺体を探し回り、13日目にある山で見つかりました。遺体の状態をみると、



後ろ手に縛られ銃弾が両腕に当たっており、それから顔に傷があり、目玉が抜けていました。その後、遺骸を先祖の墓がある山に埋葬しましたが、その悔しさは言葉では言い表すことができません。」

サムチョク  
【字幕：三陟市庁】

ナ 虐殺についての記録は多くありません。子孫は白髪頭になっても父親の痕跡を探し求めています。

#### ●パク・マンスン（忠北歴史文化連帯 代表）

「連行されて集団虐殺された事件がありました。もしその記録が残っていたら、それを確認したいのですが」

ナ 三陟で虐殺された元警察の父の記録を探しているというチョン・ミョンヒハルモニ。墓をもつかむ気持ちで役所を歩き回りましたが、当時の戦争関連記録は国家主義的基準によって選択・抜粋されていました。

「三陟郡史をみても、そこには虐殺事件などの記録がありません。江原道史も調べてみましたが、その詳細については何も書かれていないですね。」

「ええ、ありませんね。」

#### ●チョン・ミョンヒ（76 歳、戦没軍警遺族）



「軍人と警察官の家族は避難するように言われたが、母が私に向かって石を投げながらついて来られないようにして、母一人で行ってしまったから最初は母を恨んだ。しかし、それは時代が悪かったせいで、父は銃殺され、母もそういうふうになんか死んだことが理解できて、今は母を恨まなくなった。」

ナ 戦争で死者も続出しましたが、一生消えることのない悪夢のように、障害を持つ身となった傷痍軍人も多かったのです。

ソクチョ  
【字幕：束草市 報勲会館】

ナ 傷痍軍警の妻たちはどんな人生を歩んだのでしょうか。

【字幕：キム・ソンチュンプロデューサー】

#### ●ソ・スウォル（86 歳、傷痍軍警の妻）

「服を着ていたので、義足ということに気づきませんでした。初夜を過ごしてやっと分か

り、後悔しました。誰でもそう思うでしょう。それでも、私の弟の面倒を見てくれるという話だったので、ありがたい気持ちもありました。」

●パク・スンナム（85 歳、傷痍軍警の妻）

「まったく知らないまま結婚しました。」

**聞き手** 知らないまま結婚したんですか？

「そうです。知っていたら、結婚するはずがないでしょう。言ってくれなくて騙されました。」

●イ・キボン（83 歳、傷痍軍警の妻）

「私はその人と結婚したくないと言ったが、両親が『いい人だから』と言い、無理やり結婚させられ、一緒になりました。」

●オム・ジョンヒ（89 歳、傷痍軍警未の妻）

「昔は一度結婚したら、死ぬまで続いた。今のように離婚して帰って来たりできなかった。昔はそうでした。」

●イ・キボン（83 歳、傷痍軍警の妻）

「良い人だというから。その人のところ以外に、追い出された私が行くところもなく。」



【字幕：軍警合同結婚式】

<1954 年 1 月 4 日 大韓ニュース>

第 8 次傷痍勇士の合同結婚式がソウル市公館において、元国防長官の司会・進行で、全国民の祝福のなか挙行されました。一身を捧げ国家と民族を守る滅共の戦場で、不幸にも障害者となった勇士を支える伴侶になって…

「一度逃げたことがあります、さんざん殴られました。逃げることもできない。夫が北朝鮮出身だから性格が激しく怖かった。黄海道出身の人は機嫌が悪くなると撲るからね。私は主人のために大変苦労しました。戦場で人を殺していたからかもしれない。長女が赤

ちゃんの時、目が黒くて可愛かったが、その子を置き去りにして家出することはできず、我慢した。」

#### ●キム・テヒ（87 歳、傷痍軍警の妻）

「夫は激しい性格でした。私のお腹を足で蹴ったので、お腹の中にいた胎児が臍の下部に押されてそこで成長してしまいました。早産したが、赤ん坊はカエルほどの大きさでした。夫は、その子は自分の子ではないと言い、自分の罪を省みることもなかった。」

ナ 病んだ身体、戦争のトラウマ、夫は心身の苦しみによる怒りを妻に対して発散しました。「この人も可哀そうだ」と夫に憐憫の情を抱き、子どものために耐えてきたのが、70 年という長い歲月でした。

チュンブク チョンジュ

【字幕：忠北 清州市】

ナ それでも、保導連盟\*の父や夫を持った人に比べると、国家有功者や傷痍軍人警察官の妻たちは良い方だったでしょう。

（\*注：左翼やその家族を再教育するとして 1949 年設立された統制組織で、朝鮮戦争の勃発と同時に李承晩政権は、保導連盟加盟者や政治犯・民間人を大量虐殺した。）

#### ●チョ・ヘジャ（76 歳、虐殺者遺族）



「縄で縛られた人々がトラックに載せられて警察署から出てくるのを見ました。その後どうなったのか全く分からなかった。後で、母から聞いた話によると、カドクというところで全員銃殺されたそうです。乳児まで含め子どもが 4 人もいるので、夫の死を確認するために探し回るのも難しかった。また、母は字が読めなかったので、他の人が遺体を探しに行くといっても母はそれもできず、何もわからないままになりました。」

ナ 遺体が見つかっただけでも運が良かったのでした。損傷がひどく誰か分からない場合や、初めから探しに行くことすらできない人が多かったのです。死と生が交錯しながら、残された家族は沈黙を強要されました。

「成長してから、やっと父が縄付きになったことの意味がわかったのですが、その時は目撃してもどうということなのか理解できませんでした。保導連盟という言葉はタブーでした。アカの子どもと言われるからです。その後、家政婦として働きながら大変苦勞しました。これまでやっと生き延びたといえます。」

ヤンヤン チョサンリ  
【字幕：襄陽郡造山里】

ナ 江原道襄陽郡造山里、ここは戦争前には北朝鮮の支配下にあった場所です。大多数の家長は戦争後に北朝鮮に行くことを選択するようになりました。家族を残したままです。

●カン・チャンギユ（83 歳、襄陽郡造山里）

「韓国では私ができる仕事はなかった。」

聞き手 連座制ですね？

「うん、連座制だ。私は漢陽大学<sup>ハニヤン</sup>を卒業して、就職先として農協に合格し、襄陽農協の辞令をもらったが一週間で辞令が取り消された。なぜ取り消されたかという、近所に中央情報院の連絡員がいて、組合長に妨害工作をし、辞令の取り消しになった。組合長が家に来てそう言いました。怒っていましたよ。」

ナ 大韓民国は、戦争という名の国家暴力により夫を亡くした女性や家族に対して責任を取りませんでした。明確な真相調査と適切な補償が必要なのに、それを放棄しました。

●チェ・スンジブ（80 歳、江陵）

「人民軍が女を狙ってきて、二人の人民軍が激しく抵抗する女を捕まえていった。」

●パク・チェファン（90 歳、江陵）

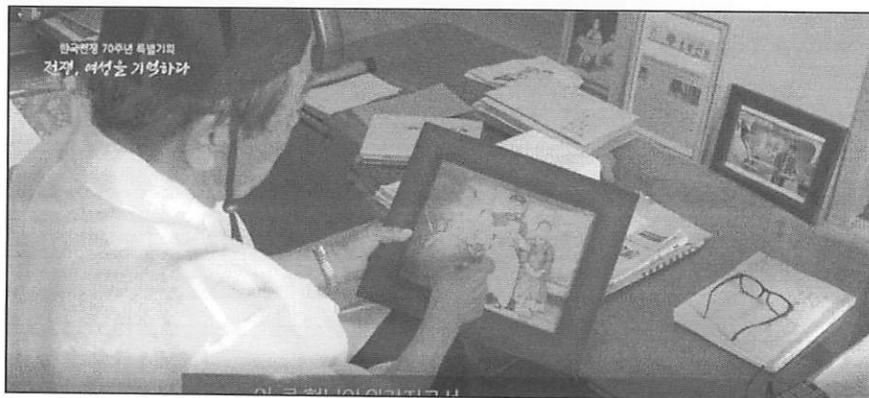
「自分が生きるために、妹を虐殺責任者（隊長）の欲情の犠牲者として渡すなど、やむを得ずそうなったこともあった。」

ナ 戦争中の性暴力に、無力な弱い女性たちはどうすることもできず、苦痛の日々を送った。

チュンチョンブクト クェサン ソンミョンリ  
【字幕：忠清北道 槐山郡松面里】

ナ 忠北の槐山、ここに米軍からの性暴力の犠牲になった幼い姉の話があります。

●パク・オンソプ（83 歳、忠清北道槐山郡松面里）



（幼い姉の写真を見せながら）「この写真は私が 3 歳の時だったよ。上の兄さんが帰って来て一緒に写真を撮った。」

「米軍がここから 3 km ほど離れた小川のところに駐屯していたが、深夜、姉さんを拉致していった。誰かが左翼活動をする家だと告発したらしい。父親と一緒に引っ張られていった。明け方に帰ってきたが、強姦されたようだった。その時、姉さんは 16、7 歳の時だった。姉さんが泣きわめいていたら、母が『あなただけのことではない、しょうがない。いまの世の中では……どうしようもないから耐えるしかない』となだめた。お婆さんが話したので近所の人も、みんな知ることになった。米軍はここに一か月も駐屯した。後で聞いた話だが、米軍が道行く若い女たちを捕まえて強姦したという。」

**ナ** 村を占領する主体が変わるたびに、住民は動員されました。韓国軍が来たら太極旗を、北朝鮮軍が入ってくると、その旗を振らねばなりませんでした。しかし銃をもった軍人たちは恐ろしい存在でした。とりわけ女性たちは無防備で脅威にさらされました。

「のちに姉は自殺した。娘二人を産んでから。その夫も間もなく亡くなった。」

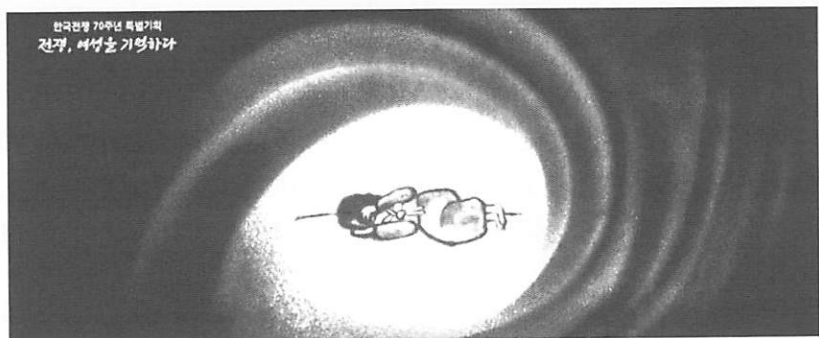
**ナ** 朝鮮戦争当時の韓国軍の性的風紀の乱れによる事件に関する多くの証言があります。当時参戦した退役将軍は、こう語っています。

#### ●パク・キョンソク将軍（88 歳、朝鮮戦争参戦 陸軍予備役准将）

「我が韓国軍の上級指揮官には女をめぐる問題があることを、目撃したり聞いたりしました。日本軍出身が大体そんなことをしました。臨時宿所を訪ねると、女が傍にいたことが多かったです。そしてしょっちゅう女が裸にされているという話も聞いたこともありました。部下が女を連れてくるという話をよく聞きました。ところが、ひとつははっきり言えるのは、日本軍出身の指揮官たちが江原道一帯で女性に関する罪を犯したことは否めない事実だということです。」

#### ●カン・チャンギョ（83 歳、襄陽郡造山里）

「女たちを裸にさせて、部屋に入らせて、軍人がやりたい時、その中から女を選んで隣の部屋にいった性行為をする。女たちは 10～15 日くらいそんなことをさせられ、軍人が前方に移動する時、女たちはその束縛から解放される。それまでは女たちが逃げられないように裸にして部屋に監禁していた。」

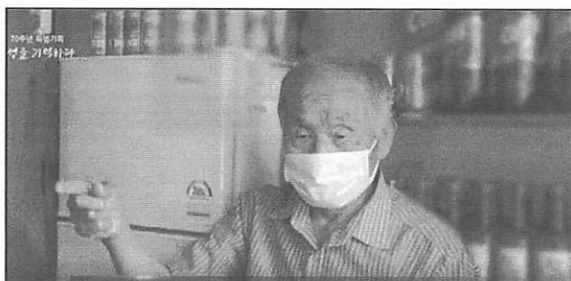




【字幕：忠清北道丹陽郡盧洞里<sup>タニヤン ノドンリ</sup>】

ナ 制作陣は朝鮮戦争当時、軍人によって虐殺と人権蹂躪が行われた、ある村を訪ねました。

●チ・ソンテク（83歳、忠北<sup>ノドンリ</sup> 盧洞里・磨造里<sup>マジョリ</sup>事件の遺族）



「米軍の戦車が入ってくると発煙弾を発射し、あちこちで火事が起こりました。家に放火し、牛など動物、人も皆殺しです。女たちは強姦されました。彼女たちのことをよく知っていますが、今は全員亡くなりました。」

聞き手 当時、その女性たちの年齢は？  
「みな、30歳以上でした。」

ナ 村の入口に、その時の犠牲者のための慰霊碑が立っています。

【字幕：忠清北道丹陽郡盧洞里・磨造里事件の慰霊碑<sup>タニヤン</sup>】

ナ 犠牲者の名前だけでなく、当時の凄惨な状況が仔細に刻まれています。

「ここです、その犠牲者の名前が刻まれています。この人たちは、全員殺されました。碑の裏側に事件の詳細が書かれています。」



「これは盧洞里・磨造里事件遺族会の会員が一緒に書いたものですよ。」  
「1951年1月10日のことです。これを読むと事件の全貌が分かります。家屋を回って一軒一軒放火し、人とその家族を殺し、臨月に入った妊婦を強姦し、真昼に米軍が女性を輪姦することもあった。犠牲者はみな故人ですが、これを読めばおよそのことが分かる。」

ナ このように公式に慰霊碑を立てて、あの日の真実を知らせる村もありますが、多くの場

合、性暴力犠牲者に関する真相は、目撃者や証言がないとなかなか外部に出てきません。

●ソ・スウォル（86 歳、傷痕軍警の妻）

「当時、19 歳以上になると、女性のほとんどが軍人たちに捕まえられて強姦されました。一人の夫にだけ仕えた女性は誰もおらず、軍人に連れて行かれるという経験を経て結婚した人が、その頃は多かったですね。米兵が来たら『オーケー、オーケー』と言えればいいというから、そう言ったら黒人兵士に連れて行かれた女たちもいました。」

●パク・スンナム（85 歳、傷痕軍警の妻）

「いや、あの時は米軍が、お嬢さん、お嬢さんと口説きながら、懐中電灯をもって女を探すから、みんな、押し入れに隠れました。」

ナ ただ、息を潜めて生きてきた年月。若くて幼いという理由で、女という理由だけで、光を浴びることすら怖かった時です。

聞き手 女たちを犯すなど悪いことをしましたか？

●イ・キボン（83 歳、傷痕軍警の妻）

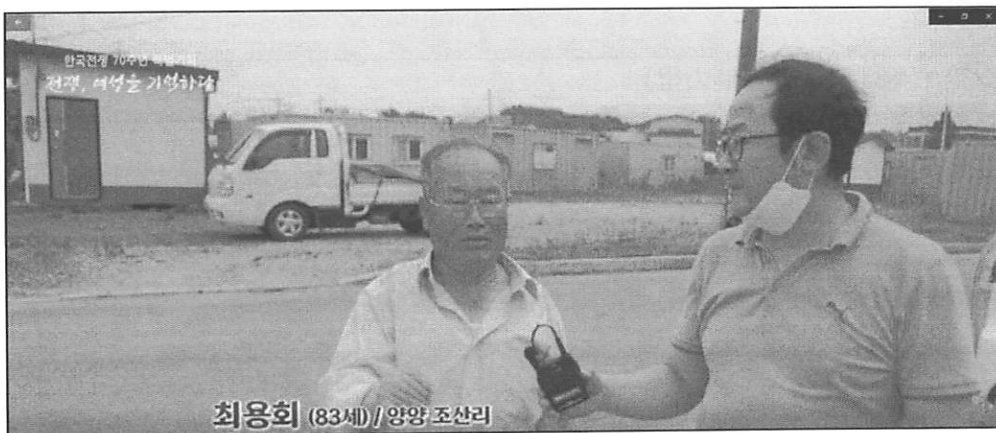
「女を洞窟の中に入れて、軍人を一列に並ばせて交代でやらせるので、結局その女が死んでしまいました。」

●オム・ジョンヒ（89 歳、傷痕軍警の妻）

「女は、みな隠れていました。私も松の実畑で、2 ヶ月の間、隠れていた。大人が食べ物をもってきたら、そこで食べていた。そういうふうにして生き延びました。大変でした。」

ナ 無視されてきた 70 年、これまで男性の視線によって扱われてきた戦争の記録。しかし当時の少女たちは憶えています。国家の黙認の下で性の搾取が正当化されるなか、女性が、性がいかに扱われてきたのかを。

●チェ・ヨンフェ（83 歳、襄陽郡造山里）



聞き手 慰安婦がいましたか？

「そうです。この自動車道路の向こう側に。あの、警察署のある四つ辻があるでしょう？あそこなんです。」

「はい。そこに 70 人ほどいましたよ。」

聞き手 70 人！韓国軍慰安婦がそこにいたということですか？東草<sup>ソクチョ</sup>ではなくて？

「そうなんです。いいえ、ここですね。」

「当時、慰安婦をどういうふう<sup>ムナム</sup>に運ぶのかというと、ドラム缶に入れてね。うん、ドラム缶に一人ずつ入れて車に載せてきて、降して…」

### ●パク・チェファン（90 歳、朝鮮戦争参戦功労者）

「私が目撃したのは、1 月 4 日の後退の後、また、北へと進んでいく時のことだった。夜、軍人一人ずつに慰安婦が割り当てられた。」

### ●キム・ヨンホ（90 歳、朝鮮戦争参戦功労者）

「『キム軍曹、一緒に文岩<sup>ムナム</sup>にある慰安所に行きましょう。そこに慰安所があります』と言われました。それで、一度訪ねたことがあります。」

### ●チョン・ジョハン（88 歳、朝鮮戦争参戦功労者）

「江陵市成徳<sup>ソンドク</sup>にもありました。成徳橋を越えたところにあった。軍慰安所があった場所は、南大川橋<sup>ナムデチョン</sup>（成徳橋）がある成徳というところ<sup>ナムデチョン</sup>です。そこに慰安所がありました。その村の住民なら誰でも知っています。私と同じくらいの年齢の人なら、みんな知っています。」

ナ 軍の士気を高めるという美名のもとに生み出された韓国軍慰安婦。語れない苦痛の中で生きてきた女性たち。

ヤンヤン チョサンリ  
【字幕：襄陽郡造山里】

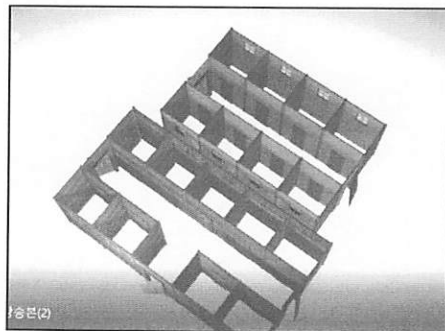
ナ 江原道襄陽郡造山里、ここでは一体、何が起こったのでしょうか。コンテナだけがポツンと置かれた場所に、韓国軍慰安所があったことを覚えている人は稀です。

### ●チェ・ヨンフェ（83 歳、襄陽造山里）

「以前は自転車修理、自動車修理、パン屋、床屋、いわば大きなマートのような建物がここにあったが、あちら側には慰安所があった。」

聞き手 規模はどれくらいですか？

「あそこにコンテナがあるでしょう？高さはそのくらいで、コンテナくらいの大きさの家が二列あ



ったと覚えている。」

**ナ** 当時の状況をかなり正確に記憶しているお爺さん。それほど彼にとって韓国軍慰安所も慰安婦のこともショックを与えるものでした。

【字幕：証言で再構成した当時の造山里慰安所】

「噂によると、一人の女性が一日 70 人の軍人の相手をするのを強要されたそうだ。」

**聞き手** ああ、70 人も！

「目撃した人によると、早くしろ、と軍靴も脱がないまま、ベルトだけをほどいてやるんだけど、後ろの人が早くしろとせかして、足で蹴ったりしたそうです。慰安婦は公然たる存在でした。何をやっているのか、窓から全部見えたんですね。」

●バク・ジェファン（90 歳、朝鮮戦争参戦功劳者）

「ナンバーが配られました。順番が書かれている小さな紙が。地位の高い順番でやった。それを覚えている。」

【字幕：<sup>コソソ</sup>高城郡<sup>ムナムリ</sup>文岩里—当時慰安所があったと推定される地域】

**ナ** 熾烈な戦闘が行われた江原道高城郡文岩里。休戦になるまで、軍人だけが駐屯した地域です。ここに韓国軍慰安所があったという証言を聞くことができました。

●キム・ヨンホ（90 歳、朝鮮戦争参戦功劳者）

「一部屋に女が一人いたが、その部屋には、常に水を入れたたらいがあった。女が一人終わるたびに、水を汲んで行くことを繰り返した。自分のと男のそれを洗ってから始める。出る時もまた洗ってやる。ずっと続けて男が入るから、10 時まで一人の慰安婦が数十人の男と関係をすることになる。」

【字幕：六・二五事変 後方戦史 人事篇】

**ナ** 1956 年国防部が編纂した公式文書『後方戦史』には、慰安隊の設置と概要などが明確に記録されています。

【字幕：特殊慰安隊】

**ナ** 「士気高揚はもちろん、戦争時に不可避の弊害を未然に防止し、後方との往来がないだけに異性への憧憬が募る生理作用による性格の変化等から鬱病その他の支障を来すことを予防するために本特殊慰安隊を設置することになった。」

●キム・キオク ハンソン  
●金貴玉（漢城大学 教授）



「特殊慰安隊、つまり軍慰安所です。隊というのは、軍隊の隊を意味します。女性を 20～30 名単位にグループ化し、軍隊概念の隊と名付けています。普通、特殊慰安隊というとなんかと思うこともありますが、日帝強占期を経験した方なら、それが何を意味するのか、すぐ分かりますね。」

【字幕：特殊慰安隊 実績統計表】

ナ 詳しく見ると、特殊慰安隊が相手にした韓国軍についての統計が実績という言葉で表現されています。地域、人員などがかなり詳細に記されています。

「激戦地ではいくつかの部隊が交替しますが、交替の過程で休んでいる部隊のところに女性たちを連れて行きます。いわゆる毛布部隊と言われるものです。毛布部隊は朝鮮戦争の時もありました。軍部隊は一時的に駐屯するので毛布部隊の形態で、家も作らず、いい加減なものでした。また、毛布部隊の証言によると、洞窟や民家など、適当なところが見つかり、毛布をカーテンの代用にして仕切りをつくるので、隣の声も丸聞こえという状態で、女性は人間扱いされませんでした。」

【字幕：江陵 1 小隊に 21 名で 計 71 名として】

ナ 当時の慰安所が一体どんなものだったのか？ そこで女性は、人格をもった存在ではなかったのか？ 証言者に尋ねてみました。

ナ 民家や軍人が無断占領した所に設けられたという韓国軍慰安所。

●チェ・ヨンフェ（83 歳、襄陽郡造山里）

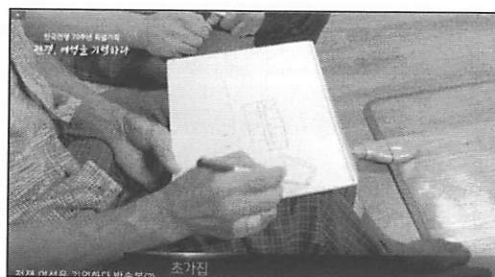
「自分の意思で来たのではなく、（ドラム缶に入れられて）乗せられてきたのだから」

聞き手 軍人たちが乗せてくるということですか？

「慰安婦だからね。」

●カン・チャンギョ（83 歳、襄陽郡造山里）

「廊下に入ると、間隔が狭い仕切り板が連なっている。このように。茅葺きの家なんだよ。二つの家がつながっていた。」



**聞き手** ここに女性が一人ずつ入って…  
「そう、みな一人ずつ入って座っていた。」

【字幕：チェ・ミョンシン将軍回顧録『死線を越えて』】

**ナ** 国軍の英雄と称されたチェ・ミョンシン将軍の回顧録にも、国軍の士気高揚のために用いたという慰安部隊のことが詳しく記されています。

### ●チョン・カプセン（ソウル大学社会発展研究所 研究員）

「日本軍慰安婦を日本軍の観点からとらえる場合、軍需品の観点から見ているということです。それと同じく、朝鮮戦争の時期に、女性たちを慰安婦として組織することもそのような観点から出発しています。つまり、女性たちを軍需品、あるいは使い捨て品以上には見ていない。それで、一般の人々は韓国軍慰安婦や米軍慰安婦が存在したことを忘却して来たのではないかと。要するに兵士が銃をひとつ持っていたのと同じく、軍隊内に慰安の道具が必要となった際、女性が銃のような存在として認識されてきた。」

【字幕：性病統計表】

「もうひとつは、軍のために献身する愛国奉仕というような理屈を、民間人だけでなく、志願入隊した人はもちろん、国民みんなが持っているひとつの真理であるというように形成されていた社会であり、時代だった。」

【字幕：6 師団看護兵 出典:12AR 3367 フランスアーカイブ（NAF）】

**ナ** 制作陣が入手した一枚の写真。6 師団看護兵と呼ばれた女性たちの写真です。



**聞き手** ある軍事専門家はもしかしたらそのような…  
「ええ、慰安婦ではないかと十分に推測できると思います。私はこれをフランスで蒐集しました。フランスでも、説明文とともにマスコミ（AP）に配布された写真です。看護将校となっていますが、（それなら）軍服は着ません。基本的に白衣を着るか、簡易白衣を着



ますね。私が見たところ、看護兵ではないと思います。軍属の可能性もあり、基地村の女性、つまり韓国軍慰安婦の可能性もあります。スタイルから見て、ヘアーピンを付けているなど身なりに気をつけているし、軍服もなぜか綺麗でしょう？ いま、茅葺き家屋の前に集まっていますが、軍属あるいは正規将校など正規軍なら、基本的に軍隊の認識番号が記されています。しかし、彼女たちには認識番号がありません。要するに軍属ではないかもしれません。軍属でもなく、看護兵でもなく、認識番号もなく、それにヘアスタイルを見ても軍属には見えない。私から見て、軍人とみなすことはできません。」

### ●パク・キョンソク将軍（88歳、参戦陸軍予備役准将）

「私が小隊長の時、大隊長がこのような女たちを連れて歩いていた。」

**聞き手** このような女性をですか？

「うん、一人だけだったんだが。赤十字の腕章をしていた。それで私があの女は何をする人かと中隊長に聞いたら、それ（慰安婦）をやる女だと言われた。当時はそういう女に軍服を着せて連れ歩いた。」

「それから、師団長や連隊長が外部から連れて来させた女には、軍服を着せてから連れてきます。私が師団司令部に勤務していた時、女たちが師団長の宿所に入るところを見ましたが、みんなこんな軍服を着ていました。」

【字幕：朝鮮戦争当時の江原道 嶺東地域の韓国軍慰安所の位置  
ヨンドン  
コソソ 高城郡 ムナムリ 文岩里、ソクチョ 東草市 クムホドン 琴湖洞、ヤンヤン 襄陽郡 チョンジンリ 前津里、カンヌン 江陵市 ソンドクドン 成徳洞 ノアムリ 魯岩里】

**ナ** 多くの証言を基にして制作陣が見出した江原道内の韓国軍慰安所は数多くありました。



◇朝鮮戦争期の江原道嶺東地域での韓国軍慰安所の位置(上から)

- ・高城郡文岩里
- ・東草市琴湖洞
- ・襄陽郡前津里
- ・襄陽郡造山里
- ・江陵市成徳洞魯岩里

### ●金貴玉（漢城大学 教授）

「どこから来たのかについては、元軍慰安婦の女性（生存する被害者）は証言を拒否したので、私が言うのは難しいです。その話はお墓までもっていくとおっしゃいましたから。その一方、軍人によって記憶されている人々がいます。いわゆる左翼運動の嫌疑をかけられた女性らの多くは軍人によって連行されました。その際、一部の女性が慰安婦にされたのだと、男性の軍人たちは推論します。それから、人民軍の若い女性たちや子どもが捕虜

として捕まったら、大体的場合、慰安婦として連行される可能性が高いと推測しています。捕虜として捕まった元人民軍が数人の女性についてそのように証言しています。また、私が聞いた証言として、北から南に来て軍人になった方の話ですが、所属部隊が北に行って女性数人を直接拉致して来て、慰安婦にしたと言っています。慰安婦の中には拉致された女性たちもいたことが分かります。」

【字幕：金貴玉教授が発見した韓国軍慰安所の位置】

聞き手：金貴玉教授 MBC チームが高城・襄陽を調査し、私は束草まで調査をしましたが、では、坡州、抱川の方には（韓国軍慰安所は）なかったんですか。

### ●パク・キョンソク将軍（88 歳、参戦陸軍予備役准将）

「そちらは主に米軍が担当しましたから。韓国の人々は失地回復というよりも北進統一を主張したから、江原道では命がけで戦ったんですね。しかし、そちら方面（朝鮮半島の中部から西側）は米軍が防御したんですね。」

（金貴玉教授）「中部戦線の方、また鉄原には韓国軍の部隊がいましたか？」

「はい、米軍も韓国軍もいましたよ。米軍がいる所はボコツと凹んでいるでしょう？」

（金貴玉教授）「鉄原にも韓国軍慰安婦がいた可能性があるのでは？」

「私が知る限りでは、そこから西の方には慰安婦はいなかったようです。」

ナ もしかして、すべての激戦地に韓国軍慰安所があったのではないのでしょうか。徹底した調査が求められます。戦争は終わったが、本当に終わったとは言えません。男性の視点から記録された歴史からは隠されている韓国軍慰安婦。無視したくなる不都合な真実だったのではないのでしょうか。

### ●金貴玉（漢城大学 教授）

「国家が自ら真相究明と再発防止の約束、それから生存する被害者に一私は一部の女性は生存していると思います。まだ生きておられる可能性が高いです。彼女たちに被害補償を完全な形ですべきだと思います。まず私たちがそのような努力をすることで、一層堂々と日本に対して真相究明と謝罪を求めることができると、私は考えます。」

ナ 戦場の女性たち。明らかにされていませんが、その日々を生き抜いてきた女性たちが確かに存在しています。夫を失くした妻、父親を恨んでいた娘、補給品になって軍人に提供された女性の性。確かに彼女たちはそこにいました。手遅れにならないうちに彼女たちの終わらない話に耳を傾けなければなりません。

（了）

## モンゴル国の番組「モンゴルの 100 年の歴史を創った 100 人の女性たち」の中の E.チメッドツェレン

今岡良子

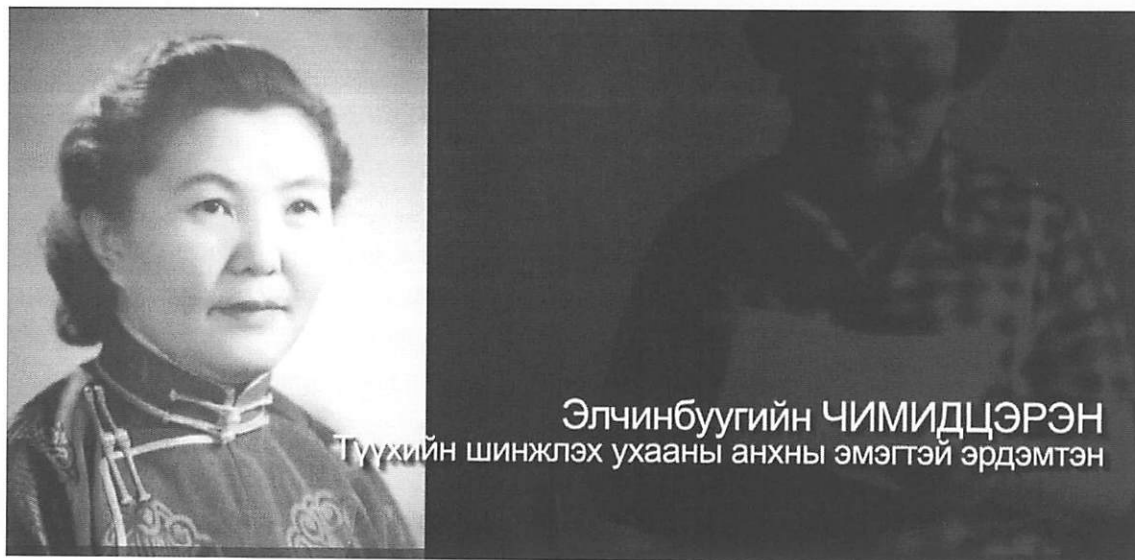
### はじめに

「アジア現代女性史」の 14 号の研究ノートの冒頭で<sup>1</sup>、筆者は、2020 年 9 月末、ウランバートルの J.ボルから、モンゴル国営放送が、“Зууны 100 эмэгтэйчүүд”という番組を作っていて、自分の母で、モンゴルの女性史研究者の E.チメッドツェレンも選ばれたこと、筆者に動画で参加して欲しいこと、放送された番組は評判よく、動画ファイルが手に入ったら送るというメッセージがあることを書いた。

筆者は、その動画を待ち続けた。J.ボルは、何度も番組のプロデューサーに連絡してくれた。動画の URL 情報を得たのは、2021 年 12 月末であった。番組のタイトルは、「E.チメッドツェレン 歴史学の最初の女性学者」である。

この研究ノートでは、その番組の概要、そこで語られた教育者としての E.チメッドツェレン、研究の特徴についてまとめ、筆者自身の疑問が解決したこと、新しい発見などを書いておきたい。

### 写真 1 E.チメッドツェレン 歴史学の最初の女性学者



出所「モンゴルの 100 年の歴史を創った 100 人の女性たち」番組より

<sup>1</sup>今岡良子（2020）「2つの三世代の『秘史』 E.チメッドツェレンの『三世代の歴史』と息子の J.ボルの『私の母 思い出』」、「アジア現代女性史 第 14 号」、110 頁

### (1) 「モンゴルの 100 年の歴史を創った 100 人の女性たち」の番組概要

“Зууны 100 эмэгтэйчүүд”という番組名は、動画を見た後、「モンゴルの 100 年の歴史を創った 100 人の女性たち」という訳をつけることにした。また、以下「100 人の女性たち」と略して書くことにする。すでに十数本が Youtube にアップロードされているが、E.チメッドツェレンの動画は、1 月末現在、まだ上げられていない。

この番組の制作は、J.ボルから最初、国営放送と聞いたが、動画に書かれていたのは、NGO「世界のモンゴル、女性とともに」代表（写真 2）で、「100 年の 100 人の女性たち」プロジェクト企画者 D.エンフジャルガルの制作で、「社会民主主義 モンゴル女性連盟」（写真 3）とエルデネット社（写真 4）の共同制作と書かれていた。番組の趣旨は、1921 年から 2021 年の 100 年の間に活躍した女性を紹介することである。すでに、モンゴルの近現代史に貢献してきた人物紹介の番組はいくつか作られてきたが、女性に限定した番組としては初めての取り組みである。

写真 2



写真 3



写真 4



写真 2 NGO「世界のモンゴル、女性とともに」のロゴ

写真 3 「社会民主主義 モンゴル女性連盟」

写真 4 エルデネット社のロゴ

出所「モンゴルの 100 年の歴史を創った 100 人の女性たち」番組より

番組の構成は、企画者の D.エンフジャルガルが進行役を務めながら、今も歴史の研究を続けている著名な学者であり、E.チメッドツェレンの弟子である 4 人が、恩師の思い出を語り、その動画を見た現役の歴史の教諭 2 人が教訓として学んだことを語ることで、ひとまとめとなり、また、企画者と弟子が恩師について語り、それを 2 人の教諭が語る、というように進んでいく。番組の長さは 25 分であった。

4 人の弟子というのは、E.チメッドツェレンと同じモンゴル国立大学歴史学部に通じる女性の研究者 2 人、D.エンフツェツェグ（モンゴル国立大学の歴史学部准教授）と J.オランゴア（モンゴル国科学功労賞受賞者、歴史学博士、モンゴル国立大学歴史学部教授）、そして J.ボルドバートル（モンゴル国科学功労者賞受賞者、アカデミー会員）、J.ゲレルバドラフ（モンゴル国立教育大学歴史学部教授）である。企画者の D.エンフジャルガルと D.エンフツェツェグ准教授の対話が軸となっており、E.チメッドツェレンのライフヒストリーを紹介し、他の 3 人が語る思い出が挿入されていく。D.エンフツェツェグ准教授は、2019

年に筆者がインタビューした人である。その時に得られなかった答えが、ここでわかりやすく語られていたので、感無量だった。

コロナ禍が明けて、モンゴル国に行きやすくなれば、この番組の企画者や出演者に直接会って、さらに詳しく話を聞きたいと思う。

## (2) 弟子が語る教育者としての E.チメッドツェレン像

### (2.1) D.エンフツェツェグへのインタビューのまとめ

写真5 企画者 D.エンフツェツェグ (NGO「世界のモンゴル、女性とともに」代表) と D.エンフツェツェグ准教授 (モンゴル国立大学の人文学部歴史学科)



— チメッドツェレン先生は、1924年にドルノド県に生まれ、1930年代は地元の小中学校に入学し、1940年代に師範学校で学び、故郷に帰り、モンゴル語の教員として働くことになったそうです。戦争の大変な頃、生徒たちと一緒に壕を掘ったり、(県庁所在地に隣接する) バヤントゥムン郡が爆撃された時、そこにいたと話しておられました。1953年にモンゴル国立大学の歴史学科を卒業し、歴史の専門家となりましたが、1年間、モンゴル人民革命党中央委員会で働き、そのあと、モンゴル国立大学の歴史学科の教員として正式に働くことになりました。

筆者は、E.チメッドツェレンが、ハルハ川戦争を経験していたことは、初めて知った。

写真 6 1957 年 モンゴル国立大学の歴史学科の教員同僚と



前列、左から 5 番目の白いコートを着ているのが、E.チメッドツェレン

- チメッドツェレン先生は、モンゴル国立大学の歴史学科で、学生として、教員として、学科主任として、特任教員として 40 年以上の年月を過ごされました。
- 私は 1970 年の終わりから 1980 年の初めにかけて、モンゴル国立大学で学んでいましたが、その時、チメッドツェレン先生は歴史学科の主任で、歴史学博士でした。

## (2.2) J.オランゴアへのインタビューのまとめ

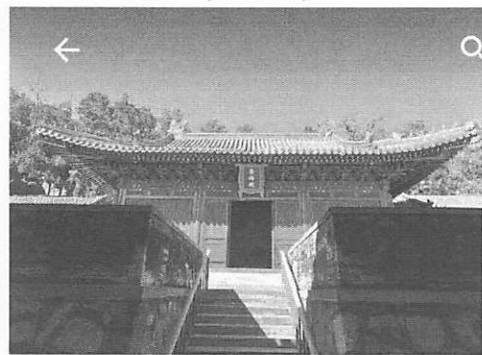
写真 7 J.オランゴア (モンゴル国立大学歴史学部教授)



- チメッドツェレン先生は、女性としても素晴らしい人でした。モンゴルから中国の北京大学の博士課程に留学した数少ない学生の 1 人で、私の父ジャムスレンと一緒に博士号を取得して、帰国しました。



写真 8 留学中の L. ジャムスレンと E. チメッドツェレン<sup>2</sup>の写真 (1962 年)



Fahai Temple

4.7 ★★★★★ (22)

中華人民共和国 北京の仏教寺院

— チメッドツェレン先生の授業を受ける、ゼミに参加できるというのは、学生として非常に光栄なことでした。先生の授業は素晴らしかった。当時、中国語の文献を読める人は少なかったので、履修生は貴重な講義を聞くことができました。

— チメッドツェレン先生は、モンゴルの現代史上有名な女性のライフヒストリーを聞く調査をしていて、私にもご自宅に行き、聞き取りをする機会を与えてくれました。医師のデンスマー<sup>3</sup>、オユン<sup>4</sup>という有名な知識人女性に会って、お話を聞くことができました。

— 卒業後、先生について、国際モンゴル学会議に参加しました。当時、若い教員が、そんな大きな学会議に出ることは極めて稀でしたが、先生は、「こんなたくさんの資料を集めたのだから、二人で共同して、発表を準備しましょう」と言って参加の機会をくださいました。‘Монголын нэгэн эмэгтэйн хоёр нийгмийн амьдрал’ (モンゴルのある女性が経験した二つの社会) というテーマで 1984 年<sup>5</sup>に初めて国際モンゴル学会議で発表しました。それ以来、学者というのはどうあるべきか、教育者とはどうあるべきか、私はいつも先生という目標に、追いつこうと努力してきました。先生の功績は、そういう弟子たちをたくさん研究者として育てたことです。1957 年から 97、98 年まで 40 年間教壇に立っておられたので、モンゴル国立大学の社会歴史学科で学ぶ学生は直接指導を受け、その後の世代は著作を通じて学ぶことになりました。

<sup>2</sup> 中国語専攻の複数の同僚によって、北京市の法海寺ではないか、と推察された。

<sup>3</sup> D. デンスマーは、前夫 ヤダムスレン、夫 G. サンボーが粛清の対象となり、その家族として投獄された。

<sup>4</sup> E. オユンは、1918 年生まれ。チョイバルサン賞受賞作家、演出家、翻訳家、父エルデネバトハーンは、ドイツのスパイであるとの容疑をかけられた後、行方不明。

<sup>5</sup> 1984 年には国際モンゴル学会議は開かれていないので、ドイツで行われた国際アルタイ学会か、1982 年に開かれた国際モンゴル学会議の可能性もある。

ここで J.オランゴアが聞き取りを任されたという D.デンスマーは夫が、E.オユンは父が  
粛清されたという共通点がある。他にもこの聞き取り調査の対象になった女性がいたはず  
である。E.チメッドツェレンが粛清について書いた文献は見当たらないが、聞き取り調査  
は行っていたことがわかる。そのことを J.オランゴアに直接会って、確認したい。

写真 9 「モンゴルの 7 人の歴史研究者」

モンゴル人民共和国から中華人民共和国に留学させた 7 人は、中国語文献を扱える歴史  
の専門家として養成された。前列左から G.スフバートル、E.チメッドツェレン、N.イシジ  
ャムツ、後列、Ch.ジュグデル、L.ヤダムスレン、Ts.サンジャースレン、L.ジャムスラン (J.  
オランゴアの父)



出所 Web ニュース Sonin Монгол түүхийн долоо

<https://sonin.mn/news/culture/46193>

(2.3) J.ボルドバートルへのインタビューのまとめ

写真 10 J.ボルドバートル (モンゴルアカデミー会員)



— チメッドツェレン先生は、たくさんのモンゴル人の歴史学者を育てた恩師です。モンゴルの歴史家の中で、また女性の中で、先生のことを思い出さない人はいないと思います。そして、モンゴルの女性の運動、その歴史を研究した唯一の研究者です。

— 私は、大学の1年の後期から3年の終わりまで、モンゴルの歴史の授業で、最初から人民革命のところまで教えてもらいました。歴史学者のジャンバルスレンと私は、先生に直接指導をしていただいたことで、学者になることができました。チメッドツェレン先生がイギリスのリーズ大学に教えに行っている半年の間、モンゴル語とロシア語専攻の学生の歴史の授業を先生に代わって教えていました。女性が憧れ、女性の代表となる大学教員と言えば、チメッドツェレン先生以外には、他に誰がいるでしょうか。本当に美しく立派な先生でした。

— 学生と一緒に新しい知見を探究することを大事にした先生でした。

この発言の後、J.オランゴアが知識人女性のインタビューの機会を与えられた映像に切り替わった。

J.ボルドバートルは、ソ連のグラスノスチ（情報公開）政策の影響を受けて、モンゴル人民共和国で古文書館などの極秘資料にアクセスできるようになり、それを元に粛清の時代を明らかにした歴史学者である。誠実で、寡黙な人格なので、国民的に信頼されている。2022年1月にU.フレススフ大統領から「人民の教師」という称号を与えられた。<sup>6</sup> その人が、母を恋しく思うような表情で語った一つ一つの言葉には重みを感じられ

<sup>6</sup> <https://gogo.mn/r/dnqw6> Академич Ж.Болдбаатар Ардын багш боллоо

た。J.オランゴアからインタビュー調査について聞いた後、J.ボルドバートルと意見交換したいと思う。

#### (2.4) J.ゲレルバドラフへのインタビューのまとめ

写真 11 J.ゲレルバドラフ（モンゴル国立教育大学歴史学部教授）



— 私は、1987 年にモンゴル国立大学社会学部歴史学科の学生で、チメッドツェレン先生はモンゴルの中世の歴史を教えてくださいました。先生は教養が高く、多くの外国語に通じておられました。私たちに話す時に、ロシア語ではこう言います、英語ではこう言います、中国語ではこう漢字で書きますと 3 ヶ国語を板書して説明してくれる先生でした。一方、ゼミの指導は厳しかったです。お年を召しておられましたが、非常に熱心に教えてくださいました。特に、歴史を専攻するには、外国語をしっかり身につけなさい。特に、モンゴルに関する中国語の文献はたくさんあります。しかし、読む時は、帝国時代の資料などは、文字通りに受け止めてはいけません。その背景を自分で調べて、よく確認しないとはいけません。モンゴル人のしたことを誇張したり、モンゴル人を見下したり、いろんな思いをこめて外国人がその言葉を知る人に向けて書いているからです。

D.エンフツェツェグに会った時、E.チメッドツェレンのゼミの指導は厳しかったと語っていた。ここで興味深かったことは、E.チメッドツェレンが、中国で留学中に、モンゴルという民族的アイデンティティーを持ち、漢語資料に対するリテラシーの力を高めていた、ということである。モンゴル人民共和国に戻り、古文書館で読むモンゴル語の文献に向かう時にも、「文字通りに受け止めてはいけません」と考えていたに違いない。

### (3) D.エンフツェツェグが語る E.チメッドツェレンの研究の特徴

E.チメッドツェレンの研究の功績について企画者の D.エンフツェツェグは、3 冊の本を取り上げ、D.エンフツェツェグが説明する。その説明の一部不正確な情報は訂正した上で、ここに整理しておきたい。

1 冊目は、1969 年発行の“Монголын эмэгтэйчүүд шинэ амьдралын замд(1921-1931)”、『モンゴル人女性は新しい生活に』というタイトルで、これは、全部で 48 ページ。

D.エンフツェツェグは、1921 年の人民革命やその後 1931 年までの社会建設に積極的に関わった女性について、新聞や雑誌、手記や資料にもとづいて書かれたものと紹介した。画面では大きく取り上げられたが、ポケットサイズの小さな冊子である。

2 冊目は、1973 年発行の“БНМАУ-д эмэгтэйчүүдийг нийгмийн дарлалаас чөлөөлсөн түүхэн туршлага”『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』というタイトルで、これは、全部で 239 ページ。代表作である。筆者が「アジア現代女性史」の創刊号から紹介してきた文献である。

D.エンフツェツェグがこの文献について語ったことを整理すると次のようになる。

— チメッドツェレン先生は、20 世紀を迎える前に遊牧民女性がどんな状況に置かれていたか、女性が家族の中で一定の役割を持つ以外に、政治や社会の中で役割を担って活動することはできず、様々な障害があったことを資料にもとづいて書いています。

— 政治のリーダーや家族の長が男性であっても、遊牧民の女性たちは、共同体の中で役割を果たし、その中で経済活動も行ってきた。家畜から畜産物をえて、物を作る原料に加工する労働は女性たちが担い、牧畜の家族経営を支えてきたことは明らかです。この伝統をもとに、1921 年の人民革命後、遊牧民女性は、新しく生まれた工業部門、運輸や通信、銀行や金融、農耕など、新しい産業部門の専門化された全ての分野に男性とともに参加し、能力を発揮した。それは、モンゴルの女性の歴史の中で、新しい発展段階に達する変化であったと書いています。家族や社会の中で女性の活動を制限する要因を取り除き、権利としての自由を手にするにとどまらず、女性自身が家族、子ども、母性を保護し、社会福祉を実現するために組織を作り、女性がリーダーとして活躍したことも、資料にもとづいて書いています。また、20 世紀は、科学やそれにもとづいた近代的な文化を享受する時代となり、モンゴルの女性も教育を受け、科学や近代的な文化を享受し、教員、医師、役者、学者という知識人も生まれていきました。

3 冊目は、1983 年発行の“Монголын эмэгтэйчүүдийн мэдлэгийн уламжлал дэвшлийн зарим асуудал”『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』というタイトルで、これは、全部で 94 ページ。これは筆者が「アジア現代女性史」13 号の研究ノート「E.チメッドツェレンの最後の著書（モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題）を再考する」で紹介した文献である。

D.エンフツェツェグがこの本について語ったことを次に整理しておきたい。

— チメッドツェレン先生のもう一つの研究の特徴として、モンゴル人女性が、伝統的な遊牧の知識と経験を持っていることを重視したことにあります。モンゴル人は、遊牧という文化、知識や経験を持っている点で、他の民族と違う特性を持っていて、遊牧は世界の文化遺産としても評価されている。その遊牧文化の多くを遊牧民女性が生み出していることをチメッドツェレン先生は大事にしたいと考えたのです。

— 1970 年代の終わりから 1980 年にかけて、チメッドツェレン先生は、志を一つにする女性たち、特に、若い教員と一緒に、また、学部の上回生と一緒に、今で言うと、教授を筆頭にしたプロジェクトの調査チームのような規模の大きなチームを組織し、遊牧の伝統的な知恵や経験に関する調査を行いました。古文書館の資料やインタビュー、手記などからも情報を収集し、また地方に出かけ、遊牧民の家で女性がどのように暮らしているのかを調査し、一冊の本にまとめて出版しました。この本では、アーロールやエーズギーを乾燥させて作る方法、乳酒を発酵させる方法、乳製品を作る方法が書かれていて、モンゴル人の知識と経験には科学的な技術があると述べています。

— チメッドツェレン先生は、さらに続けて、遊牧民女性たちの第二の知識と経験として、縫う、刺繍する、フェルトを作る、デールを作るなど、衣服を作る技術について調査をしようとしていましたが、その部分は完成させることができませんでした。

— しかし、社会歴史学科の事務局の秘書をしていたアジーマーという方が、その後もこの研究を続けようと思ったのでしょうか、モンゴル人女性の靴の作り方という小さな本を一冊出版しました。その後、デールの作り方という本も出版しました。今は、帽子の作り方の本を準備しているそうです。チメッドツェレン先生の調査チームに参加していたので、先生の意志を引き継いでおられるのだと、私は思います。

筆者はこの発言を聞き、ようやく納得することができた。この本については、前号の研究ノートに「まず、第 1 章と第 2 章が 50 ページずつ書かれているにもかかわらず、第 3 章は 8 ページしかなく、非常にバランスの悪い章立てとなっている。第 2 章の芸術文化のところに、第 1 章の 4.にまとめておくべき、フェルトの敷物や刺繍や織物などが 14 ページも使って書かれている。次に、章の表題と中身が必ずしも一致せず、E.チメッドツェレンが遊牧民女性に伝えたいことを中心に書かれている。」<sup>7</sup>と書いたが、不完全のまま、出版されたことがようやくわかったのだ。

筆者は、12 月末にこの番組の動画を見た後すぐに、E.エンフツェツェグにメールを送り、アジーマーについて問い合わせたが、1 月中旬にようやく返事が来た。返信には、アジーマーは 70 歳を越えていること、その 2 冊の本が手元にあるので、郵送しようか、と書かれていた。ウランバートルにいる卒業生に頼んで、コピーして、PDF にして送ってもらうこ

<sup>7</sup> 13 号 「E.チメッドツェレンの最後の著書（モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題）を再考する」 P.96



とにした。

そのアジーマーの本を読んだ上で、誠に僭越ながら、三つ目の本を E.チメッドツェレンが作りたかったように、筆者がやってみようかと思う。100 年後のモンゴル人が、あるいはモンゴル人でなくても、遊牧の知識や経験に興味を持つ人が、それを読んで、実践できるような本を作りたい。いや、遊牧の研究をしてきた筆者が作らなければならないと思う。E.チメッドツェレンのこの著作は、伝統的な知恵と経験がどのようなものを説明しているが、科学の言葉で説明する内容になっていない。例えば、乳製品の加工の工程は詳しく書かれているが、材料となるミルクがどのような成分になっているかが書かれていない。ミルクの温度、気温や湿度がどのような状態で、その加工技術が成り立つのか、ということも書かれていない。逆に、そこを工夫すれば、100 年後でも、どこでも、誰でも遊牧文化の担い手になれる本になるだろう。

アジーマーが研究を引き継いでいるという話の後、D.エンフツェツェグは次のように語った。

— オランゴアと私は、“Монгол хатад”『モンゴルの王妃』という中世の 20 人の妃を研究した本を 2000 年に出版し、自分は 2008 年に “Монголын нууц товчоо ба эмэгтэйчүүд”『モンゴル秘史と女性』という本を英語とモンゴル語で出版し、また、ボグド・ハーンの妃ドンドグドラムについて書いた。こうして、チメッドツェレン先生と異なっているけれども、女性の歴史の研究をしてきたという点で恩師の仕事を受け継いでいます。

ここで、「先生と異なっている」という発言を解説しておきたい。D.エンフツェツェグは、この番組の中で、“БНМАУ-д эмэгтэйчүүдийг нийгмийн дарлалаас чөлөөлсөн түүхэн туршлага”『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』というタイトルを述べる時、‘чөлөөлсөн’（解放した）という言葉をやつくり強調して発音し、その時代は「女性を解放した」という表現を使ったことを印象付ける話し方をした。それは、筆者が 13 号の研究ノート<sup>8</sup>にすでに書いたように、「『解放』も、当時のマルクス・レーニンの教義に当てはめて使っていたに過ぎず、王妃から一般の遊牧民女性に至るまで、奴隸的な扱いを受けていたとは考えにくい」という考え方に立っていた。二人の女性研究者は、階級的視点を排除した研究をしてきた点で「先生と異なる」ということである。しかし、E.エンフツェツェグは、このインタビューの中で「抑圧」という言葉は何度も使っている。「抑圧」はあったけれども、そこから自由になることは「解放」と呼ばないのだろうか。

#### (4) E.チメッドツェレンの平和のための女性の国際的な活動

企画者エンフジャルガルは、E.チメッドツェレンが女性の代表として国際的な平和会議

<sup>8</sup> 前掲、P.94

に出席し、国際的な連帯に貢献したことに触れ、D.エンフツェツェグが説明し、そこに外国で記念撮影された写真が挿入される。改めて会議名などを調べ、訂正したものを整理すると次のようになる。

- ・1955年、インドのデリーでアジア諸国民会議が開かれ参加した E.チメッドツェレンは、世界の女性も、モンゴルの女性も平和への思いは同じであることを訴えた。
- ・1965年、フィンランドのヘルシンキで世界平和評議会（WPC）が開かれ、E.チメッドツェレンは参加した。この会議は、ベトナムでの全ての米軍の撤退をアピールしたが、その後、E.チメッドツェレンは、ベトナム女性組織との交流を深めていく。
- ・1969年、ベトナムで開かれた国際会議<sup>9</sup>に参加した。その会議でベトナムの女性組織代表と意見交換していると思われる写真が、番組の動画に挿入されている。残念ながら説明はない。

— 国際会議では、短期間の間にアジアの小さな国モンゴルで、女性を社会的抑圧から解放することに成功したことに注目され、アジアのモデルと言われた。モンゴル人女性が、社会で活躍する時、家庭の中の様々な障害をどのように解決していったか。男性と同じようにどのように社会で活躍していったか。女性の問題を解決する時に、女性自身が組織を作り、重要な役割を果たしたという歴史も発表したとチメッドツェレン先生から聞きました。

— モンゴル女性連盟は積極的に政策提言をまとめ、モンゴル人民革命党政府に一定の影響を与えてきた。チメッドツェレン先生は、その女性連盟の事務局長として具体的な政策提言を検討し議論し、まとめ提出するという責任ある仕事を担当したと聞きました。



写真 12  
 E.チメッドツ  
 エレンの寄稿  
 「英雄的な友  
 達の国で」  
 「統一」紙  
 1969年7月24  
 日

<sup>9</sup> この国際会議の名前がわからない。1969年7月24日のベトナムの新聞「統一」にE.チメッドツェレンの写真入り記事が掲載されている。近藤美佳氏（大阪大学言語文化研究科助教）に確認していただいたところ、この記事には国際会議の名前は書かれていなかった。アメリカの戦争の非道とベトナム人民への連帯表明、そして、自分も一人息子を育てる母で、平和を願う一人の人間であることが書かれている。また、この年、アジア仏教徒平和会議がウランバートルで開催され、ベトナムからも参加者があつたと考えられる。

写真 13 1955 年インドのデリーで開かれたアジア諸国民会議に参加

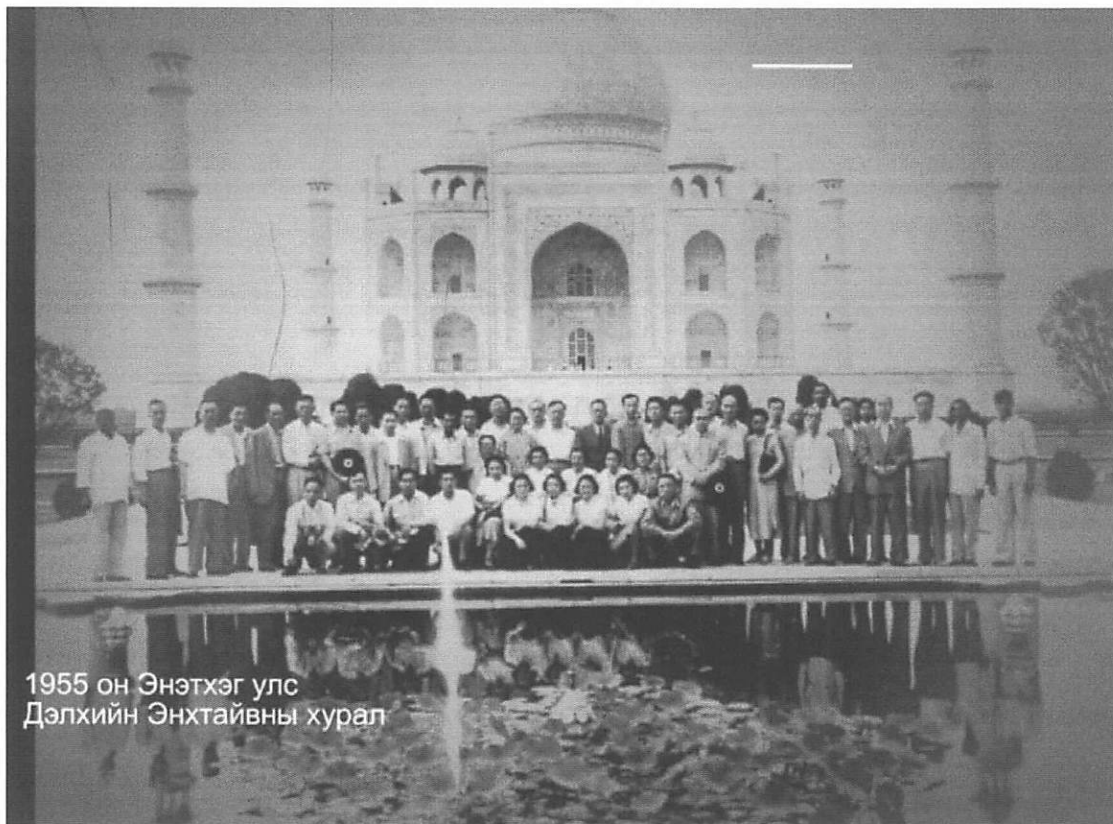


写真 14 1955 年インドのデリーで開かれたアジア諸国民会議に参加  
前列左から 3 番目のバッグを持った女性が E.チメッドツェレン。



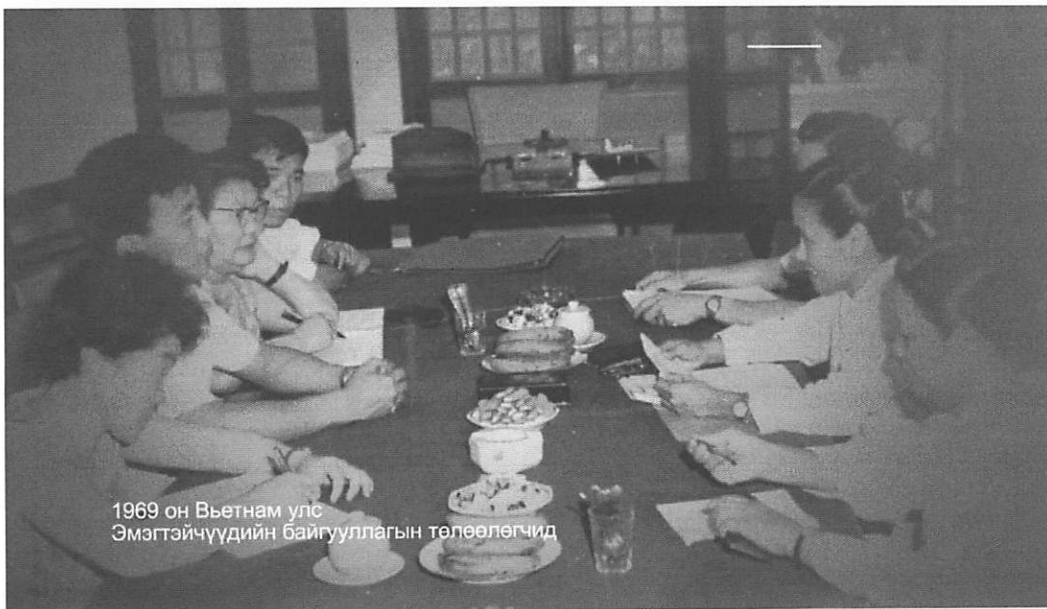
写真 15 1955 年インドのデリーで開かれたアジア諸国民会議に参加

最上列の左から 4 番目が E.チメッドツェレン。この写真の中では、男性参加者が圧倒的に多いことがわかる。



この 4 月のデリーの会議で、平和 5 原則が議論され、それを骨格とし、翌月 5 月のバンドンアジア・アフリカ会議で「バンドン 10 原則」が採択された。

写真 16 1969 年ベトナムで女性組織の代表者と会見



この番組を見たモンゴルの若い人は、E.チメッドツェレンが、40 年に渡ってモンゴル国立大学で教鞭を取り、多くの歴史学者を生み出した学者であり、モンゴル人で北京大学に留学し、博士号を習得した最初の 2 人の内の 1 人であることを知り、尊敬する先人が 1 人増えたことだろう。

筆者にとって、E.チメッドツェレンを知らないと言われたり、文献資料を探そうとしてもアクセスできなかったり、モンゴル帝国時代の女性を研究したらどうかとはぐらかされたり、あの突き放されたような状況はいったい何だったのか、という疑問が残る。E.チメッドツェレンは、教員として、女性組織の活動家として評価されていたが、粛清者の家族の聞き取りをしたことで研究者としては日陰に置かれたのだろうか。筆者がE.チメッドツェレンの情報を始めた頃は、マルクス主義史観に対する否定が強まり、古文書館の文献資料が公開され、領主や僧侶などの封建勢力を肯定的に捉える研究が本流になっていたのも、何を今さら、と付き合ってもらえなかったのかもしれない。そういう時期が過ぎ、また再評価されているのが今だとすれば、この流れを大事にしたいと思う。

#### (5) 磯野富士子と一緒に撮った写真

番組の中では全く説明をされなかった写真がある。E.チメッドツェレンが国際的な繋がりがあることを示すために、外国人の研究者らしき人と学会の会場らしき場所で写っている写真が数枚挿入されていた。その中で、簡易な着物を着ている女性がいることに気づき、顎のあたりに見覚えがあった。もしかすると、磯野富士子さんかもしれないと思い、モンゴル研究の先輩で、若い頃から国際モンゴル学会議に参加していた芝山豊さんに写真を送って問い合わせた。

写真 17 右が E.チメッドツェレン、左が磯野富士子





写真 18 左端が E.チメッドツェレン、右端が磯野富士子



写真 19 左端が E.チメッドツェレン、右端が磯野富士子



この写真は、芝山氏によると「1970 年代ではないか」ということである。



筆者が初めて磯野富士子と会ったのは、1980年代後半で、院生だった。それ以来、磯野富士子は、同じ女性のモンゴル研究者として、気にかけてくださり、大阪に来る度に美味しい食事をご馳走になった。

磯野富士子は、英文学を専攻していたが、1943年に法学者の磯野誠一の内モンゴルでの研究調査に同行することになり、西北研究所の所員となる。帰国後、『冬のモンゴル』<sup>10</sup>を書いた。革命前の封建時代の内モンゴルを知る数少ないモンゴル学者である。フランス人のオウエン・ラティモアのモンゴル学研究所の主任研究員となる。二人は、ソ連共産党に唆されたのではなく、モンゴル人自身が自由を求めて運動し、そのエネルギーが革命を生み出していったという視点を共有した。磯野富士子は、ラティモアの著書の日本語訳にとどまらず、自分の調査研究も本にまとめたが、岩波新書の『モンゴル革命』は、筆者が1年生の時、初めて手にしたモンゴル関係の本であった。

磯野富士子がよく語ったことは、「みんなが、もうわかったと思っていることは、むしろ疑って、もっと知ろうとしないといけない。」「例えば、チョバルサン元帥は、独裁者と言われているけれど、彼の文章を読んで見ると、井戸を掘るという時も、川や丘の位置から幕営地の位置、遊牧民の土地利用を想定して、自分のことのように考えていたことがわかります。」ということだった。

E.チメッドツェレンの弟子たちが思い出す師匠の言葉にも、通じるものがある。磯野富士子とE.チメッドツェレンが並んだ写真は、筆者にとって、二人の育ての母と再会したような温かさを感じるものだった。

また、女性学で磯野富士子というと、第二次主婦論争に火をつけた「婦人解放論の混迷—婦人週間にあたったの提言」<sup>11</sup>や「主婦労働についての一つの疑問」<sup>12</sup>の著者と紹介する方がわかりやすいだろう。

日本の女性学において、女性が盛んに行った主婦に関する論争、母性に関する論争は、E.チメッドツェレンが書いた本には書かれていない。おそらく女性連盟では、女性たちによって議論されていたに違いない。今度、モンゴルに渡航したら、古文書館で女性大会関連の資料を読みたいと思う。

## おわりに

この番組のJ.オランゴアの発言のところで、E.チメッドツェレンが、粛清の遺族となった、知識人として著名な女性にインタビュー調査していることがわかった。粛清について調査はしていたが、全く書かなかったのだろうか、と疑問に思い、改めて著作を読み返してみた。すると、モンゴル女性連盟の最初の代表であり、最初の国会議員であり、憲法草案の作成にも関わったにもかかわらず、“Пагмадулам хар тамхичин байсан. Ясчин хятадтай суусан”（「パグマドラムは大麻の常習者だった。」、「高齢の漢人などと暮ら

<sup>10</sup> 磯野富士子（1986）『冬のモンゴル』中公文庫

<sup>11</sup> 磯野富士子（1960）「婦人解放論の混迷—婦人週間にあたったの提言」『朝日ジャーナル』2(15)(57)、P.P.14-21

<sup>12</sup> 磯野富士子（1972）「主婦労働についての一つの疑問」、「現代のエスプリ」No.56、P.123-135

した。」）と言われ、語ることもタブーとされてきた D.パグマドラムという女性がいる。E.チメッドツェレンは、1973 年発行の『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』の中で、彼女について非常に詳しく書き記していたことに気づいた。D.パグマドラムの名誉回復の動きは、筆者の知る限り、Д.ニャマーが 2009 年に “Их Д.Нацагдоржийн гэргий Пагмадуламын амьдрал, аж төрөл”（文豪 D.ナツァグドルジの妻、D.パグマドラムの人生と暮らし）を出版したことに始まる。これは重要な発見なので、次の課題としたい。

J.ボルによると、モンゴル国立大学は、E.チメッドツェレンに関する本を 2 冊、出版することを公表したと言う。この番組も影響したのだろう。また、E.チメッドツェレンに関する情報が増え、そこから新しい世界が見えるだろう。とても楽しみである。

写真 20 西欧に留学中の D.パグマドラム



出所: 1924 он: Монголын Эмэгтэйчүүдийн Холбоо байгуулагдсан түүх 「1924 年: モンゴル女性連盟を設立した歴史」 2021 年 8 月 2 日

<https://www.sonin.mn/news/culture/123359>

# WIDF 調査団報告『血のさけび』

藤目ゆき

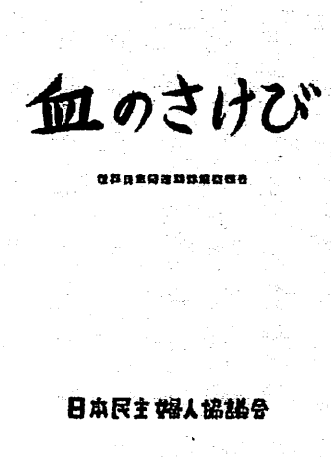
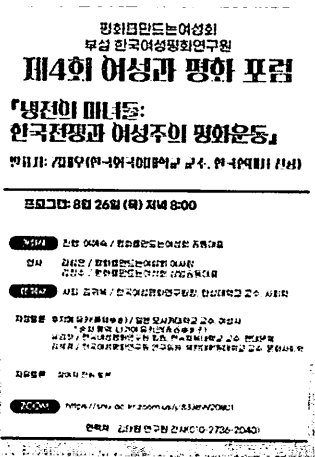
(はじめに)

2021 年 8 月 26 日、韓国の金貴玉さんからお招きいただいて、「平和をつくる女性会」が主催するオンライン開催の「第 4 回女性と平和フォーラム」に参加した。主題は「冷戦の魔女たち：朝鮮戦争と女性主義平和運動」である。このフォーラムでは、その題名で新著を刊行した金泰佑さんの報告が行われた。私はユ・イムハさん（韓国女性平和研究院会員、韓国体育大学教授、現代文学）、キム・ソンギョンさん（韓国女性平和研究院研究委員、北韓大学院大学教授、文化社会学）とともに、討論者として発言した。

本稿は、このフォーラムにおける私の報告をもとに、WIDF（Women’s International Democratic Federation）が出した朝鮮戦争調査団報告書<sup>(1)</sup>を日本語に訳した冊子『血のさけび』（1951 年 12 月 10 日、日本民主婦人協議会（責任者小川智子）発行、定価 30 円）と、その配布活動のさなかに逮捕・投獄された小山房子の政治的受難について述べる。

小山房子は三菱長崎造船所の出身で、日本民主婦人協議会（以下、民婦協と略称）の幹事の一人であった。1952 年 2 月に『血のさけび』を配布する活動中に逮捕され、その後一年から一年半にわたって投獄されていた女性である。逮捕当時は 26 歳であった。

私は 1998 年から 2002 年にかけて開催されていた「東アジアの冷戦と国家テロリズム」を主題とする国際シンポジウムや、2001 年に米国で開催されたコリア国際戦犯法廷をきっかけに、WIDF 報告書について研究するようになった<sup>(2)</sup>。WIDF 報告書の内容にも衝撃を受けたが、この報告書の日本語版が朝鮮戦争の最中に刊行されていたにもかかわらず長い間忘れられている事実を知って驚き、片山さとし『細菌戦黒書』（蒼樹社、1953 年）に含まれていた WIDF 報告書の日本語版を復刻し、『国連軍の犯罪—女性・民衆からみた朝鮮戦争』（不二出版、2000 年）を出版するとともに、『血のさけび』に関与した日本の女性たちについて調査を始めたのである。

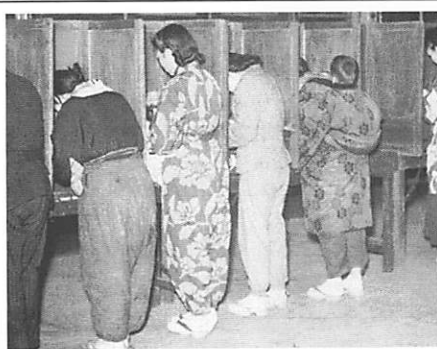


私が『血のさけび』について調査を始めた当時、小山房子については「『血のさけび』の配布中に逮捕された」事実のみは既刊図書<sup>(3)</sup>にも言及されていたが、詳しい事実関係は明らかになっていなかった。それで私は、女性史研究者の伊藤康子さんと米田佐代子さん、また、平塚らいてう研究者の小林登美枝さん、作家の松田解子さんたちに助言や協力をいただいて、民婦協の元常任幹事である松崎濱子さんを東京に訪ねて話を聞き、また、資料を提供していただいた。その後も、『労働運動研究』に「戦後運動史外伝・人物群像」を連載していた増山太助さん、大原社会問題研究所の吉田健二さん、三菱長崎造船の西村卓司さん、大阪の岩井会の方々にも小山房子の活動背景になる複雑な時代状況について、口述・文書の両面から支援をいただいた。多くの方々に多大なご協力をいただきながらも、小山房子の逮捕をめぐることは、これまで調査成果をほとんど論文や学会で発表できていなかった。そこで本稿では、これまでに集めた資料を生かして、小山房子とその時代についてまとめておきたい。

小山房子の軌跡をたどると、不可視化された女性史の暗部が見えてくる。朝鮮戦争時代は戦後の日本女性運動史の中で陽がささない暗い谷間の時代ともいえる。

敗戦後、女性参政権の実現で女性国会議員も誕生し、新たな女性団体や労働組合婦人部が活発になり、女性運動は1949年頃まで高揚した。他方、朝鮮戦争が停戦した1953年頃からは、日本婦人団体連合会（婦団連）の創立が示すように女性運動の新たな高まりがあり、WIDFの世界母親大会をきっかけに母親運動が盛り上がっていった。

ところが、その間にある朝鮮戦争時代の数年間、女性運動は大きな困難に直面し、すこぶる重要なできごとが光のあたらないところで展開され、その多くが忘れられ、不可視化されている。日本の女性団体がWIDFの報告書の日本語版を出して頒布したことは女性運動の国際連帯という意味ですばらしい偉業だったはずである。にもかかわらず、実際にはその取り組みは占領軍と日本政府に厳しい弾圧を受け、商業新聞には怪文書のように書かれ、取り組んだ本人たちさえ容易に語ることのできない深刻な挫折の経験となった。小山房子の活躍と政治的受難は、不可視化されてきた朝鮮戦争時代の女性運動の一部である。



上：総選挙の投票風景（1946年4月10日） 右：吉田首相と女性議員一期生（1946年5月）



（NHKのWEB特集「75年前、初めて投票した女性たちに聞いてみた」より）

## 第1章 小山房子—造船労組から日本民主婦人協議会へ—

### 第1節 三菱長崎造船労組最初の婦人部長

三菱長崎造船労働組合は、1946年1月19日に結成されている。当時の組合員は男性6259人、女性479人、計6783人であった。同年9月1日に造船産業の労働者を結集した産業別単一組合として全日本造船労働組合（当初の略称は全船、1949年から1964年の改称までの略称は全造船）が結成され、三菱長崎造船労組は全船の分会となった。小山房子はその三菱長崎造船分会の組合員であり、第3期（1946.12.14～1947.5.22）、第5期（1947.12.8～1948.2.5）、第8期（1948.10.14～1949.4.19）の3回、長崎分会の婦人部長であった<sup>(4)</sup>。もっとも第1期・第2期の婦人部長は男性であったから、小山が女性としては初代の婦人部長であった。

十年史編集委員会編『三菱長崎造船労働組合史』（1958年）には、労働組合結成初期の婦人部についての記述や写真がみえる。同書によれば、初代の「婦人部長」をつとめた田中雷名は、後に労働組合の懇談会で当時の事情をこう語った。

その時分の婦人の地位というものは非常に低かったのであります。また婦人の考え方も非常に低調で消極的であった。婦人部長というものは婦人から出るのが正当だといって一応辞退したのですが、何しろ婦人部のレベルが低い、レベルが上がるまで一応男子の方にやってもらいたいというわけで男子がやった次第であります。幹部の方は婦人部というものに対してもっと認識を深められ、今後とも差別待遇をしないようにぜひ願ひいたします<sup>(5)</sup>

同書には、1946年頃の、花束をもって行進する女性労働者の写真が掲載されている(78頁)。





なお、時期がはっきりしないが、同書には佐多稲子と婦人部の交流会（189 頁）の写真もみえる。佐多稲子の父親は三菱長崎造船に勤務していたことがあり、佐多稲子の作品『素足の娘』はベストセラーであったから、三菱長崎造船で働く女性たちにとって親しみを感じる作家だったのかもしれない。

全日本造船労働組合（全船）の青年部は活発で、全国各地に地方協議会（地協）と支部があった。長崎分会は特に強力で、活動的な分会だったようだ。全船の『青年部ニュース No.9』（1948 年 5 月 25 日）には長崎についての次のような記事が載っている。

かつて 6000 の青年部員を擁して天下にその威力をほこった三菱長崎支部も、年齢切り下げで今では 3000 数百人、それでも婦人部 700 を加えて相変わらず全船一の大所帯、九州男児のバリバリをこれだけそろえただけあってガムシャラとの評判もあれど、押しの強さは天下無類、肝っ玉の小さい人間はたちまち吹き飛ばされてしまう。昨年正月のストに川南スト、さては企業整備闘争と長船の青年部はずいぶん盛名をはせたものだ。（中略）眼を転じて婦人部に注げば初代部長は小山さん、今は支部の代議員、二月には婦人協議会常任幹事で東京に出ていた。あとは三役入れ替わり立ち替わりで、部長は長崎の猛者連を一喝の下にちぢみ上がらせる南里女史、副部長は崎岡さん、書記長は最近闘争に結ぶ恋で、かつての青年行動隊の闘士阿部君と結婚した佐々木さん、ここでも闘争は恋とすこぶる両立するらしい。雲仙ではヒゲで名高い前青年部長浜崎君が書記をやっており、婦人部は最近職員の加入で大いに膨張した。（中略）

川南争議でいかに青年と婦人が勇敢に献身的に闘ったかは今さらいうまでもない。労働者解放の闘いのかげに、縁の下で力持ちとして血と汗と涙を階級に捧げた多くの若い男女を忘れてはならない。（中略）企業のごろごろしている土地と違って、九州西北の一角にこれだけの勢力をもっていることは地方労働界の一偉彩であり、これら支部分会の推進力としての青年部の動きがこの地方におよぼす影響は大きい。そして、これらの青年部は全船九州地協青年部、南九州ブロックとしてさらに緊密な提携をはかりつつ活動を強化しようとしている、西九州の地に労働者階級解放の旗をかかげて、働く者の先頭に立つべき南九州ブロックの青年諸君の健闘を祈る次第である。

全船青年部は女性組合員の活動を重視し、1947 年秋からは、各地協婦人協議会常任幹事を東京の本部に駐在させるようになった。それまでもにも副部長 1 名、「婦人対策」係長 1 名計 2 名の女性が中央に配置されていたが、活動の発展のためにさらに本部常駐役員を増やすべきだとして、先ず近畿地区から藤井艶子が派遣されて駐在（1947 年 10 月 10 日～1



月 18 日) し、続いての駐在員として九州地区から長崎の小山房子が派遣され、1948 年 1 月 15 日～2 月 18 日に本部に駐在した。その間の 1 月 22 日には中国地区の日立造船向島工場(日立向島支部) から博田照美が三人目の本部常駐役員として派遣された<sup>(6)</sup>。

1948 年には全船青年部の女性活動家たちによる「婦人協議会常任幹事会」が 2 月、4 月、8 月、11 月の合計 4 回開催されている。第 4 回婦人協議会常任幹事会は、11 月 8 日～10 日の 3 日間静岡県表宮の日本鋼管厚生寮で開催された全船青年部第 4 回常任協議会の 1 日目に開かれ、本部・関東・東海・近畿・中国・九州など各地から婦人部の活動家が集まった。婦人協議会では各支部の取り組み報告や職場の封建性、賃金、生理休暇の問題などを活発に討論した。議事録などをみると、小山房子は、国際婦人デーに「長崎市内に託児所を設置すること」が決まり、促進のために努力していると報告し、長崎市内に 7 カ所、造船関係として立神地区に 1 カ所が 1948 年内に設立できる見込みだ、と話している。また、小山は「封建性といかに闘うか」という議題の際には、こう語った。

地方では特に封建性が強い。人員が足りないので多忙なのに女を雇入れない。それなのに女のほうでは勤労意識がたりない。封建的なものに負けてしまうので組合と一緒に闘わなければ解決出来ない。<sup>(7)</sup>

左派労働運動が高揚していた時期の資料から、組合を信頼して闘っていた小山房子の青春時代が垣間見える。

(第四回常任委員会に集まった女性たち。『ゼンセン』No.11(1948 年 11 月 25 日)より)



## 第2節 労組婦人部を基盤として創設された民婦協

全船婦人部の女性たちは、東京に常駐するメンバーを中心に他の女性団体と提携して活動することになり、民婦協創設に最初から参画していった。

**日本民主婦人協議会参加団体一覧表(1949年1月現在)**

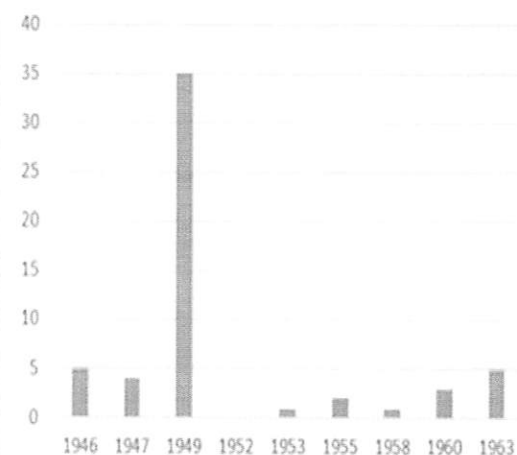
|    | 参加団体名            | 委員 代表者氏名 | 所属人員 (約)   |
|----|------------------|----------|------------|
| 1  | 全日本石炭産業労組婦人部     | 小林美代子    | 20,000     |
| 2  | 全日本化学産業労組婦人部     | 前渡志佐     | 77,500     |
| 3  | 日本民主主義文化連盟婦人部    | 土呂多喜子    | 10         |
| 4  | 民主保育連盟           | 羽仁節子     | 250        |
| 5  | 日本電機産業労組青婦対策部    | 鈴木よし子    | 15,000     |
| 6  | 婦人民主クラブ          | 松岡洋子     | 4,000      |
| 7  | 全逓信労組婦人部         | 小島とし子    | 130,000    |
| 8  | 日本共産党婦人部         | 野坂竜      | 15,000     |
| 9  | 国鉄新橋支部婦人部        | 金親洋子     | 1,800      |
| 10 | 日本青年共産同盟婦人部      | 御田秀一     | 90,000     |
| 11 | 全日本進駐軍要員労組       | 冠城ふみ子    | 3,000      |
| 12 | 農林職組農事試験場分会婦人部   | 村松保枝     | 100        |
| 13 | 杉並婦人団体協議会        | 昌谷民子     | 900        |
| 14 | 経団連日産協従組婦人部      | 加藤たま     | 30         |
| 15 | 沖電気芝浦分会婦人部       | 鈴木ふみ     | 500        |
| 16 | 日本私鉄開地連婦人部       | 富田花枝     | 54         |
| 17 | 全日本金属労組本部        | 小沢邦      | 10,000     |
| 18 | 日映演労組東京支部婦人部     | 城田○美子    | 1,650      |
| 19 | 全日本印刷出版労組婦人部     | 外山初絵     | 4,000      |
| 20 | 全日本電気工業労組婦人部     | 斉藤数子     | 20,000     |
| 21 | 全日本協同組合同盟婦人対策部   | 勝目テル     | 150,000    |
| 22 | 日本ゴム工業会従組婦人部     |          | 45         |
| 23 | 全日本造船労組婦人部       | 鈴木和子     | 900        |
| 24 | 全印刷局労組婦人部        | 若林きみ子    | 1,500      |
| 25 | 私鉄総連婦人部          | 保科八重子    | 30,000     |
| 26 | 農林省職組統計調査局分会婦人部  | 白井清子     | 125        |
| 27 | 全東京都職員組合連合会婦人委員会 | 加納きく     | 250        |
| 28 | 全国立医療労組婦人部       | 染瀬美代子    | 16,000     |
| 29 | 全国専売局労組婦人部       | 勝平金子     | 15,886     |
| 30 | 農林省開拓局分会婦人部      | 斉藤壽子     | 90         |
| 31 | 全財東京地連           | 八太明子     | 600        |
|    |                  |          | 合計 609,190 |

(註) 本表は松崎濱子氏所蔵の一覧表をもとに作成

1947年12月25日、東京において共産党の主催で民主日本建設婦人大会が開催される。これを機に、民婦協の前身である「民主日本建設婦人協議会準備会」が組織され、全船の代表も準備活動から参加した。1948年1月には「働く婦人の懇談会」（1月10日）、「労組婦人部懇談会」（1月28日）などの会合に全船の組合員が出席し、1月24日関東配電で開かれた会合では、国鉄労働組合から山川菊栄婦人少年局長へ決議を手交した報告、婦人解放の会から生鮮食料品確保について経済安定本部に差し出した決議の報告、全船からは電力関係につき商工省へ決議を手交した報告が行われている。

民婦協は1948年4月19日に結成（初代会長勝目テル）された。参加団体一覧表が示すように、左派労働運動のナショナルセンターである産別会議参加の労働組合をはじめとして様々な労働組合婦人部が中心になり、婦人民主クラブ、日本協同組合同盟婦人対策部などが参加し、最盛期の1949年1月頃には30団体余りの60万人を結集した。このような流れの中で小山房子は全日本造船労働組合婦人部の活動家として民婦協に参画するようになり、やがてその活動の舞台は長崎から東京へと移ってゆく。

図 衆議院議員総選挙における日本共産党  
獲得議席数の推移(1946～1963年)



民婦協加入組織一覧の中に、共産党婦人部（部長野坂竜）15000人が記載されている。

敗戦後、日本共産党は合法政党として活動を始め、労働運動・女性運動・青年学生運動のそれぞれに強い影響力を持ち、国会にも進出した。1949年の衆議院総選挙では35人の当選という躍進をとげている。

戦時下の弾圧を生き延び、合法的存在として公然と活動を始めた共産党に、多くの人が日本民主化への希望を託したわけである。

小山房子が共産党員であったかどうか、党員であるとすればいつ入党したのかについては不明だが、シンパシーがあったのは明白だろう。三菱長崎造船所には労働組合結成と同じころに共産党支部が発足し、以降、レッドパージの時期にかけて、支部員は「女性活動家もふくめて30名近くを数えた」<sup>(8)</sup>という。また、全船青年部の活動家たちには共産党や産別会議に共感する人が多かった。全船一全造船は産別会議の加入組合ではなかったが、若い組合員たちの多くが産別会議への加入を支持していた。1948年4月2日・3日両日に芝中央労働会館講堂で催された全日本造船労働組合第四回定期大会には、共産党婦人部の小松勝子、産別婦人部長猿渡文江、電産や国鉄労組の青年・婦人部、進駐軍要員労組青年婦人部の丹野節子（代理）らから挨拶が送られた。産別加入の採決では、加入促進に賛成が圧倒的（賛成96 反対4 保留3）であった<sup>(9)</sup>。

戦後の左派大衆運動は、共産党と連携すると共に、反ファシズム統一戦線の経験をふまえて1945年に創設された各階層の国際組織とつながり、それによって新しい世界を展望し

た。全産別や全労連が WFTU(世界労連)、労組青年部や青年共産同盟が国際民青連(WFDY)、労組婦人部や国際婦人デーを重視する左派女性団体が WIDF と独自につながり、世界的な民衆連帯の中で日本の民主化と労働者・青年・女性の未来を拓くことを模索していた。

全船青年部もこのような運動の流れの中にあった。全船青年部の機関紙『ゼンセン』の紙面を見ると、折々に WFTU や WIDF の話題が載っている。1949 年の『ゼンセン』No12 は国際婦人デーにちなんで国際女性運動の歴史をふりかえり、前年 12 月にブダペストで開催された第 2 回国際女性大会や「自由と平和を守る 49 か国 8 千万人の大組織 闘う国際婦人同盟」として WIDF が紹介されている。

(『ゼンセン』 no12 (1949年2月15日) より)



### 第3節 民婦協幹事になった小山房子

1949年8月5日、民婦協の第一回総会が開かれ、組織強化をめざして事務局を置いて日常業務を行うこと、活動指針として「婦人戦線」を発行することなどが決まった。幹事長には婦人民主クラブの櫛田ふき、常勤事務局長には松崎濱子が着任した。松崎は、1948年8月に日本共産党第6回大会で野坂竜が中央委員・婦人部長になってから、共産党婦人部の常勤として活動していた<sup>(10)</sup>。

それからまもない1949年11月15日、WIDF評議会がモスクワで開催され、かねて申請中の民婦協の加盟が正式に認められた。



その頃、中華人民共和国の樹立直後の北京において「アジア婦人会議」（同年 12 月 10 日～16 日）が開催されると知り、松崎濱子たちはこれに出席する準備に全力をあげた。

「アジア婦人会議」の準備の一環として、冊子『日本の婦人と子供―世界の婦人へ訴う！』が作成された。また日本代表として櫛田ふきや松田解子など十名を選び、日本から「原子爆弾の禁止、全面講和の促進」の議題を提案することも決めた。

GHQ が出国を認めず参加は断念したが、かわりに 1949 年 12 月 16・17 の両日、「アジア婦人会議」に連帯する「日本婦人会議」を東京の下谷公会堂で開催している。

1950 年 3 月の国際女性デーには、WIDF から民婦協あてに、世界的な戦争の危機、巨大な軍事予算と人々の窮乏、原爆その他の大量虐殺兵器に反対して平和を求める連帯メッセージが寄せられた。これに呼応して、3 月 8 日、日本各地で女性の集会が開催された。東京日比谷音楽堂で午前 10 時から開催された日本中央大会には、民婦協、婦人民主クラブ、民主保育連盟、産別会議、全官公、社会党、日本女子勤労連盟、新日本婦人同盟、共産党などの各団体などから約 10000 人が参加した。壇上には「戦争の恐怖とにくしみにもえる母親が、打ちふるえるわが子をしっかりと抱いた大きな画」と「戦争と貧乏に反対」という中心スローガンが掲げられた。司会は、民主婦人協議会の小川智子がつとめた。全労連や労農党、日本青年会議などの代表や共産党議員田島ヒデ、朝鮮女性同盟金恩順らが来賓として出席した。主婦や女性労働者から家庭や職場の切実な要求が訴えられ、「ポツダム宣言による全面講和」、「工場で武器をつくるな」などの決議を採択し、午後からはデモ行進も行われている。（『日本労働年鑑』第 24 集、1951 年発行）



松崎濱子（1913～2009 年 9 月 28 日）。

1931 年に東京地下鉄道会社に入社し、運輸課出札係になった。電車の轟音とよどむ空気の中での長時間勤務。全協のオルグの下で労働組合を作り、1932 年 3 月「もぐら争議」として有名な 4 日間の地下鉄ストに勝利。その準備の中で共産青年同盟から共産党に入党。ストの 1 カ月後、特高に家に踏み込まれて検挙され、後手に縛りつけられ殴る蹴るの拷問をうけた。1945 年には熊谷空襲を経験。戦後、神奈川県労働組合協議会事務局の仕事を経て、1948 年に共産党婦人部の常勤になった。

小山房子が民婦協の幹事に就任した正確な時期はわからない。が、三菱長崎造船における婦人部長の任期が 1949 年 4 月 19 日で終わっていること、1949 年後半に民婦協が WIDF 加入団体として活発な国際連帯活動を始めたこと、労働運動において「民主化同盟（民同）」

の影響力が強まるなどして労組が東京に組合員を常駐させることができる条件が弱まりつつあったことなどを考えると、早ければ1949年、遅くとも1950年中に小山の活動の中心は民婦協にシフトしていたのではないだろうか。

1949年7月に下山事件、三鷹事件、8月には松川事件という国鉄をめぐる怪事件が連続的に発生し、これらの事件は捜査が始まらないうちから共産党やその影響下にある労働組合の犯行と決めつける政府と報道の姿勢によって、行政整理反対闘争の最中であつた国鉄労組や東芝労組の活動家・共産党員が逮捕・起訴され（両事件とも後の裁判で共産党員たちの無罪が確定。三鷹事件では非共産党員の竹内景助による単独犯行とされた）、共産党や左派労働組合に対する非難や恐怖が社会に広がることになった。労働組合婦人部に支えられてスタートした民婦協は、行政整理や左派労働運動の弱体化の中で「加盟労組婦人部の常勤者」の減少に直面し、労組の補助なしに民婦協の活動に献身する幹事を必要としていた。

特に1950年の朝鮮戦争開戦前後から左派労働運動に対する攻撃が激化し、レッドパージが7月末のマスコミ関係を皮切りに全産業に広がった。このため民婦協も加盟労組・婦人部が消滅したり、組合が反共に変質して役員が変わったりして縮小していった。造船産業ではレッドパージの被解雇者は601名に達し、三菱長崎造船では11月8日に82名が職場から追われ、組合は大打撃を受けた<sup>(11)</sup>。労働組合活動の中で長崎から東京に進出した小山は、選出母体がなくなり、帰る場所を喪失したわけである。民婦協の別の幹事であつた小川智子は、もとは国鉄本社支部の婦人部長であつたが、国鉄のレッドパージで職を失っていた。

民婦協は、朝鮮戦争下の厳しい状況の中、全面講和の署名運動や再軍備反対の運動を続け、1951年2月には民婦協機関紙『平和婦人しんぶん』を創刊する。小山房子は、この機関紙の編集発行人をつとめた。

『平和婦人しんぶん』創刊号（2月11日）は、WIDFによる国際女性調査団のきっかけになった朝鮮女性同盟からのアピールを掲載している。「貴女の息子たちをよこさないで！」との見出しをつけて、1月5日付の「朝鮮全国民主女性同盟が全世界の婦人にあてたメッセージ」の日本語訳が掲げられたのである。この呼びかけが、同年5月のWIDF調査団の朝鮮派遣につながり、さらにその報告書の邦訳『血のさけび』が同年12月に発行されるにいたるのである。

民婦協は2月から5月にかけて13号まで『平和婦人しんぶん』を発行した。その紙面には、各地の主婦や労働者が全面講和運動に取り組んでいるニュースや、朝鮮戦争勃発後の労働強化の問題が取り上げられた。朝鮮人強制送還に反対して朝鮮人女性の訴えや地域の軍事化に不安を抱える主婦たちの声もとあげている。『平和婦人しんぶん』は第13号（5月24日）まで隔週発行で、定価5円で販売された。

が、1951年5月24日、『平和婦人しんぶん』（発行部数は停刊当時、3万部と伝えられている）は政令三二五号に基づく停刊処分を受ける。『労働者』（前年に発禁になった全労連の『労働新聞』の後継紙。産別会議発行、2万部）、『新青年新聞』（日本青年祖国戦線機関紙、2万部）、『祖国と学問のために』（日本青年祖国戦線学生対策委員会発行、2万部）などとともに発行を禁止され、同日、全国の発行所、印刷所、配布網など1千所が搜索され、3百人が逮捕された（『読売新聞』1951年5月24日）。



## 第2章 『血のさけび』の配布と小山房子の逮捕

### 第1節 政令三二五号 朝鮮戦争下の弾圧

小山房子の逮捕理由は、直接には WIDF の朝鮮戦争真相調査団の報告書を携えていたことであった。朝鮮戦争勃発の前後から共産党および共産党系大衆団体に対する機関紙の発行禁止、幹部の公職追放、活動家の逮捕といった政治的暴圧が続いており、小山が逮捕されたことは、朝鮮戦争下におびたしい数の人々が被った政治的受難のひとつだった。

マッカーサー元帥は朝鮮戦争勃発直前の 1950 年 6 月 6 日、吉田首相宛ての書簡で共産党中央委員の公職追放を指令し、朝鮮戦争勃発翌日の 26 日には共産党中央機関紙『アカハタ』の 1 カ月間停刊を指令した。日本政府は 6 月 28 日、共産党の下部機関紙の発行停止処分（7 月 18 日に無期発行停止処分）を行い、同日、共産党中央委員を公職から追放した。8 月には全国労働組合連絡協議会（全労連）中央本部に解散を命じ、全労連幹部 12 名を公職追放処分とした。1950 年 10 月 31 日には政令三二五号（占領目的阻害行為処罰令）が發布（講和後の 1952 年 5 月 7 日に廃止）され、この政令が占領下の言論・出版・思想信条・結社の自由に対する弾圧のために猛威をふるうようになった。

朝鮮戦争下、アカハタ後継紙・同類紙と指定された刊行物が次々に発禁になり、各地で家宅捜索が行われた。捜索で配布網が判明するや、配布網への官憲の急襲、家宅捜索による摘発、検挙が全国に波及した。「配布網」と認定される根拠は「二部以上複数の新聞をもっていること」にまで拡大解釈され、捜索や不審尋問などでこれらの新聞が見つかり、所持してただけで即逮捕というような異常な弾圧が続いた。田村紀雄は政令三二五号による言論出版弾圧を占領史の「落丁」のひとつと指摘し、延べ 1 万か所近くが捜索され 2 千人近くが検挙されたといわれる占領下の弾圧状況に注目し、「これほどまで短期間に、多くの人家が踏み込まれ、多くの人々が逮捕されるという警察権力の行使がなされた例を知らない」<sup>(12)</sup>と述べている。「アカハタ」後継紙・同類紙の停刊は 1950 年 8 月 1 日の時点で 1097 紙、12 月末には 1464 紙に及び、『平和婦人しんぶん』停刊直前に特別審査局（特審局）が作った 1951 年 5 月 15 日現在の「日本共産党関係機関紙発行停止一覧」では、1722 紙にのぼった<sup>(13)</sup>。そして 5 月 24 日、前述した『平和婦人しんぶん』『労働者』『新青年新聞』『祖国と学問のために』（学生団体）の 4 紙の発行禁止、同日の 1 千カ所の捜索・3 百人の逮捕という弾圧が行われたのである。

共産党や共産党系団体の活動は大打撃を受け、人々は機関紙類を持っているだけで危険になった。それでも印刷や配布は非公然に続けられ、摘発を避けるために紙名を変えたり、原紙を分散して印刷する方式をとるなどして出版を続けた。1951 年中に特審局がこうした停刊措置の施行に伴って捜索した場所は 4558 カ所、告発した人は 420 人に及んだ<sup>(14)</sup>。

民婦協は『血のさけび』を 1951 年 12 月 10 日付けで発行している。次の表は、『聞蔵』、『毎索』、『ヨミダス』といった新聞各紙のデータベースを利用して、『血のさけび』刊行前後の数か月に政令三二五号違反容疑などで行われた弾圧・出版物摘発に関する新聞記事の見出しを拾い上げて筆者が作成したものである。

| 1951年10月～12月の共産党系出版物の摘発と検挙 |                                    |    |
|----------------------------|------------------------------------|----|
| 10月12日                     | 日共関係襲う 都下十九カ所__日共対策                | 朝日 |
| 10月19日                     | 二十三カ所襲う 日共出版物配布先__日共対策             | 朝日 |
| 10月27日                     | 「朝鮮情勢月報」を停刊 四名を逮捕                  | 読売 |
| 10月31日                     | 朝鮮人学生寮捜査__日共対策                     | 朝日 |
| 11月14日                     | けさ85カ所急襲 日共機関紙 “内外評論”配布網洗う／法務府特審局  | 読売 |
| 11月19日                     | 日本共産党：秘密文書配布網を急襲                   | 毎日 |
| 11月26日                     | 野坂氏事務所など急襲／本富士署                    | 読売 |
| 11月29日                     | 河田氏のアジト急襲                          | 読売 |
| 12月4日                      | 日共の5カ所捜索 三鷹事件の飯田氏宅ら                | 読売 |
| 12月14日                     | 24カ所に手入れ 軍事スパイ証拠固め▽地質調査所を捜索▽重要資料入手 | 読売 |
| 12月14日                     | 日本共産党：飯田氏らのアジト廿四カ所十四日朝急襲           | 毎日 |
| 12月20日                     | 日本共産党：秘密文書押収－千葉で県職組幹部宅捜査           | 毎日 |
| 12月21日                     | 日共手入れ 都下で12カ所／八王子                  | 読売 |
| 12月30日                     | 日共アジト10カ所襲う／東京・品川                  | 読売 |

これらの記事から摘発の内容を概観してみよう。

1951年10月12日午前6時頃、東京都南多摩郡町田在住の芥川賞作家桜田恒久(58歳)や武蔵野市吉祥寺在住の経済大学教授玉城肇(50歳)<sup>(15)</sup>宅をはじめ、三鷹・青梅・田無・日野など19カ所が政令三二五違反容疑で家宅捜索を受け、『党活動指針』『平和と独立』『健康法』などが多数押収された。

10月19日午前7時、警視庁と本富士・駒込・大塚・宮坂各警察署が協力し、政令三二五違反容疑で都内23カ所を「日共秘密出版物の配布先」として一斉手入れした。

10月27日、特審局は在日朝鮮学生同盟中央総本部文化部発行の『朝鮮情勢月報』を無期限停刊に付した。この月報は朝鮮情勢の時事解説や北朝鮮を支持する論文を掲載した「反占領軍的パンフレット」とみなされ、同日、委員長の孟東鎬(24)が政令三二五号違反容疑で逮捕された。また都内6カ所・全国数十カ所が配布先として家宅捜索を受け、書類が押収され、青森では2名、岩手と千葉では各1名が逮捕された。

10月30日夜、特審局は共産党東京都委員会発行の『大衆の力を』を発行停止。翌31日午前7時警察が渋谷区鶯谷町にあった在日朝鮮人学生寮ほか4カ所を襲い、政令第三二五号違反の疑いで捜索を行い、書類多数を押収した。

11月14日、特審局は共産党機関紙『内外評論』を無期停刊処分にふし、都内81カ所、地方4カ所の印刷所や配布網を政令三二五号違反容疑で一斉に襲い、家宅捜索で書類多数を押収し、5名を検挙。『内外評論』は『たべある記』『古書目録』『造林』などと表題をかえて推定3万部が発行されており、「ゲキエツな反占領軍的なもので、日共中央指令を代行する性質のもの」と報じられている。

11月19日午前10時半、世田谷区の翻訳業水野つた(48)方ほか14カ所を政令第三二五号違反容疑で襲い、家宅捜索を行い、「日共非合法文書」多数を押収した。

11月26日午前6時半から文京区の野坂参三事務所および同区小石川に住む日雇い労働者の共産党員宅を捜索し、『内外評論』『山ばと』など政令三二五号違反文書を押収した。

11月28日夜、指名手配中の日共臨時中央委員河田賢治(51)を捜索するため警察が大阪市内の大森某方を急襲。河田の姿はなかったが書類数部を押収し、大森を逮捕。また、警官が近くの交差点付近で不審尋問をした男が「政令違反の秘密文書」を持っていたので逮捕した。

12月2日、東京都葛飾区柴又の民家で飯田七三ら7名が逮捕され、文書類が押収された。同年10月の五全協で確認された軍事方針に基づいて関東地方の責任者が集まって会談中に家宅捜索を受け、逮捕されたものである。これが、いわゆる「柴又事件」である。

12月14日には柴又事件捜査の「証拠固め」を目的に警察が都内及び神奈川、埼玉、千葉各県下で24か所を急襲し、政令三二五違反容疑で家宅捜索、文書類を押収した。

12月16日、立川市で政令三二五号違反の現行犯として東京経済大学4年生(24)を逮捕したことを端緒として、5日後の21日に立川市で4か所の家宅捜索を行い、1名を検挙。武蔵野、小金井、五日市、町田、府中、調布、八王子方面でも8か所、13人の家宅捜索により、『球根栽培法』ほか機関紙200数十点を押収。

12月29日夜8時、「日共の秘密アジト」とみられる9カ所を政令三二五号違反容疑で家宅捜査し、「反米文書」などを押収。

## 第2節 『血のさけび』配布網への弾圧

私は1999年、小山房子が逮捕された当時の状況を調査するため、松崎濱子さん（以下、敬称略）のお宅を訪問して話を伺い、当時の資料を見せていただいた。そのときに松崎から紹介されたのが、『東京タイムス』（1952年2月28日）の記事を手書きで書き写した以下の記録であった。

「日共女党员二名を逮捕 “血の叫び” 配布網追及

【川崎】川崎市高津署では27日川崎久本の資源庁地質調査所を日共婦人機関紙配布の疑いで急襲、証拠文書を押収した。同署ではさる20日地質調査所前で日共文書と見られる“血の叫び”多数を所持していた東京都杉並区成宗18川島方木垣房子(26)の検挙を端緒に、23、26、27日も引き続き配布拠点と見られる市内五カ所を捜索中、地質調査所組合婦人部長三浦テル(20)、同組合員鈴木秀子(20)の二女子党员を検挙、“血の叫び”“球根栽培法”“独立と平和”“メモ”など証拠書類多数を押収した。“血の叫び”は世界民主婦人連盟調査報告と題する東京都港区新橋7の13日本民主婦人協議会（責任者小川智子）発行名義の秘密文書で、女子党员のみを対象としたものである。（漢数字はアラビア数字に改めた。）

松崎によれば、この記事にある「木垣房子」が、小山房子であるという。

記事にある「地質調査所」は、1878年に内務省地理局に設置された地質課を起源とする国の機関であり、1945年に空襲で旧庁舎を焼失した後、1946年に川崎市高津区に移転した。1949年に通商産業省が発足して資源庁・工業技術庁・特許庁の3つの外局が新設され、「地質調査所」は資源庁の管轄となっていた。

『平和婦人しんぶん』第10号(1951年4月19日)には、朝鮮戦争下の労働強化と闘う労働者や、「軍用道路より下水をなおして!」と憤る住民の声、鉄くずを拾う子供のこと、各地で集まる全面講和署名、中国の女性からの激励の手紙などの記事とともに、「今年こそ全面講和 川崎通産省の婦人たち」という見出しで、地質調査所労働組合婦人部の活動が紹介されている。婦人部全員が集まって報告会を開き、全員で全面講和署名を集めるために行動することに決めたという。いろいろな意見が交わされ、「昼休みに一人でいくのは心細いから、二人ゆきましょう」「婦人部だけでなく、青年部ともいっしょにやるようにしましょう」「私はお買い物の時にもってゆく、家はお客が多いから、お母さんにも頼みます」「親組合にもやってもらいましょう」と、身近なところから活動することに決めた。また、生理休暇、タイプその他の人員増加、女性に対する一方的な人事に対して徹底的に闘うことなどについても話し合い、これらの要求を以て官側と交渉することになったという。

地質調査所労働組合の編纂した『大地に刻む—地質調査所労働組合25年史』（全商工労働組合関信支部地質調査所分会、1976年）には、二人の組合員が逮捕されるにいたる背景と逮捕前後の事情が次のように説明されている。

地質調査所の組合活動は、朝鮮戦争の前から地元の高津警察署に監視されだした。1950年3月のはじめ、高津署公安課の警官が組合の副委員長に会見を求め、組合の組織・人員・委員の略歴その他の事項について、持参の書類に記入するように求めて帰った。数日後には私服で来所し、さきの書類を提出するようにと求めたが、組合はこれを拒否した。

翌1951年5月28日に高津署の私服2名が来て、書記長に会い、産別会議発行の『労働者』をとっているか、あったらくれないうか、何部入っているか、誰が読むのか、と執拗に聞いたが、書記長は返答を拒否した。翌29日、今度は5名が捜査令状をもって来て、組合事務所を搜索した。書類棚・屑籠の中、さらには本棚の鍵を壊して開き、中の本を1頁ずつめくってみるほど綿密に調べ、『労働者』など17部を押収して引き揚げた。

同年7月24日、5名の刑事が地質調査所の庁舎に入り、燃料部の手塚寿美を地域の平和運動に参加し反戦ビラを配布したことを理由に逮捕した。彼女は起訴され、休職にされた。以後、制服・私服の警官が地質調査所にひんぴんと出入りするようになり、12月10日、横浜地裁は手塚に懲役3カ月、執行猶予1年の判決を下した。

組合は手塚の控訴費用と越年資金のカンパを集めたが、地質調査所側は翌1952年2月6日に手塚を懲戒免職にした。青婦部は不当処分に抗議するよう親組合に働きかけたが、分会委員会では手塚の活動が組合の機関決定を経ていないとして消極的な意見が強く、組合としての抗議はできなかった。

官庁側は組合員に対して圧力をかけ、庶務課長が測図課製図係の鈴木の父親をこっそり呼びつけ、「娘さんに退職願を出させろ。今やめれば退職金三万円を出す。ここで身の振り方をまちがえると、どんなことになるかわからない」と脅した。父親は本人の意思を伝え、きっぱりと断った。組合執行部・青婦部の強い抗議を受けると、庶務課長は「工技庁からなんとかしろといわれていたので、所長からまかされてやった」と内情を暴露した。

それからまもない2月23日の朝、出勤直前の三浦が高津署の警察官に自宅で逮捕され、25日に政令三二五号違反で送検される。『大地に刻む』には、次のような説明がある。

三浦照子はその二日ほど前、組合を訪れた地域の平和活動家の婦人から、米軍の朝鮮侵略の不当を訴えたパンフ「血の叫び」の販売を依頼されました。このパンフは、全商工本部や関信支部でも取り次がれ、東京では市販されているものでした。持参した婦人活動家は地質分会を訪ねた帰路、尾行した刑事に逮捕され、その関係で三浦もねらわれたのです。

高津署の刑事四名は、さらに二六日午後一時ごろ、庁舎全域にわたる捜査令状をもって来所、資料室の数名の机を調べ、地質部長室、製図室も搜索しました。その際、非合法出版物所持現行犯の名目で、製図係の鈴木英子が逮捕され、連行されました。庶務課長から退職を強要されてから 10 日ほど後のことです。（『大地に刻む』107 頁）

『大地に刻む』では、『血のさけび』は「米軍の朝鮮侵略の不当を訴えたパンフ」として紹介され、小山房子は「地域の平和活動家の婦人」として登場している。『東京タイムス』紙が警察発表のままに『血のさけび』を「日共秘密文書」、「女子党员のみを対象にしたもの」と断じているのに対して、『大地に刻む』は、このパンフが「全商工本部や関信支部でも取り次がれ、東京では市販されているもの」とであると説明している。

三浦と鈴木逮捕に対して、2 月 26 日には近くの池貝鉄鋼労組や全商工本部から調査団がかけつけ、27 日には池貝鉄鋼・高津土建・登戸土建の組合の代表者が集って協議し、地域共闘を結んだ。そして高津署に抗議し、鈴木に面会した。関信支部でもこの日分会委員長会議を開き、提携して闘うことを決めた。鈴木は同日夕方釈放された。

各方面からの応援と激励に支えられて、分会委員会は今後の対策を討議し、29 日、分会青婦部は横浜検察庁へ即時釈放要求嘆願書を提出し、分会委員長は、三浦が未成年だったので法務庁人権擁護局へ提訴した。同時に青婦部は釈放署名運動と資金カンパを始めた。3 月 1 日には分会執行部は関信支部委員長らとともに、一連の事件について高津署に抗議した。

三浦照子は 3 月 3 日、10 日ぶりに釈放された。勾留理由をただした組合代表に対し、地裁の検事は「発禁になっていない本でも、三三五号違反だ」と答えたという。三浦の釈放後、組合は庶務課長に不当人事をするなど申し入れ、今回の事件は婦人部長としてかわりあったことなので懲戒処分には一切しないことを約束させた。地質調査所の労働組合は、二人の女性組合員の逮捕を当局が計画的に地質分会をねらったものと受けとめ、組合の団結によって彼女たちを守りきったのである。

このできごとを総括して、『大地に刻む』は次のようにまとめている。

高津署の地質分会に対する一連の不当な攻撃は、当時政府が白鳥事件（一月二一日）、青梅事件（二月一九日）、ポポロ事件（二月二〇日）など、破防法国会上程を機に民主勢力に加えた弾圧・挑発の一部で、まさに日米安保条約発効（四月二八日）前のことでした。地質分会にとっては、初めての、またそれ以後にもない貴重な対官憲闘争でした。分会のとりくみは、政治意識の低さ、官憲への恐怖、組合活動の低調などがからみあって、十分なものとはいえませんでした。しかし、この闘争を経験して官憲の反動性、労働者の共闘・連帯の重要性などを、組合員は身にしみて学びとりました。（同前 108 頁 註の番号は筆者による）

### 第3章 封印された『血のさけび』—消息不明の小山房子

#### 第1節 松崎濱子が語った小山房子

松崎濱子の自伝には、小山房子が逮捕された当時のことが、次のように書かれている。

当時は日本の基地からアメリカの戦闘機が朝鮮に飛び立ち、日本ではいっさいの集会、デモが禁止されているきびしい時でした。民婦協の幹事小山房子さん（元全造船婦人部長）が、この本を配布したという理由で逮捕、起訴されるという不法なこともおりましたが、読んだものは「戦争はすぐやめて、基地反対」と、怒りは地をうようにひろがりました（『すそ野をゆく』156頁）

1999年10月に東京の松崎宅を訪問したとき、松崎は小山房子について、私に次のようなことを語った。長崎県出身であり、たぶん三菱重工長崎造船所で働いているときに被爆したこと、全造船の婦人部長として活躍したが、朝鮮戦争が始まってからはレッドパージや労働運動の弱体化のため全造船婦人部の活動ができなくなったこと、民婦協で活動したが、『血のさけび』が共産党の文書であるとされ大規模に摘発されたこと、そのため松崎たちは『血のさけび』をすぐ回収して隠したこと、小山房子は逮捕され、有罪判決を受け、1〜2年の間投獄されていたこと、その後は運動から遠ざかったこと、結婚はうまくゆかず、長崎に帰郷して母親と二人で暮らしていたこと。

松崎は、長崎に旅行した折に小山に会いたいと思ったが実現できなかった、とも語った。

私はこの訪問のときに、『血のさけび』の現物を初めて見た。松崎は、小山逮捕後、この冊子を急いで回収し、弾圧を避けて隠したという。長い間段ボール箱かなにかに封印したまま家のどこかにしまってあったと言いながら、淡いピンク色の表紙の冊子を見せてくれた。WIDF 調査団報告書の日本語訳は片山さとし『細菌戦黒書』に収録されており、私はすでにそれを読んでいたが、日本で最初に邦訳され、しかも日本の女性団体が発行した『血のさけび』の実物を自分の目で見るのは感動的だった。

誰がどのように訳したか、読者からの反響はどのようなだったか、小山が逮捕されたあと民婦協がどう動いたか、小山房子はその後どうしたのか、など、『血のさけび』と小山をめぐる具体的な諸事情を詳しく聞きたがる私に対して、松崎の口は重かったと思う。松崎自身がWIDF報告書を読んだ当時、内容をどう感じたかを問うと、「日本も空襲を受けていますからね・・・」と言葉を濁された。

私自身は、WIDF 報告書の中で世界各地から参加した女性たちが空爆を目撃もし、前日の空襲で死んだ朝鮮人老若男女の死臭がただようなかを歩いたという内容にももちろん息をのんだが、それ以上に、米韓軍に一時占領された地域で無数の民間人に対する虐殺・虐待が行われていたという報告が印象的だった。折しも韓国では、済州島4・3事件から半世紀を経て、朝鮮戦争前後の民間人虐殺が遺族・学者・活動者の協力で洗い直されている時期であった。前年1998年に済州島で行われた国際シンポジウムで朝鮮戦争前後の韓国にお



いて米韓軍による大量の民間人虐殺があったことを知った私は、そのあとに WIDF 報告書を読んで、米韓軍が 38 度線の南で行ったのと同じように、北においても民間人に対する不当拘禁、拷問、焼き討ち、レイプといった蛮行を働いていたことを伝えるものと理解した。38 度線の以南であれ、以北であれ、そのように地上戦で地域が制圧され、地域住民が占領軍の蛮行にさらされたという報告は衝撃的であった。

第二次世界大戦中、日本本土では地上戦が行われていない。本土の日本人にとって、生活の場がそのまま戦場になる地上戦の恐怖を想像することは難しい。それだけいっそう、占領軍の暴力を受けた民間人の被害実態を伝える WIDF 報告書を当時の民婦協の女性たちがどう感じたか聞きたいと思っていた。当時、民婦協傘下にあった在日本朝鮮女性同盟ではこの報告書がどのように読まれていたか、民婦協の日本人女性がどのようにして日本語訳を入手できたかなども知りたかった。ところが、こちらが何度水を向けても、松崎の語りは朝鮮戦争下の『血のさけび』の話題からそれて、子どもを守る運動のことや、「フランスでフランス・デモ（ジグザグデモ）をした」ことなど、楽しく懐かしい昔話にいつのまにか転じていった。不快感を露わにされたわけではないのだが、『血のさけび』当時の民婦協について話したくない様子であった。

松崎は、1951 年中の『平和ふじん新聞』や同年 12 月の『血のさけび』配布をめぐって、「分裂した一方の誤った指導に基づくものだった」とも語っている。朝鮮戦争当時、共産党は「50 年問題」と呼ばれる共産党組織の分裂状態にあった。共産党が実質的に非合法化され激烈な弾圧がかけられる中で、党組織は地下に潜行せざるを得ず、臨時中央指導部の下で軍事闘争方針が出て以降は、表に出せる公然活動と秘匿せねばならない非公然活動が党の別の系列で行われていた。政令三二五号が猛威をふるい、誰かが検挙されることによって関紙配布網や組織事情が露見して次の誰かの摘発につながるという厳しい状況の中で、党员の間にも逮捕や裏切りにまつわる恐怖や疑心暗鬼が生じたのも不思議ではない。誰かがスパイではないかと疑いあう重苦しい空気が漂っていただろう。松崎自身、この時代に上部からスパイの疑いをかけられたことがあったという。インタビューの間に、話したい話題でないということは察せられた。

朝鮮戦争下の共産党は、公職追放、団体等規正令、さらに政令三二五号の適用によって公然たる活動がことごとく禁圧され、実質的には非合法化されているのも同然という実状であった。前日まで公然と多くの人に読まれていた刊行物が一方的に非合法化されて官憲から「秘密文書」と扱われるようになり、人家が急襲されて捜索を受け、所持していただけた人さえ犯罪者扱いされることになる。出版物の非合法化はその出版物が世に出なくするだけではない。これを理由に逮捕した人々や押収した文書を通して「配布網」を突き止め、共産党と左翼的大衆団体が持つネットワークの総体の壊滅が追求されていた。占領軍と日本政府の威圧のもとで、逮捕された少なからぬ人々が迂闊に、あるいは怖くなって警察や検察に何かを話し、それが利用されて摘発は拡大していった。摘発される側においては、秘匿していたことを官憲が把握していれば、誰かが裏切って情報を提供したものと疑わざるをえない。権力のスパイから組織を守るために査問も行われた。松崎がこの話題を望んでいないことから、互いが互いに敵のスパイではないかと疑うような陰惨な時代の空気を感じ、私はそれ以上に聞くことはできなかった。

戦後すぐから共産党で活動が続けてきた女性たちにとって、50 年問題当時の党活動には

話したくもなければ思い出したくもない経験が少なくなかったのだろう。また、「分裂によって非正常であった時代」のことを不用意に外部に明かすことが依然として共産党にとって危険であるという警戒心を彼女たちがもっているようにも感じられた。後日、松崎濱子や小山房子と同時期に活動していた他の女性の一人に当時の話を聞きたいと考え、まず挨拶の電話をしてみたところ、私の自己紹介が終わらないうちに一方的に電話を切られてしまったこともあった。別の女性の一人は、個人として私に好意的信頼を示してくださったが、それでも、その時代のことを書かないようにと求められた。

松崎は私が会いに行ったとき、彼女の自伝に「何ごとも素通りをゆるさないお仕事ぶりに敬意を表し、ざっぱくなものですがお役にたてば幸いです」という言葉を添えてサインをしてくださっている。20 数年ぶりこの言葉とサインをまじまじと見つめ、松崎の心境に思いをはせてみるのである。

## 第 2 節 共産党婦人部の責任者だった升井登女尾

松崎によれば、彼女にスパイの疑いをかけたのは、朝鮮戦争下に野坂竜にかかわって共産党婦人部長になった升井登女尾であり、升井の指導の下で小山房子を編集人とする『平和婦人しんぶん』の発行や『血のさけび』の発行・配布が行われたという。



野坂竜(1896年9月28日～1971年8月10日)

東京女高師卒業。1919年野坂参三と結婚。日本労働総同盟婦人部で活動し、1923年日本共産党入党。1928年三・一五事件で逮捕・起訴。参三と共に1931年ソ連に亡命、1947年1月16日帰国。共産党中央委員・婦人部長となる。1950年6月6日、GHQにより公職追放。

野坂竜は民婦協結成の際の共産党婦人部長であり、松崎は竜を信頼して民婦協の活動に取り組んでいた。松崎は朝鮮戦争下には竜の家で共同生活をしていた時期もある。1950年6月、共に共産党中央委員であった野坂夫妻は二人とも公職から追放され、参三は非合法生活に入って中国へ渡った。竜は大田区沼部に家建て、みさご（岩田義道の遺児）とそこで暮らしていた。「小さくても追い出されない住宅がほしいと、公庫からお金を借りて建てられたのです。そして私にもくるようにいわれたので、同居させてもらいました」「野

坂竜さんは、日本の生活様式と外国生活の合理性、そのなかでの楽しみ方を御存じで、精神的にもゆとりがあつて疲れた私はずいぶんいやされました」と、松崎は、竜と生活した季節の折々の楽しかった思い出を自伝に綴っている。

升井登女尾は、1951年2月の共産党第四回全国協議会（四全協）で党中央委員候補となり、同年10月の第五回全国協議会（五全協）で中央委員に選出されている<sup>(16)</sup>。この過程で婦人部長になり、『平和ふじん新聞』の発行や『血のさけび』の刊行や配布活動などに関しても、民主婦人協議会の幹事たちへの助言や指導をしていたものと考えられる。

『血のさけび』の配布活動や小山房子の逮捕やその後の状況を共産党内で最もよく知っていた一人は升井登女尾であつただろう。が、残念なことに、升井は私が調査を始めた頃にはすでに他界していた。本稿では文献調査や聞き取り調査をもとに升井を紹介し、『血のさけび』の刊行や小山房子の活動を取りまいていた環境を考える手がかりにしたい。

升井登女尾は1914年、岐阜県岐阜市で生まれた。生家は市内で有名な鳥料理の料亭で、六人きょうだいの末っ子だった。姉たちの影響で早くから思想的にめざめ、県立岐阜高等女学校を卒業したばかりのとき、社研グループに入り左翼の本を読んでいたために特別高等警察に早朝踏み込まれ、一ヶ月留置所に拘留された。その後釈放されたものの要観察人とされ、どこへ行くにも特別高等警察がついてきて、いたたまれず家を飛び出し、身を隠して紡績工場に入った。大日本紡績山田工場で働いていたところ、治安維持法違反容疑で逮捕され、10ヶ月間投獄されていた。三度目の逮捕は、結婚後わずか五日目であつた。サークル誌にかかわっていたことで夫婦ともども捕らえられ、彼女は3ヶ月で出獄したが、夫の大原は肺湿潤が重くなり、未決で出てきた。1941年12月9日、日米開戦の翌朝、予防拘禁で夫は逮捕され、四ヶ月後に釈放されたときは重篤な状態で、まもなく獄死同様に亡くなった。1944年に造船技師で労働運動家だった升井義則と結婚した。

|                                                                                     |                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  | <p>升井登女尾(1914年8月23日～1995年3月27日)</p> <p>戦前から全協系労働運動に参加し、治安維持法により終戦までに4度の逮捕。朝鮮戦争下には日本共産党の中央委員会婦人部長。1961年から日本母親大会事務局次長を経て事務局長。晩年まで日本母親大会実行委員長をつとめた。</p> <p>著書に『糸ぐるまの歌』（編著、水曜社、1989年）、『歌集 彩樹』（民衆社、3月25日）、『遺稿集 命はぐくむ母親運動』がある。</p> <p>写真は『らいてうを記念する会ニュース』（1995年7月1日）より</p> |
|-------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

治安維持法によって戦前・戦中に数度の投獄、夫の死亡という苦難の時代を生きた彼女は、戦後まもなく志田重男、岩本巖、戎谷春松、島田清、西川彦義、松本惣一郎らが再建

を担った大阪の共産党に参加する。1947年には党大阪地方委員会で婦人部の責任者になり、1949年には日紡貝塚細胞新聞『糸ぐるま』事件の闘争を指導した。当時、共産党関西地方委員会は、戦争によって崩壊した日本経済の資本主義的復興の担い手として登場した紡績産業労働者の組織化を重視していた。升井は後年、『糸ぐるま』闘争が労働運動であるとともに女性運動でもある重要な闘いであったと回顧し、その記録を編集・刊行している<sup>(17)</sup>。

戦後再建期の共産党関西地方委員会の責任者であった志田重男（1949年7月に関西地方委員会から中央へ転出して組織活動指導部部長に就任）は、大阪時代から升井のオーガナイザーとしての力量を信頼していた。升井は、志田重男が公職追放後の共産党臨時中央指導部の指導者であった1951年2月に開催された四全協で党中央委員候補となり、同年10月の五全協で中央委員に選出され、共産党の女性運動政策に責任を負うことになった。

四全協・五全協時代の升井登女尾は志田重男の側近であり、「志田の細君以上に志田派といわれていた」（亀山幸三）が、増山太助は、この時期に中央委員であった升井登女尾、水野進、丸山一郎、吉田四郎などを「志田派」とみなしてくるのは短絡的であり、この人びとの共通した点はいわゆる「実践派」といわれる能力であり、その実行力を志田が正しく買って利用したとみるほうが当たっている、と指摘している<sup>(18)</sup>。

増山は1947年12月に日本共産党の全国オルグとして志田が書記長であった関西地方委員会に派遣され、大阪市旭区赤川町にあった党事務所で志田と起居をともにしており、そのころから升井の実力を知っていた。2000年に私が熱海を訪ねたときに増山は、升井が赤川寮で会議をしていた姿や、青年たちを惹きつける魅力があり、「おばさん、おばさん」と呼ばれて、慕われていた様子について語っている<sup>(19)</sup>。

1955年の六全協で共産党は軍事路線から決別し、以後、朝鮮戦争時代の闘いのかなりの部分が「極左冒険主義」とみなされるようになった。志田重男は六全協からまもなく党を追われている。升井は、1950年代末から母親大会に参加するようになり、1961年に日本母親大会事務局次長となり、以後、晩年まで母親運動の事務局で活動をつづけた。共産党婦人部時代の経験や考えについて公に語らなかったようである。が、当時の升井を知る大阪の活動者は、升井登女尾は六全協前後、苦悩し、「絶対にもう党機関で働くのは嫌だ。大衆運動のなかで生きたい」と語っていたと回想する<sup>(20)</sup>。

その言葉のとおり、1960年代には日本母親大会という大衆運動の事務局で活動するようになった升井だが、遺作になった『歌集 彩樹』には、小河内村の山村工作隊で活動中に死亡した同志を悼む歌も含まれている。他方、六全協後、野坂竜が再び共産党婦人部長をつとめるようになった。

### 第3節 柴又事件と『血のさけび』弾圧事件

『血のさけび』の弾圧によって逮捕された地質調査所の女性たちはまもなく釈放された。その一方、松崎濱子によれば、小山房子は一年か一年半にわたって牢獄にあった。朝鮮戦争時代の一連の弾圧事件には今日にいたるまで謎のままになっているものが多く、小山房子の逮捕以後の状況もほとんどわからない。

そこで本節では、柴又事件―軍事スパイ事件に注目して、小山房子の逮捕がどのような状況の中で発生し、同じころに検挙された人々がどのような処遇を受けたのかを考えてみよう。柴又事件―軍事スパイ事件が展開する逮捕から判決にいたるまでの1年余りの時期は、『血のさけび』発行から小山房子の逮捕・投獄という時期と重なっており、小山房子の政治的受難の背景を考える手掛かりになる。

「柴又事件」は、第2章でも示したように、1951年12月2日に発生した。商業新聞各紙の記事を総合すれば、この弾圧事件の経過は次のようになる。公職追放された党中央委員の長谷川浩を探して柴又の民家を急襲した警察は、長谷川は不在だったものの飯田七三から7人の共産党員を見つけて逮捕した。押収した資料に米軍基地の所在を示す地図などが含まれていたことから、7人は「軍事スパイ」の容疑で占領軍の軍事裁判にゆだねられた。軍事裁判は12月中に開廷され、1952年2月から3月にかけて公判が開かれ、4月3日、被告全員が有罪宣告を受け、飯田七三が重労働6年、罰金1000ドル、丸山一郎が重労働7年、罰金1500ドル、大窪敏三（東京都委員会）が重労働4年、罰金750ドル、他の3名も重労働3～5年や罰金を課せられた。1952年4月28日に講和条約が発効し、占領目的阻害行為処罰令たる政令三二五号も失効する。だが米軍が飯田たちを釈放した後、日本政府が彼らを再逮捕し、裁判で懲役2年、3年といった刑を求刑した。1952年12月26日、東京地裁は全員を有罪とし、懲役一年（執行猶予つき）との判決を言い渡した<sup>(21)</sup>。このようにして飯田たちは講和後にも牢獄に留められたのである。

「柴又事件」が米軍の軍事裁判で裁かれる「共産党軍事スパイ」事件に発展することによって、弾圧は出版物の停刊や地下に潜行した共産党中央委員の搜索というレベルを越え、党組織への監視と摘発を徹底し、党活動を全面的に非合法化しようとする動きが加速した。前述のとおり、柴又事件直後の1951年12月14日に都内24カ所が「軍事スパイの証拠固め」を目的に急襲されたように、出版物の発禁や団体等規正令の適用による搜索・逮捕に加え、柴又事件の捜査を理由として捜査網が拡大していった。

柴又事件の報道において、飯田七三は常に「三鷹事件の」という形容詞つきで報じられている。前年1950年東京地裁は、三鷹事件における共同謀議の存在を「空中楼閣」と否定して、飯田ら共産党員たちの被告全員を無罪としていた。にもかかわらず「三鷹事件の飯田」と繰り返し呼ぶことによって、1949年の下山・三鷹・松島事件直後から続く国民の共産党への恐怖感を増幅させる印象操作が行われた。このような反共主義的印象操作の延長線上に、WIDF調査団報告『血のさけび』を「女子党员のみが読む秘密文書」と事実と反する説明をし、それによって危険な怪文書だと印象づける報道が行われたのである。

被告たちは政令三二五号で禁止される「占領目的阻害行為」で有罪とされたが、後に東京地検が開示した拘留理由は、「被告らは共謀のうえ26年12月2日葛飾区柴又の安田一徳方で軍事基地対策会議を開催、立川基地、横田基地の性格、国鉄の弾薬輸送状況など連合軍軍隊の動静を論議し占領目的に有害な行為をなしたもの」（読売新聞夕刊1952.05.20）ということであり、米軍基地の所在を示す地図が「軍事スパイ」たる証拠とされた。反戦運動がことごとく弾圧を受ける状況の中、米軍の朝鮮戦争遂行に反対し、日本の基地から米軍が出撃している実態を調査することが「占領目的阻害行為」だとされ、地図をもっていった程度なのが軍事スパイの証拠とされているわけである。朝鮮戦争の戦場における米軍の虐殺蛮行を具体的な調査を通して世界に訴えたWIDF報告書である『血のさけび』が

弾圧対象になるのは当時の状況から考えれば驚くに当たらない。

「軍事スパイ」を裁く軍事裁判の報道では、「レボ組織を暴露 日共スパイ軍裁 菊地供述書を採択」（読売 1952.03.14）、「スパイ軍裁 丸山供述書を採用」（同 03/17）、「日共軍事委の指令 スパイ軍裁 飯田の証拠公表▽飯田被告の自供調書」（同 03.19）、「日共埼玉の軍事組織 スパイ軍裁 白石調書で暴露」（同 03.22）と、被告が続々と「自白」していると報じられた。7人の被告の一人であった大窪敏三によれば、被告たちはCIC(米軍対敵諜報機関)東京本部に連行され、監禁され、拷問を受けた。大窪は、両手を手錠で椅子に縛り付けられたまま、ピストルをつきつけられたり、「このまま沖縄に送るぞ!」と怒鳴られたり、昼夜を問わず、「ぶっ続け」の取り調べを受けていた。「取り調べ官や通訳は交替するんだが、こっちは休みなく、寝かせねえ、食わせねえで尋問だ。地下室の暗い中で、こっちにだけ煌々とした光をあてられてね」という状態だった。結局、黙秘し続けたのは石母田達一人だったという<sup>(22)</sup>。

このころ小河内ダムの山村工作隊に加わっていた宇佐美静治は、1977年の論文において、柴又会議の軍事裁判に関連して、「アメリカ占領軍に一人を残して全面的屈服、自白し、これまでの党の軍事活動も組織も壊滅的打撃をこうむって、われわれは組織の再編と転換を余儀なくされるに至った」と書いている<sup>(23)</sup>。言論出版・集会結社の自由が占領軍と日本の司法行政権力によって蹂躪され、政治弾圧が続いている中、活動家の間に被逮捕者の「屈服」や「自白」、誰かの裏切りや通報、スパイの潜入への警戒心が増幅されていたであろう。小山房子が逮捕されたのは、折しも「軍事スパイ裁判」が行われ、大衆運動においても一連の弾圧と活動家の検挙が連続している最中であった。

柴又事件の当時、増山太助が東京都委員会のビューローキャップであった。増山自身はこの会談に関与していなかったが、事件の責任を問われてキャップを解任され、志田重夫は増山の後任に升井登女尾を任命したという。増山は、当時最高指導者であった志田が、柴又事件に対する弾圧を奇貨として「軍事活動に不熱心な都委員会ビューロー」を解散させ、腹心である升井登女尾や浜武司たちを送り込み、その後は志田が握る組織活動指導部の線で都委員会ビューローを動かしていった、と推察していた<sup>(24)</sup>。とはいえ、そのような党機関の人事刷新が『血のさけび』配布活動や小山房子の逮捕への対応に直接的な影響を及ぼしたのかどうかはわからない。

言えるのは、朝鮮戦争最中の日本において米軍の攻撃によって戦場の民間人が被っている被害の実態を伝える活動は、米軍側からは米軍をスパイする大罪であるとみなされたであろうということ、また、一連の弾圧の中で党組織と左派大衆組織が重大な打撃を受けており、党の内部においても相互不信と疑心暗鬼が生まれていたという状況である。

ここまで書いて、私は改めて松崎濱子や升井登女尾らが朝鮮戦争下の体験をあまり語らないままであったことの意味を考え、小山房子の獄中生活や帰郷後の様子に思いをはせるのである。



## (終わりに)

米朝首脳会談の実現に世界が目を瞠っていた2018年の12月、日本婦人団体連合会(婦団連)は1951年刊行の『血のさけび』の復刻版を刊行した。復刻版を案内するチラシには、「非核・平和の北東アジアへ 朝鮮戦争の終結を」と見出しがあり、「国境・思想・信条をこえた女性の連帯」「戦時性暴力を告発し、“平和をつくる女性の力”を示した復刻!今につながる歴史的文書」という紹介文があった。その約20年前に『血のさけび』の調査をしたときには、第3章で述べたように、弾圧前後のことは半世紀を経てもなお関係者にとって語りがたく、また警戒心を呼び覚ます話題であることを知り、なかなかその先まで調査を進めることが難しかった。それだけにいっそう、民婦協の後継団体ともいべき婦団連が『血のさけび』を復刻すると聞いて時の流れを感じ、感慨が深かった。

WIDFは2018年4月に16か国の代表が平壤を訪問し、朝鮮の自主的再統一と平和を支持し、米国・日本を含む「南北分断に関係した国々」が再統一を妨害しないように求める宣言を出していた。婦団連が発行する『婦人通信』no.712(2018年7月)には、このWIDFの取り組みとともに『血のさけび』の紹介も載っている。婦団連は同年2月にWIDF本部に手紙を送り、「朝鮮戦争停戦に貢献した歴史をもつWIDFが、南北対話を歓迎し、朝鮮半島の非核化・恒久平和の実現に貢献すること」を呼びかけたという。そのようなWIDFとのつながりのなかで、『血のさけび』の復刻が行われたようである。

「平和をつくる女性会」主催のフォーラムにおいて私が『血のさけび』の報告をした理由のひとつは、その準備過程で金貴玉さんが『血のさけび』に興味を抱き、私が婦団連による復刻版を韓国へ送るなどの研究交流があったからだった。

WIDF報告書は女性の国際連帯によって作成され、世界中で配布され朝鮮戦争停戦のための国際世論形成に大きな役割を果たした。が、WIDF報告書は西側諸国ではソ連や共産党とのつながりを理由に攻撃を受けた。配布活動をした女性たちが弾圧を受けたり、危険な怪文書のようにレッテルがはられて一般市民の手に入りにくい状況がつくられたりした。本稿でとりあげた小山房子の受難は、英国のモニカ・フェルトンやフランスのジレット・ジグラー、西ドイツのリリー・ベヒター、デンマークのケート・フレロン、キューバのカンデリア・ロドリゲスといったWIDF調査団員が帰国後に解職、誹謗、逮捕、起訴といった攻撃を受けたことと通底している。地質調査所労働組合は二人の組合員が「女子党員のみの読む秘密文書」を所持していたとして逮捕されたとき、『血のさけび』は平和運動の一部であり、朝鮮戦争における米軍犯罪を訴える内容であることをひるまずに主張した。が、配布した民婦協自体が当時は政治弾圧を避けるために慌てて回収せざるを得なかった。

2021年は『血のさけび』の刊行から70周年である。これほどの歳月を経た今も、依然として朝鮮戦争の終戦は実現していない。私たちは20世紀後半に西側諸国を支配した冷戦の政治的偏見から自由に、この報告書それ自体を読むことができるし、実際に読んでみれば、それが空疎なプロパガンダの作文でなかったことがわかる。小山房子の逮捕と投獄は、日本女性運動の陥没期を象徴しているが、国際的な女性の連帯によってWIDF報告書やこの配布活動に光があてられ、歴史的真相が取り戻され、朝鮮戦争を終わらせる力になることを期待している。

## 註

- ① WIDF は、日本では「国際民主女性連盟」、「国際民主婦人連盟」、「国際民婦連」などとも呼ばれるが、本稿では WIDF に表記を統一した。WIDF 報告書及び WIDF 調査団に参加した女性たちに関しては、次の拙稿を参照。「国際女性調査団のみた朝鮮戦争」（『女性・戦争・人権』第 3 号、126-148 頁、2000 年 5 月）、「冷戦体制形成期の女性運動—占領下の日本民主婦人協議会と朝鮮戦争」（三宅義子編『日本社会とジェンダー』（明石書店、2001 年）、「解説」（編集復刻版『国連軍の犯罪』不二出版、2000 年）、「モニカ・フェルトンと WIDF の朝鮮戦争真相調査団」（特集 WIDF の朝鮮戦争真相調査団に参加した女性たち）、同前 7 号、70-96 頁、2012 年、「モニカ・フェルトンの軌跡 1952-1956」（特集 冷戦時代の国際女性運動）同前 8 号、6-38 頁、2013 年、「WIDF 国際女性調査団に参加した 3 人の中国人女性：劉清揚・白朗・李鏗（特集 抗美援朝時代の中国女性史）」同前 9 号、134-152 頁、2014 年、「カンデラリア・ロドリゲス・ヘルナンデス：朝鮮民主主義人民共和国を三度訪れたキューバ人女性」（特集 冷戦時代の国際女性運動）同前第 10 号、90-106 頁、2015 年、「ケイト・フレロン・ヤコプソン：デンマークのレジスタンスから国際平和運動へ」（特集 WIDF 調査団に参加したヨーロッパの女性：レジスタンスから朝鮮戦争停戦運動へ）同前第 11 号、8-31 頁、2017 年。
- ② コリア国際戦犯法廷は、2001 年 6 月 23 日、米軍の虐殺蛮行の真相を究明する全民族特別調査委員会、International Action Center（IAC）、平和のための在郷軍人会の主宰でニューヨークにおいて開催された。ラムゼイ・クラーク（IAC、元アメリカ司法長官）を主席検事として、戦争犯罪容疑で米国政府を起訴し、多数の被害側の証言や歴史研究者の証言などを聴取した後、ドゥプイ（元ハイチ駐在大使）を委員長とする陪審団（各国の法律家や平和運動家 30 人で構成）は全員一致で米国政府に有罪評決を下した。코리아国際戦犯法廷に提出された資料の中に、WIDF の調査報告書がふくまれている。
- ③ 伊藤康子『戦後日本女性史』（大月書店、1974 年）、松崎濱子『すそ野をゆく—オルグ活動六十年』（学習の友社、1991 年）など。小林登美枝・米田佐代子らが執筆した日本婦人団体連合会編『婦人のあゆみ百年』（大月書店、1978 年）は、民婦協が WIDF 報告書を刊行したことに言及があるが、小山房子の逮捕にはふれていない。
- ④ 「長崎分会歴代役員」『三菱長崎造船労働組合四〇年史』（全造船機械労働組合三菱重工支部長崎造船分会発行、1988 年、230～232 頁）
- ⑤ 十年史編集委員会編『三菱長崎造船労働組合史』全日本造船労働組合三菱造船支部長崎造船分会、1958 年、67 頁
- ⑥ 全日本造船労働組合青年部『青年部ニュース』第 7 号、1948 年年 3 月 5 日
- ⑦ 全日本造船労働組合青年部「一九四八年一月八日—十日 青年部第四回常任委員会決定事項並議事概要 附婦人協議会第四回常任幹事会決定事項並議事概要」大原社会問題研究所所蔵
- ⑧ 日本共産党三菱長崎造船所委員会編集発行『三菱もうひとつの素顔：長崎造船所でのたたかひの歴史』2009 年、45 頁
- ⑨ 「全日本造船労働組合第四回定期大会報告書」大原社会問題研究所所蔵。労働運動の世界では 1948 年頃から全労連の急進性や共産党の影響力に対抗して、民同派が各組合・連合体・産別会議内で活動を強めた。石川島播磨の金杉信秀らは 1949 年 7 月に民同右派や社会党右派が結成した「独立青年同盟（独青）」の中心人物の一人であり、全船の中にも民同の影響力が強まっていった。造船労働運動の民同派については、伊藤隆他編『戦後労働史研究 金杉秀信オーラルヒストリー』（慶應義塾大学出版会、2010 年）など参照。

- 
- (10) 松崎濱子『すそ野をゆくーオルグ活動六十年』学習の友社、1991年、144頁
  - (11) 前掲『三菱長崎造船労働組合四〇年史』16-18頁
  - (12) 田村紀雄「日共地下新聞」『日本の一〇〇年』毎日新聞社 pp248-249
  - (13) 荻野富士夫『戦後治安体制の確立』岩波書店、1999年、126-127頁
  - (14) 同前
  - (15) 玉城肇は経済学・歴史学の研究者であり、戦前から『日本家族制度批判』（福田書房 1934）などの著作があり、搜索を受けた半年前には『世界女性史』（刀江書院）、翌1952年には『フェミニズムの歴史』（理論社）なども出している。
  - (16) 亀山幸三『戦後日本共産党の二重帳簿』現代評論社、1978年、141頁及び増山太助「戦後運動史外伝（一八）松本一三と牧野弘之」『労働運動研究』1996年6月、36頁、同「戦後運動史外伝（二〇）小松豊吉と相賀珊吉」『労働運動研究』1996年8月、38頁
  - (17) 「天皇美化はアホらしい 日本母親大会事務局長升井登女尾さん」『赤旗』1988年9月27日、升井登女尾編『糸ぐるまの回想』水曜社、1989年、日本母親大会連絡会編集発行『升井登女尾遺稿集 いのち育む母親運動に生きて』1995年。
  - (18) 亀山前掲書、142頁、増山太助「戦後運動史外伝（一八）松本一三と牧野弘之」『労働運動研究』1996年6月、36頁、筆者による増山太助のインタビュー、2000年、於静岡県熱海市伊豆山1130番地ライフケア伊豆山。
  - (19) 筆者による岩井会へのインタビュー、於大阪市港区港晴3-3-18-3F、2008年4月18日
  - (20) 大窪敏三『まっ直ぐ』南風社、1999年、235-239頁
  - (21) 宇佐美静治「五〇年代日共軍事闘争の私的総括」『新地平』38号、1977年7月、86頁。
  - (22) 増山太助前掲「戦後運動史外伝（一八）松本一三と牧野弘之」37頁、「戦後運動史外伝（二九）保坂浩明と車永秀」『労働運動研究』1997年5月、37頁
  - (23) 日本母親大会連絡会編集発行『升井登女尾遺稿集 いのち育む母親運動に生きて』1995年。
  - (24) 前掲、筆者による増山太助のインタビュー

## 執筆者&翻訳者 紹介(50音順)

### ◇今岡良子 (いまおか・りょうこ)

大阪大学言語文化研究科言語社会専攻 准教授。モンゴル遊牧社会論 最近の研究テーマは、遊牧の原理と畜産物資源の物性が求める女性の手仕事や労働について。それが、モンゴルの遊牧文化を継承、発展させ、遊牧民でいながら遊牧家庭の女性の自立のすべとなってきたことについて。

### ◇北原恵 (きたはら・めぐみ)

大阪大学名誉教授。美術史学、ジェンダー研究者。編著に『アート・アクティヴィズム』(インパクト出版会、1999)、『アート・アクティヴィズム 2 攪乱分子@境界』(インパクト出版会、2000)、『アジアの女性身体はいかに描かれたか 視覚表象と戦争の記憶』編著(青弓社、2013)、V・H・マイナー『美術史の歴史』(ブリュッケ、2003年)など。

### ◇鈴木裕子 (すずき・ゆうこ)

早稲田大学文学学術院元教員。早稲田大学ジェンダー研究所招聘研究員。女性史・社会運動史研究者。主要編著書に、『広島県女性運動史』ドメス出版、『フェミニズムと戦争協力 婦人運動家の戦争協力』マルジュ社、『山川菊栄集』岩波書店、『堺利彦女性論集』三一書房、『フェミニズム、天皇制、歴史認識』インパクト出版会、『ジェンダーの視点からみる日韓近代史』梨の木舎、『金子文子 わたしはわたし自身を生きる』梨の木舎、『忘れられた思想家・山川菊栄 フェミニズムと戦時下の抵抗』梨の木舎(2022年4月)など。

### ◇宋連玉 (ソン・ヨノク)

青山学院大学名誉教授。文化センター・アリラン館長。「日本の植民地支配と国家的管理売春—朝鮮の公娼を中心にして」(『朝鮮史研究会論文集』(32), 1994年10月、pp37-87)など、早い時期から日本の朝鮮植民地支配と公娼制度を解明する研究に取り組む。『脱帝国のフェミニズムを求めて：朝鮮女性と植民地主義』(単著、有志舎、2009年)、『「慰安婦」・戦時性暴力の実態』(共編著、緑風出版、2000年)、『軍隊と性暴力：朝鮮半島の20世紀』(共編著、現代史料出版、2010年)、「上海に見る遊郭と慰安所の関係性」『戦後日本の＜帝国＞経験』(青弓社、2018年)、「帝国の性管理政策と人身売買—からゆきさんから日本軍「慰安婦」まで—」『人々がつなぐ世界史』(ミネルヴァ書房、2019年)など、著書多数。

### ◇鄭玟汀 (チョン・ヒョンジョン)

韓国・ソウル生まれ。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻博士課程修了。ドイツ・アレクサンダー・フォン・フンボルト財団奨学研究員、ベルリン自由大学東アジア研究所客員研究員、京都大学研修員を経て、現在千葉大学非常勤講師、立命館大学・中央大学客員研究員、著書『天皇制国家と女性—日本キリスト教史における木下尚江』(教文館、2013)、共著『韓国・朝鮮の美を読む』(CUON、2021)など。

### ◇永谷ゆき子 (ながや・ゆきこ)

通訳・翻訳業。訳書としてアジア現代女性史シリーズ 6『朝鮮半島の分断と離散家族』(明石書店、2008)、『アジア現代女性史』各号に以下の翻訳。「朝鮮戦争の韓国軍「慰安婦」制度について」ほか、4号、2008年。「基地村女性問題解決のための対案模索討論会」6号、2010。「長編詩 夕焼けに帰り、夕焼けに行く」8号、2013。「爆撃：米空軍の空爆記録で読む朝鮮戦争 1・3章」14号、2021。

◇西田千津（にしだ・ちづ）

中国近代史研究者。奈良女子大学大学院博士課程単位取得退学。中国人戦争被害者の要求を支える京都の会、ハーグの会（女性国際戦犯法廷ハーグ判決を実現する会）などで活動。「女性・戦争・人権」学会運営委員。奈良・長谷川テル顕彰の会推進委員。「アヘン戦争下の女性」（『中国女性史研究』24号、2015年）など。

◇藤目ゆき（ふじめ・ゆき）

大阪大学教授。著書に、『性の歴史学—公娼制度・堕胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』（不二出版、1997年）、『女性史からみた岩国米軍基地—広島湾の軍事化と性暴力』（ひろしま女性学研究所、2010年）、『「慰安婦」問題の本質—公娼制度と日本人「慰安婦」の不可視化』（白澤社、2015年）、『占領軍被害の研究』（六花出版、2021年）、史料の編集復刻に『国連軍の犯罪—民衆・女性から見た朝鮮戦争』（不二出版、2000年）、『占領軍による人身被害調査資料』全六巻（六花出版、2021年）など。

◇李青凌（リ・チンリン）

中国「慰安婦」歴史博物館元館長助手（2017～2018）、上海師範大学「慰安婦」問題研究センター調査チームのメンバー（2019～現在）。「中国における新たな「慰安婦」資料の発掘—近年の文書史料・フィールドワークの事例から—」『アジア現代女性史』第14号（2021年3月、126～137頁）。

●カバー写真 解説

（写真 左上）

オークランドで開かれた女性の会議に参加。 2003年5月31日

（写真 右上）

長野県で合宿。 2004年5月

（写真 右下）

大越さん、来日したミリアムと吹田で再会。 2004年12月

（写真 左下）

韓国・淑明大学からのゲストを迎えて。 2006年10月23日

第十五号

2022 年 3 月 25 日発行

ISSN 1880-1102

編集者—「アジア現代女性史」編集委員会

発行者—アジア現代女性史研究会（代表：藤目ゆき）

カバーデザイナー—岩見利子

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1 番 2 号

大阪大学人間科学研究科 藤目研究室気付

e-mail: [fujime@hus.osaka-u.ac.jp](mailto:fujime@hus.osaka-u.ac.jp)

アジア現代女性史(CAWA)ホームページ <http://cawa.jpn.org>





アジア現代女性史  
2021 第15号  
アジア現代女性史研究会